

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和55年度

昭和56年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査報告書

—昭和55年度—

序

奈良市内には現在迄に約 600 ケ所の遺跡が知られておりますが、なかでも、天平文化の咲き誇った奈良の都、平城京跡は南北 4.8 km、東西 6 km を占める広大な遺跡です。旧市街区から伏見丘陵に至る市の中心部の殆んどが、この中に含まれています。今年 3 月に市の人口は 30 万に達し市内の至るところで、新しい開発が行われておりますが、その大半はなんらかの形で遺跡にかかっております。破壊されつつある平城京跡をはじめとする遺跡の記録調査や保存措置を、迅速かつ適確に行う為の体制づくりが急務となるに及び、市でも昭和 54 年 9 月には文化財室を設置し、以後、奈良国立文化財研究所をはじめとする関係諸機関の御指導を得て調査を実施してきました。今年度もまたこれらの発掘成果をまとめて公表することになりました。

調査はすべて開発に伴う事前調査ですが、今年は平城京以外でも大きな成果を得ることができました。本書に示した調査の成果が幾分なりとも活用いただければ幸いかと存じます。しかしながら文化財室発足後まだ日も浅くなれば不十分な点が眼につくかと思いますが御批判、御教示をお願いします。

最後に玉稿をお寄せいただいた村田修三先生、発掘調査、報告書作製にあたって、御指導御協力をいただいた奈良国立文化財研究所、奈良県文化財保存課、奈良市文化財保護審議会をはじめ、関係諸機関の方々に対して厚く御礼申し上げます。

昭和 56 年 3 月

奈良市教育委員会

教育長 藤 井 宗 治

例 言

1. 本書は、昭和55年度に奈良市教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書を集録したものである。

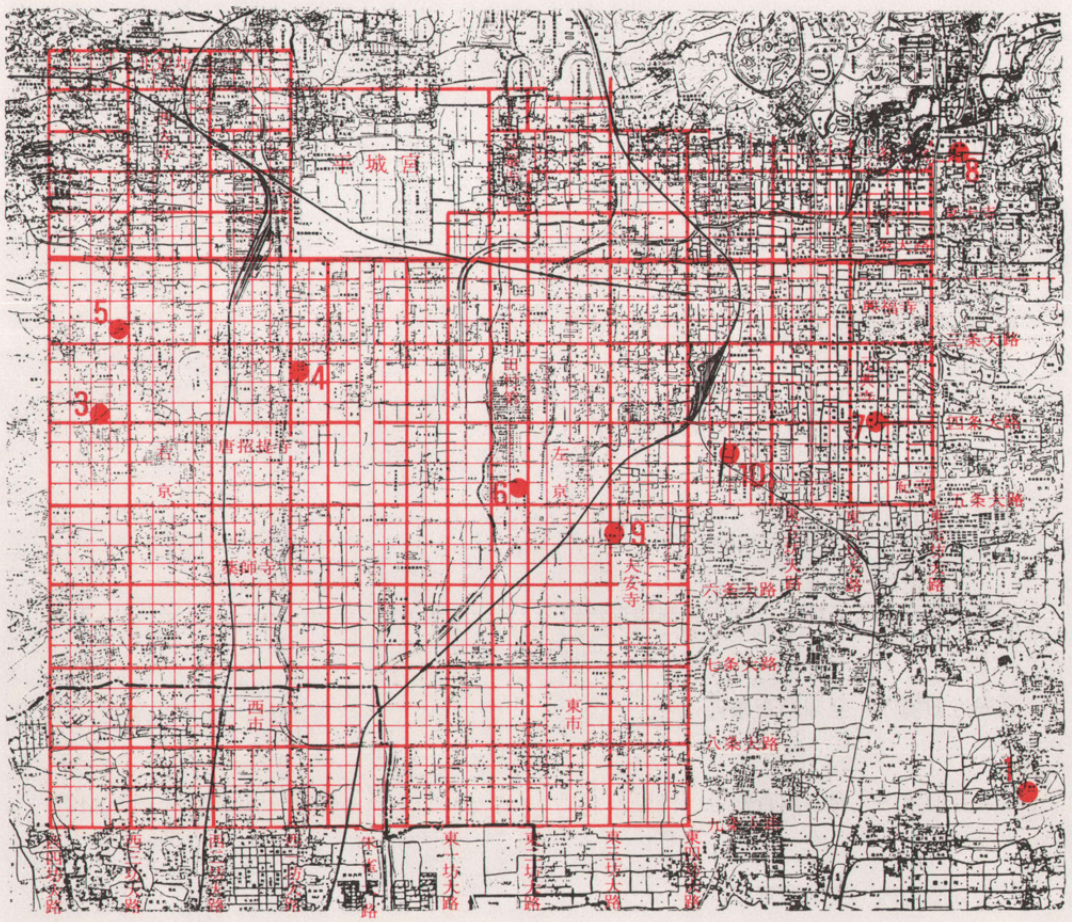
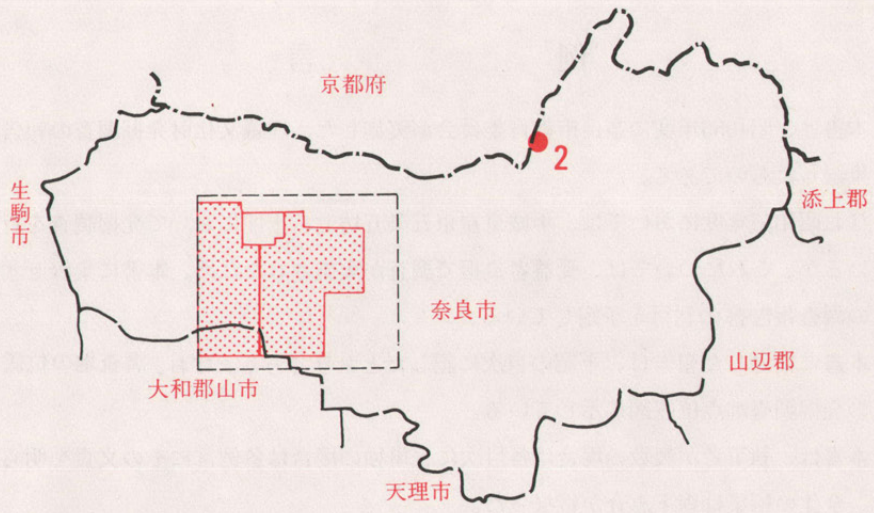
なお昭和55年度においては、平城京左京五条五坊七、十坪において発掘調査を行なっているが、これについては、受益者負担で調査が実施されたため、本書に集録せず別にその調査報告書の刊行を予定している。

1. 本書に集録した報告は、下記の目次に記したとおりである。なお、調査地の位置は次頁の発掘調査地点位置図に示している。

1. 本書は、執筆者が複数の場合は各目次に、単独の場合は各例言にその文責を明らかにし、全体の編集は森下恵介が行なった。

目 次

古市城跡 発掘調査報告	1
宮山4号墳 発掘調査報告	85
平城京右京四条四坊五坪 発掘調査報告	95
平城京右京四条一坊十五坪 発掘調査報告	103
平城京右京三条四坊四坪 発掘調査報告	113
平城京左京五条二坊十三坪 発掘調査報告	119
元興寺旧境内 発掘調査報告	121
東大寺旧境内 発掘調査報告	127
大安寺旧境内 発掘調査報告	133
付載 昭和55年度立会調査一覧	137



発掘調査地点位置図

調 査 地 一 覧

	名 称	所 在 地(調査地)	概 要	調 査 担 当 者
1	古市城跡	奈良市 古市町223番地 城山79～80番地	中世城郭の調査 城郭遺構とともに築城以前の中 世墓地検出	森 下 恵 介 西 崎 卓 哉 中 井 公 篠 原 豊 一
2	宮山4号古墳	奈良市 北村町宮山	木棺直葬墳、須恵器、管玉、石 製紡錘車出土	森 下 恵 介
3	平城京 右京四条四坊 五坪	奈良市 平松町171番地	四条大路北側溝、五・十二坪間 坊間路東側溝、五坪内の柵1、 建物2棟検出	森 下 恵 介 西 崎 卓 哉 中 井 公 篠 原 豊 一
4	平城京 右京四条一坊 十五坪	奈良市 四条大路5丁目 139-1番地	奈良時代井戸2基、溝の他 中世の土砂採取のためと思われ る土壇検出	森 下 恵 介 篠 原 豊 一
5	平城京 右京三条四坊 四坪	奈良市 宝来町765-5, 767番地	中世溝3条、井戸1基他検出	森 下 恵 介 篠 原 豊 一
6	平城京 左京五条二坊 十三坪	奈良市 大安寺町345番地	奈良時代建物検出	西 崎 卓 哉 篠 原 豊 一
7	元興寺旧境内	奈良市 鶴町16番地 芝新屋町16番地	元興寺旧境内で実施した2ヶ所 の調査	関 川 尚 功 (奈良県教育委員会) 阿 部 誠 森 下 恵 介 篠 原 豊 一
8	東大寺旧境内	奈良市 雑司町112-3番地	東大寺北面大垣推定地 北面大垣は検出されず。	阿 部 誠 篠 原 豊 一
9	大安寺旧境内	奈良市 大安寺町1042 1043番地	大安寺西面築地推定地 西面築地は検出されず。	篠 原 豊 一
10	平城京 左京五条五坊 七・十坪	奈良市 西木辻町47番地	七・十坪間坊間路、七坪内の建 物10数棟、井戸6基等を検出 (別途に報告)	西 崎 卓 哉 中 井 公

※ 番号は発掘調査地点位置図と対応する。

古 市 城 跡

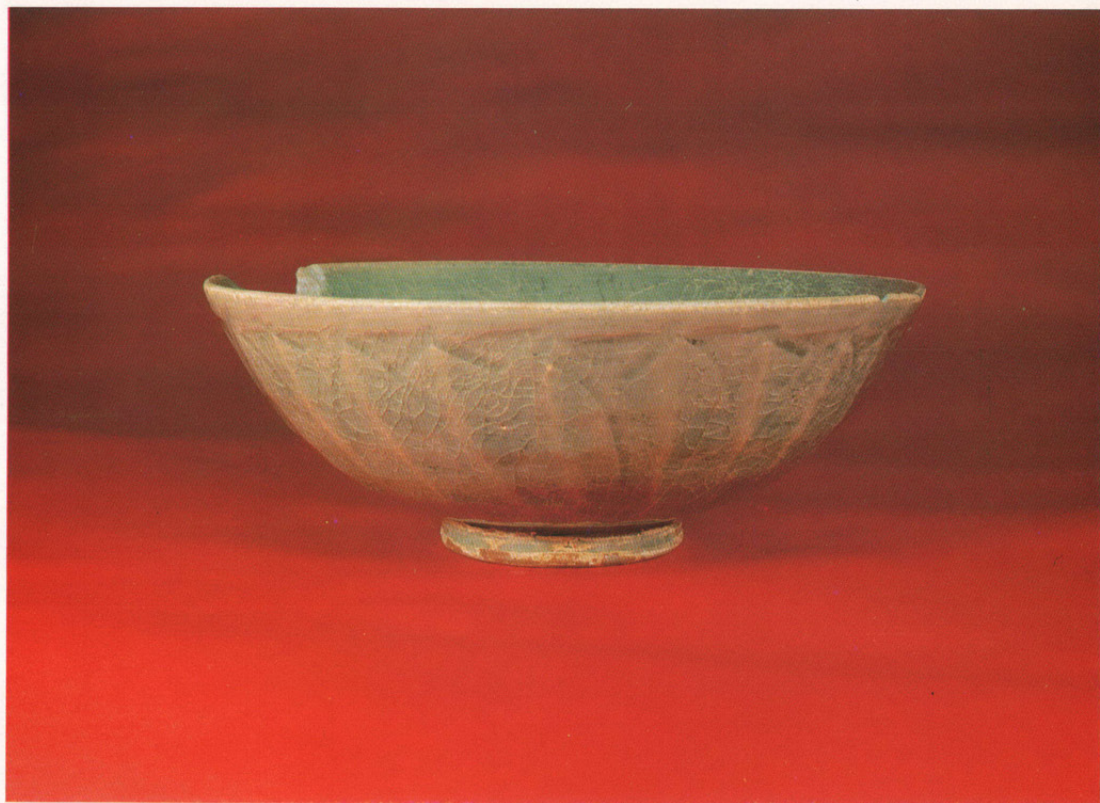
発掘調査報告



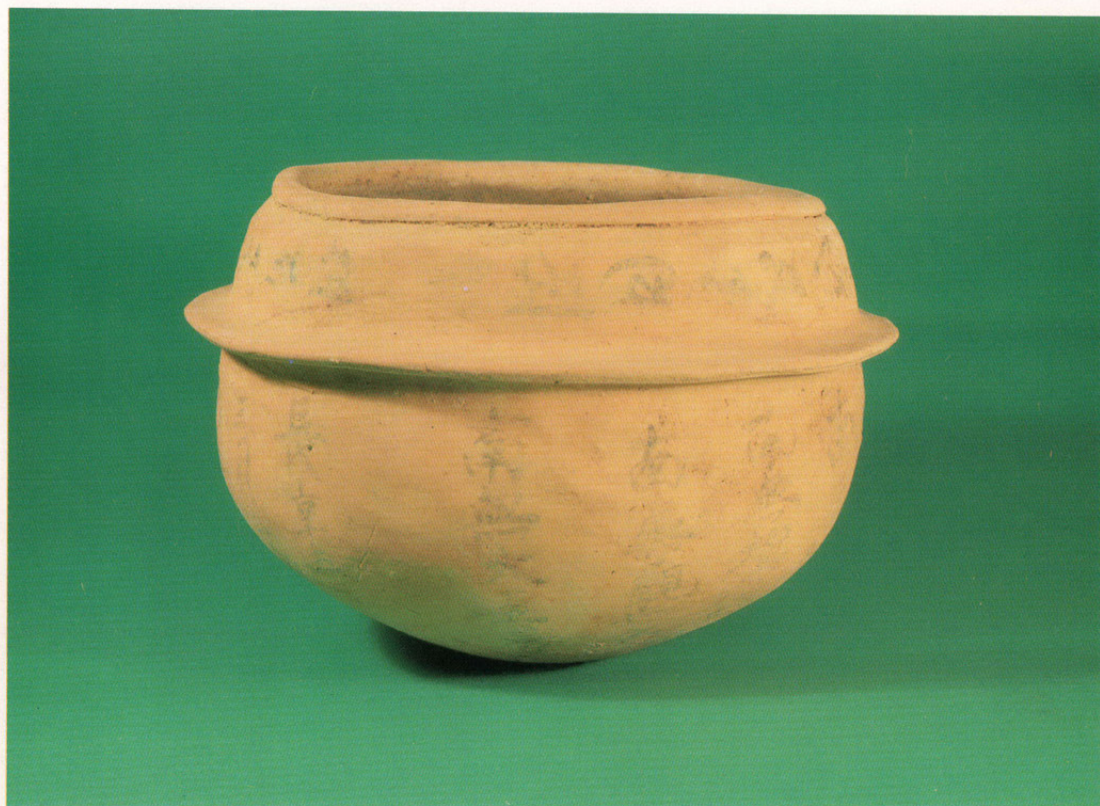
1. 城山地区C区中世墓地石冢



2. 城山地区B区中世墓地



1. 城山地区出土青磁碗



2. 城山地区出土藏骨器

本文目次

I	調査の契機と経過	(森下恵介)	1
II	位置と環境	(森下恵介・西崎卓哉)	1
III	上ノ段・高山地区の調査	(西崎卓哉)	5
	1. 検出遺構		6
	2. 出土遺物		10
IV	城山地区の調査		12
	1. 検出遺構		12
	(A) 城郭の遺構	(森下恵介・篠原豊一)	12
	(B) 中世墓地の遺構	(森下恵介)	22
	2. 出土遺物		27
	(A) 土器類	(森下恵介・篠原豊一)	27
	(B) 瓦類	(森下恵介)	37
	(C) 蔵骨器	(森下恵介)	41
	(D) 石造物	(森下恵介)	52
	(E) その他の遺物	(森下恵介)	58
V	まとめ	(森下恵介・西崎卓哉)	61
	1. 城郭遺構について		61
	2. 中世墓地遺構について		62
+付章	古市氏と古市城	(村田修三)	65

挿 図 目 次

第1図	周辺の中世遺跡と古市城跡の位置	2
第2図	古市城周辺字限図	3
第3図	古市城周辺地形図	4
第4図	発掘区位置図	5
第5図	第3トレンチ堆積土層図	6
第6図	第4・5トレンチ堆積土層図	7
第7図	第9トレンチ堆積土層図	8
第8図	上ノ段・高山地区の地形と検出遺構（折り込み）	8
第9図	出土土器	10
第10図	出土石製品	11
第11図	発掘区位置図	12
第12図	城山地区の地形と検出遺構（折り込み）	12～13
第13図	A区、B・C区堆積土層図	13
第14図	E区検出遺構平面図（折り込み）	14～15
第15図	E区堆積土層図	15
第16図	S X 01平面・断面図	16
第17図	埋甕 I 平面・断面図	17
第18図	F区検出遺構平面図	18
第19図	F区堆積土層図	19
第20図	S D 14平面・断面図	20
第21図	H区遺構平面図	21
第22図	B区西南中世墓地遺構平面図	22
第23図	C区中世墓地遺構平面図（折り込み）	24～25
第24図	D区中世墓地遺構平面図（折り込み）	24～25
第25図	S X 02平面・断面図	26
第26図	S K 04出土土器・S X 01出土土器	28
第27図	埋甕・埋甕内出土土器	30
第28図	包含層出土土器	32
第29図	出土瓦質土製管・瓦質土器	33
第30図	出土瓦質土器	34

第31図	出土陶磁器	35
第32図	出土須恵器	36
第33図	出土軒丸瓦・軒平瓦	38
第34図	出土丸瓦・平瓦	39
第35図	出土平瓦	40
第36図	出土鬼瓦	41
第37図	出土蔵骨器(1)	43
第38図	出土蔵骨器(2)	44
第39図	出土蔵骨器(3)	45
第40図	出土蔵骨器(4)	46
第41図	出土蔵骨器(5)	47
第42図	出土蔵骨器(6)	48
第43図	出土蔵骨器(7)	49
第44図	出土蔵骨器(8)	50
第45図	出土蔵骨器(9)	51
第46図	出土空 風輪・火輪・水輪	53
第47図	出土地輪	54
第48図	「覺妙房」銘の地輪と蔵骨器	55
第49図	出土五輪塔台座	55
第50図	出土一石五輪塔・宝篋印塔基台	56
第51図	出土板碑台座	57
第52図	出土石仏屋根	58
第53図	出土錢貨拓影	59
第54図	出土金属製品	59
第55図	出土石製品	60
第56図	古市墓地所在名号碑	62
第57図	古市氏系図	65
第58図	古市氏の勢力関係地図	68

挿 表 目 次

表1	出土石造物計数表	52
----	----------	----

別 表 目 次

1	出土蔵骨器墨書銘集成	73
2	出土石造物法量表(1)	81
3	出土石造物法量表(2)	82
4	出土石造物法量表(3)	83

図 版 目 次

卷首図版 1	1. 城山地区C区中世墓地石仏	2. 城山地区B区中世墓地遺構	
卷首図版 2	1. 城山地区出土青磁碗	2. 城山地区出土蔵骨器	
図版 1	古市城跡全景	図版24	城山地区出土土器(1)
図版 2	上ノ段・高山地区全景	図版25	城山地区出土土器(2)
図版 3	上ノ段・高山地区調査前	図版26	城山地区出土土器(3)
図版 4	上ノ段・高山地区検出遺構(1)	図版27	城山地区出土陶磁器・須恵器
図版 5	上ノ段・高山地区検出遺構(2)	図版28	城山地区出土軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦
図版 6	上ノ段・高山地区検出遺構(3)	図版29	城山地区出土平瓦
図版 7	上ノ段・高山地区検出遺構(4)	図版30	城山地区出土平瓦・鬼瓦
図版 8	上ノ段・高山地区検出遺構(5)	図版31	城山地区出土蔵骨器(1)
図版 9	上ノ段・高山地区出土遺物	図版32	城山地区出土蔵骨器(2)
図版10	城山地区全景	図版33	城山地区出土蔵骨器(3)
図版11	城山地区調査前	図版34	城山地区出土蔵骨器(4)
図版12	城山地区予備調査第1トレンチ	図版35	城山地区出土蔵骨器(5)
図版13	城山地区検出城郭遺構(1)	図版36	城山地区出土蔵骨器(6)
図版14	城山地区検出城郭遺構(2)	図版37	城山地区出土蔵骨器(7)
図版15	城山地区検出城郭遺構(3)	図版38	城山地区出土蔵骨器(8)
図版16	城山地区検出城郭遺構(4)	図版39	城山地区出土石造物(1)
図版17	城山地区検出城郭遺構(5)	図版40	城山地区出土石造物(2)
図版18	城山地区検出城郭遺構(6)	図版41	城山地区出土石造物(3)
図版19	城山地区検出中世墓地遺構(1)	図版42	城山地区出土石造物(4)
図版20	城山地区検出中世墓地遺構(2)	図版43	城山地区出土石造物(5)
図版21	城山地区検出中世墓地遺構(3)	図版44	城山地区出土石造物(6)
図版22	城山地区検出中世墓地遺構(4)	図版45	城山地区出土金属製品・石製品
図版23	城山地区検出中世墓地遺構(5)		

I 調査の契機と経過

奈良市古市南町の集落東側の舌状台地は、室町時代の土豪古市氏の居城跡として知られている。今回の調査は、この古市城推定地内である古市町223番地他において奈良市が計画した東市小学校運動場拡張工事、および古市町城山79～80番地での茶畑造成工事のそれぞれについてその事前発掘として奈良市教育委員会が実施したものである。

東市小学校運動場拡張予定地（字「上ノ段」「高山」）における調査では、その工事予定が現在、同校の校地である「上ノ段」の台地南斜面を掘削し、字「高山」との間の谷を埋めるものであり、調査対象面積は約13,000㎡に及ぶ。調査は地形測量図作成ののち、調査対象地内に城郭遺構の確認を目的として、12ヶ所にトレンチを設定した。発掘総面積は約1,000㎡であり、発掘調査は昭和55年7月31日に開始し、同年9月4日に現地での調査日程を終了した。調査の結果、台地南斜面に残る狭い平坦地が、城の郭として築造されたものであることを確認するとともに、南斜面中腹に設けられた城郭の堀を検出し、古市城の遺構の一端を明らかにすることができた。

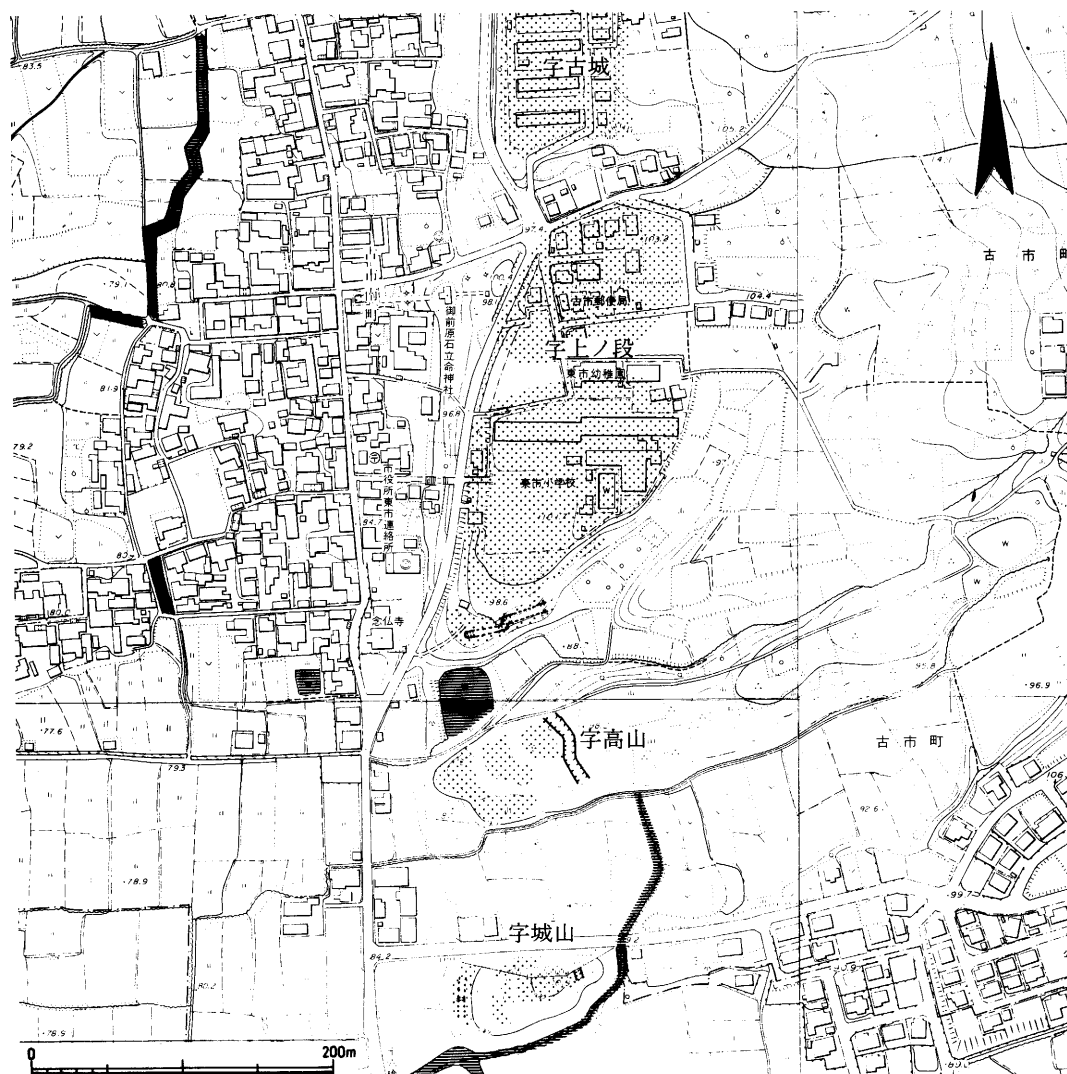
城山79～80番地における調査では、まず調査対象地約5,400㎡において、城郭遺構の確認を目的として東西約90m、幅2mのトレンチを中心に4ヶ所のトレンチを設定した。この予備調査においては、城郭遺構とともにその下層より中世墓地の一部を検出した。このためひきつづきトレンチを中心に調査区の拡張を行った。発掘総面積は約650㎡であり、調査は昭和55年11月19日に開始し、翌昭和56年2月7日に現地での調査日程を終了した。城山の調査では、上ノ段、高山地区と同じく遺存していた平坦地が、城の郭として築造されたものであることを確認し、郭内の遺構の一部についてもその内容を明らかにしえた。また、その下層より検出した中世墓は100基に及び、中世墓地のあり方を知る上で大きな成果をあげることができた。

II 位置と環境

古市城跡は、奈良市街地の南方約2km、春日断層崖より西へ広がる春日野台地縁辺部に位置する。この春日野台地一帯には、古市方形墳、車塚古墳、馬垣内古墳、高円神社古墳群などの古墳時代前期から後期におよぶ古墳が存在し、古市廃寺、横井廃寺などの古代寺院の存在も知られ、古代より岩井川水系を中心としたひとつの地域が形成されていたことがうかがえる。

古市氏は、室町時代14世紀～15世紀にこの地域を本拠とし、興福寺大乘院方衆徒の中で最大の勢力をもっていたことが知られ、古市城はその居城として知られている。現在その城跡は開析谷^{注1)}によって区切られた4ヶ所の舌状台地に推定され、この4ヶ所の舌状台地は北よりそれぞれ字「古城」「上ノ段」「高山」「城山」と呼称される。なおこれらの北側の字「西開」「油山」の台地をも城跡に含める

II 位置と環境



第3図 古市城跡周辺地形図 (1/5,000)

現在の古市南町の集落は、その地名が鎌倉末、ここに存在した「福島市」が奈良へ移されたため起ったものであるが、市の所在地は字「市立垣内」として残る。集落の東北部には環濠の名残りも観察され、文献の記載から、古市城の城下集落としての様相を室町期よりなしていたことがうかがえる。また上街道、名張街道のいずれにも近く、「馬借」といった地名もあり、中世において交通の要所であったものと思われる。古市氏の勢力の背景には馬借などの交通運輸手段の掌握があったことが指摘されており、古市城の奈良の南郊をおさえるといった立地条件はみのがせない。

注1) 永島福太郎「古市澄胤『戦乱と人物』

注3) 字名では「高山」に含まれる。

熱田公「古市澄胤の登場『中世日本の歴史像』1978

注4) 『大乘院寺社雑事記』

注2) 村田修三「古市城」『日本城郭大系10』1980

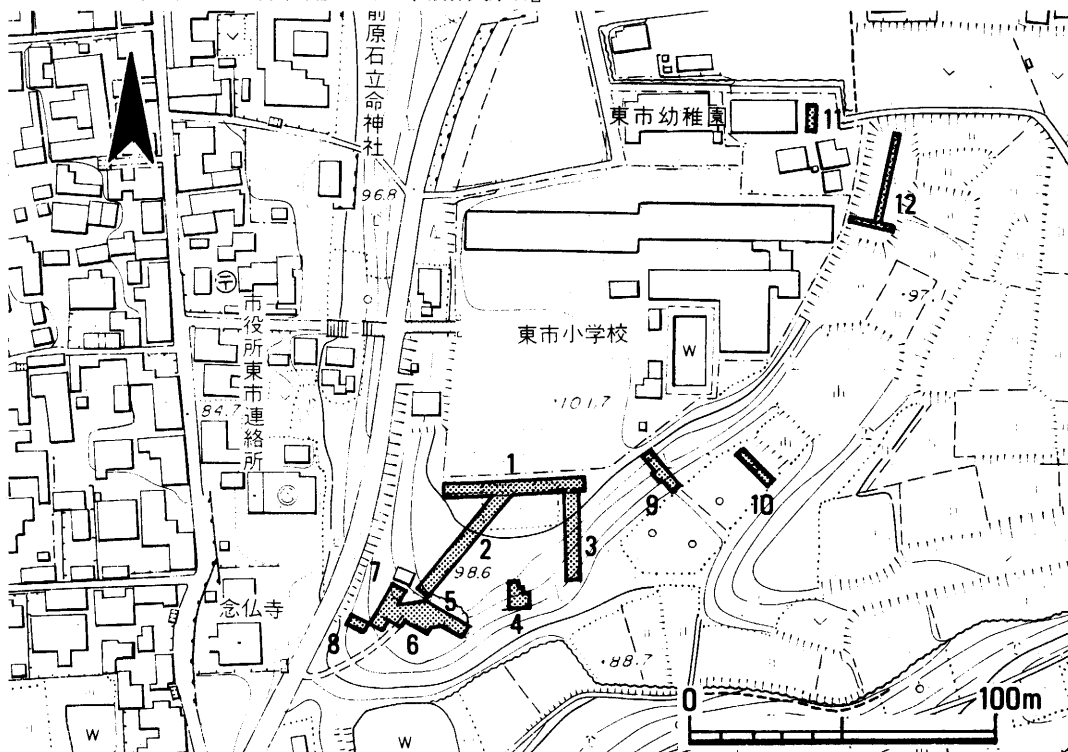
Ⅲ 上ノ段・高山地区の調査

調査の対象となった地区は、現在奈良市立東市小学校が位置する舌状台地の南端部であり、約13,000㎡の面積を持つ。これまでの城郭復元研究では本台地上に古市城中心部分の存在が推定され、南側の開析谷は自然の地形を利用した堀であるとされている。さらに東市小学校の北側には^{注1)}台地先端部を画する東西方向の堀の存在が推測されていた。

現地での発掘調査に先立ち調査対象区の地形測量を実施した(第8図)。その成果によれば、台地頂部には東西約55m、南北約20mの平坦面が見られ、南西方向になだらかに傾斜している。この南西斜面はやや等高線が乱れており地下遺構の遺存が危ぶまれた。南斜面中腹には幅約6mの細長い平坦面が2段にわたって見られる。このうち上段平坦面は一旦収束した後、さらに南東斜面でも細長い平坦面となって巡っている。谷奥部では、城郭に関ると考えられる地形の改変は読み取れない。

トレンチは、台地頂部の平坦面と台地斜面および谷筋にかけて12ヶ所設定した(第4図)。調査面積は計約1,000㎡である。以下において検出した遺構、各トレンチの所見を記述する。

注1) 村田修三 「古市城」 『日本城郭大系10』 1980



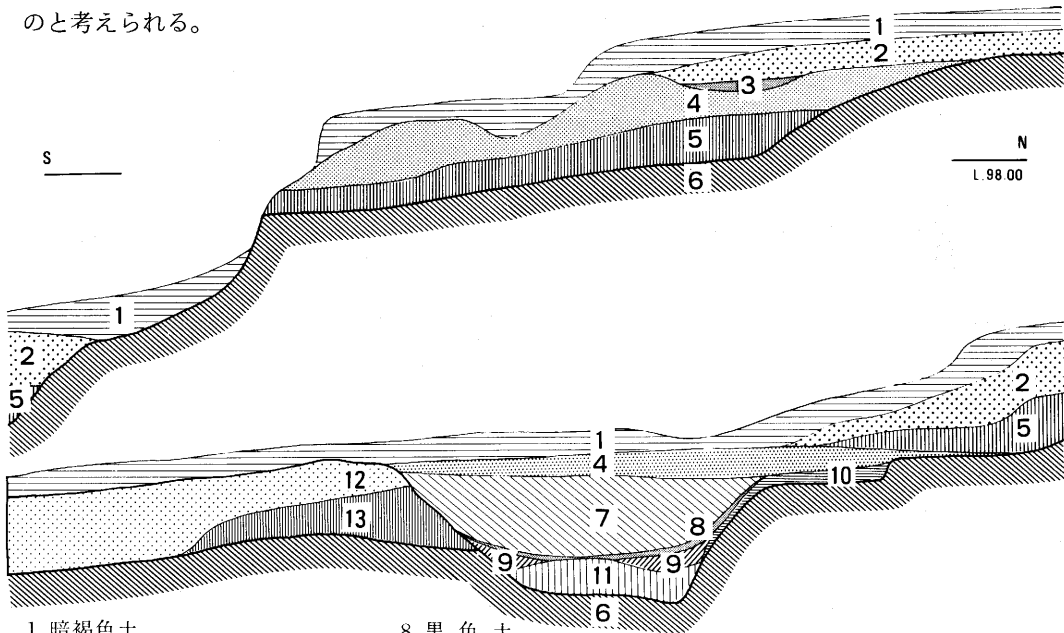
第4図 発掘区位置図 (1/2500)

Ⅲ 上ノ段・高山地区の調査

1 検出遺構

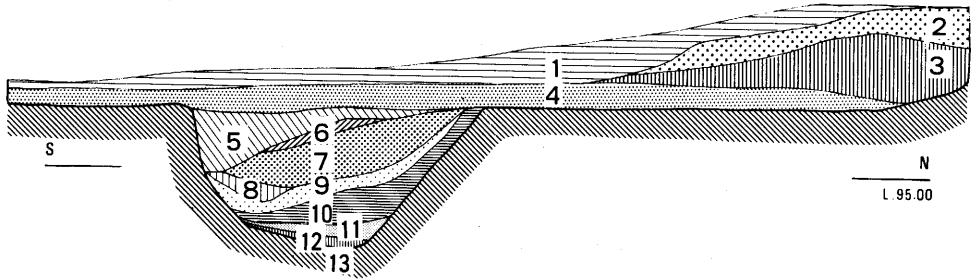
第1トレンチ 台地頂部平坦面は標高100 m、南側水田面との比高差約13.5 mを計る。ここに設定した第1トレンチでは、厚さ約30cmの表土を除去するとすぐに地山である黄褐色土層に達した。地山はトレンチ東端で約1.5 mの段差を持って落ち込んでおり、二段目の細長い平坦面を検出した(第8図、図版4)。この段差は南へ伸び、第3トレンチ内で100°の角度を持って西へ折れている。このことから地山を削り出すことによって、台地頂部に上・下二段の郭を形成していたことがわかる。しかし、トレンチ西端では顕著な段差が検出できなかったこと、また北は調査区外へ伸びることから郭の規模は不明である。上・下段とも郭縁辺部に塀・柵などの施設は全く検出できず、郭内部でも柱穴などの遺構は確認できなかった。後世の開墾あるいは東市小学校建設時に削平された可能性が高い。

第2トレンチ 台地頂部の平坦面から南西斜面にかけて設定した。なだらかな斜面が続き、顕著な遺構は検出することができなかった(図版5)。後世の開墾などによる削平を受けているものと考えられる。

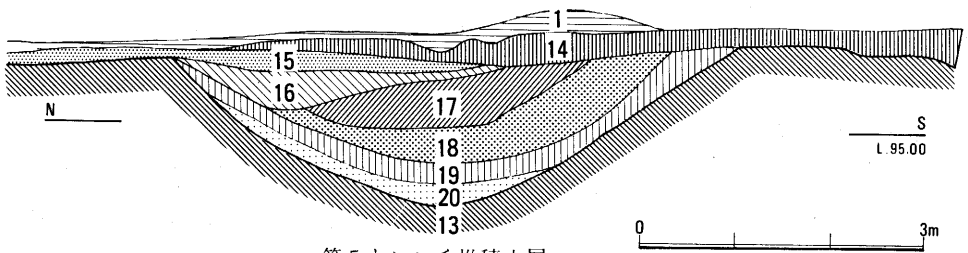


- | | |
|-------------------|------------|
| 1. 暗褐色土 | 8. 黒色土 |
| 2. 暗茶褐色土(小礫多量に含む) | 9. 暗茶色砂質土 |
| 3. 暗褐色土 | 10. 黄赤褐色土 |
| 4. 茶褐色土(礫含む) | 11. 暗茶色砂質土 |
| 5. 黄灰色土(礫含む) | 12. 赤黄色土 |
| 6. 赤褐色土(地山) | 13. 赤黄色砂質土 |
| 7. 暗褐色土(礫まじり) | |

第5図 第3トレンチ堆積土層図(1/80)



第4トレンチ堆積土層



第5トレンチ堆積土層

- | | | |
|-----------|---------------|-----------------------|
| 1. 黒灰色腐蝕土 | 8. 灰白色粘土 | 15. 茶褐色粘質土(多量の礫を含む) |
| 2. 茶褐色砂質土 | 9. 黒褐色粘質土 | 16. 灰褐色粘質土 |
| 3. 礫層 | 10. 茶褐色粘質土 | 17. 茶褐色粘質土 |
| 4. 茶灰色粘質土 | 11. 明茶褐色粘質土 | 18. 茶褐色粘質土(こぶし大の礫を含む) |
| 5. 黄褐色粘質土 | 12. 赤褐色粘質土 | 19. 暗黄褐色砂質土 |
| 6. 茶灰色粘質土 | 13. 灰白色粘土(地山) | 20. 灰褐色粘質土 |
| 7. 黄褐色砂質土 | 14. 茶褐色粘質土 | |

第6図 第4・5トレンチ堆積土層図(1/80)

第3トレンチ 第1トレンチ西端に接し南北方向に設定した。トレンチの南端、台地頂部平坦面に二段にわたって築造された郭から約2.3 m 急激にさがって南斜面中腹をめぐる細長い平坦面がある。ここで東西方向の堀(SD01)を検出した(第5・8図、図版6)。上面幅約3.8 m、底部幅約1.7 m、深さ約1.4 mを測る。断面は逆台型を呈し、いわゆる箱堀と呼ばれる型式のものである。堀内の土層堆積状況から見て、滞水していたとは考えられない。堀は地山を穿って築造したものであるが、谷側は二層にわたって盛土を行ない堀上面の高さを合せている。堀上面には塀・柵などの痕跡は見られなかった。堀と台地頂部に向う斜面との間には幅約3.4 mの平坦面があり、堀と谷斜面との間にも幅4 m以上の平坦面がある。

第4トレンチ 台地南側斜面中腹をめぐる細長い平坦面中央に設定したトレンチ。地形測量の成果ではこの部分で等高線が鉤形に入り込んでおり、当初これが城郭築造時のものか、後世の開墾時のものか不明であった。このトレンチで堀(SD01)に続くと考えられる堀を検出した(第

Ⅲ 上ノ段・高山地区の調査

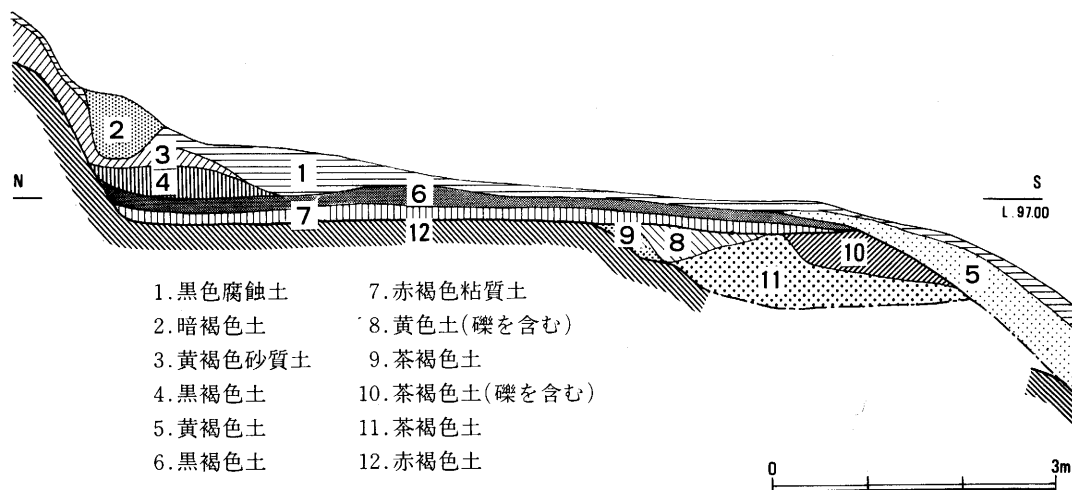
6・8図、図版7)。堀は本トレンチ内で鉤形に屈折している。上面幅約3m、底部幅約1.1m、深さ約1.5mを測る。底は谷側がやや高くなっており水平ではない。この部分でも土層堆積状況から滞水していた様子は認められなかった。堀底で若干の土器片の出土を見た。

第5トレンチ 台地南西斜面中腹のやや広い平坦面に設定した。この平坦面は標高95.0m前後を測り、南西方向になだらかに傾斜している。

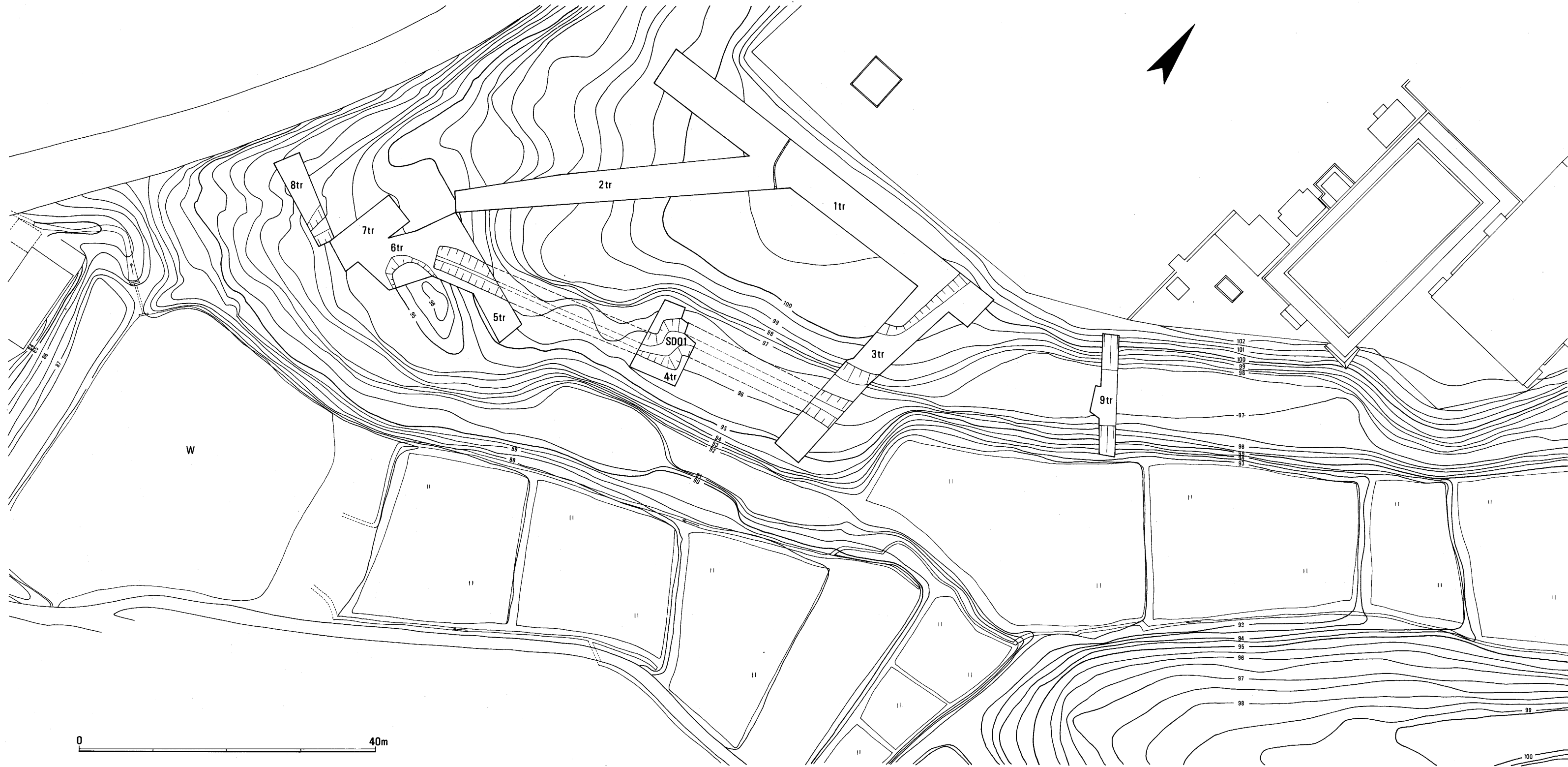
このトレンチで第3トレンチより続く堀(SD01)の西端部分を検出した(第6・8図、図版7)。上面幅約3.5m深さ約1.4mを測る。堀断面は、第3・4トレンチでは逆台形を呈していたのに対し、V字状を呈し葉研堀と呼ばれる形態に近くなっている。堀端部はほぼ垂直に掘り窪め収めている。堀底より五輪塔の一部(地輪・火輪)が出土した。堀西端部上面付近でも何らの上部施設も検出できなかった。本トレンチで堀西端を検出したことにより、堀の全長は約60mであることがわかる。堀全体の傾斜方向は、堀底のレベルが第5トレンチに比べ第3トレンチで30cm低いことから東へ傾斜しているものと考えられる。

第6トレンチ 第5トレンチ西端に接し設定した(第8図)。トレンチ東端、南西斜面中腹の平坦面東側に長さ15m、幅7m、高さ1mほどの高まりが見られ、これが城郭に関わる遺構である可能性が考えられた。トレンチ内の表土を除去したところ直下に地山が露呈した。地山は0.5mほどの高まりを見せてはいたが、にわかに関わる遺構であるとの判断はしがたい。しかし、堀(SD01)西端部に平行して土塁状の高まりが走ることによって、より完全な防禦施設となるであろうことは指摘しておきたい。

第7トレンチ 南西斜面中腹の平坦地中央、第6トレンチに接し設定した(第8図)。表土を除去したところ直下に地山が露呈し、何らの遺構も検出できなかった。



第7図 第9トレンチ堆積土層図(1/80)



第8図 上ノ段・高山地区の地形と検出遺構 (1/500)

第8トレンチ 南西斜面の第7トレンチに接し設定した(第8図)。トレンチ内の土層堆積状況は以下のようなものであった。茶灰色砂質土、暗茶色砂礫土、地山である黄白色砂礫土の順に堆積するが、トレンチ西半分は地山まで大きく攪乱されている。顕著な遺構は検出できなかった(図版8)。

第9トレンチ 台地南東斜面を巡る細長い平坦面に設定した。地形測量の成果では、この平坦面は標高97m、幅約8m、長さ約56mを測り、比高差約10mの急峻な斜面の中腹に台地頂部を取り巻くように巡っている。帯郭の痕跡をよく残している。

トレンチ内で顕著な遺構は検出できなかった(第7・8図、図版5)。土層堆積状況の観察では、斜面中腹の地山を削り出し幅約5.2mの平坦面を造成した後、その平坦面の縁辺部に幅約28mにわたり4層からなる客土を行ない面積を増していることがわかる。

第10トレンチ 舌状台地南側の谷底部に設定した(第4図)。土層の堆積状況を記すと、現在の水田耕作土以下黄灰色粘質土、黒灰色粘質土、黒灰色礫層、灰白色礫層と続く。礫層よりの激しい湧水があった。遺物は全く出土しなかった。開墾され水田となる以前は湿地が続いていたものであろう。

第11トレンチ 東市小学校の北、東市幼稚園内に設定した(第4図)。舌状台地(上ノ段地区)が春日野台地より派生し始める部分である。現在は埋め立てられ往時の地形を復元することはできないが、かつて、現在の東市幼稚園の西側は大きく落ち込み最下部は池となっていたこと^{注2)}から、東へ伸び南の谷へ続く堀の存在が推定された。

しかし、トレンチ内では顕著な遺構は検出できず、堀の存在は確認しえなかった。トレンチ内の土層堆積状況は以下のようなものである。約0.4mの造成土以下、旧耕土、淡黄灰色粘質土、灰褐色粘質土、淡黄色砂質土と続き、約1.2mで地山である淡黄色砂質土に達する。いずれもほぼ水平な堆積である。第4層灰褐色粘質土からは古墳時代のものと思われる須恵器片が出土した。

ただ、舌状台地上に古市城中心部分を推定した場合、その背後に何らかの施設を想定しなければ郭が完結しないことから、今回のトレンチのみで結論を出すことは急にすぎよう。

第12トレンチ 舌状台地南側の開析谷最奥部に設定した(第4図)。現状は階段状に開墾され水田となっており、何らの遺構も検出できなかった。トレンチ内の土層堆積状況は、水田耕作土、黄褐色土、青灰色砂礫層の順であった。若干の土器片の出土を見た。

以上各トレンチの概要を記述した。最後に今回検出した遺構の築造時期についてであるが、後述するように出土遺物がきわめて少なく明確にその時期を把握するまでには致らなかった。しかし、台地上に築造された遺構が大規模であることと、次章以下に記述する城山地区調査の成果あるいは文献上にあらわれる古市氏の盛衰を考え合せるならば、15世紀にその存続期間の一点を求めることもあながちまちがってはいないものと考えられる。

注2) 大日本帝国参謀本部陸軍部測量局明治20年測図 京阪地方仮製貳萬分壹地形図「樺本」

2 出土遺物

出土遺物には、土器、土製品、石製品がある。調査面積に比して出土量はきわめて少なく、ほとんどが細片であった。以下図示できたものについて記述する。

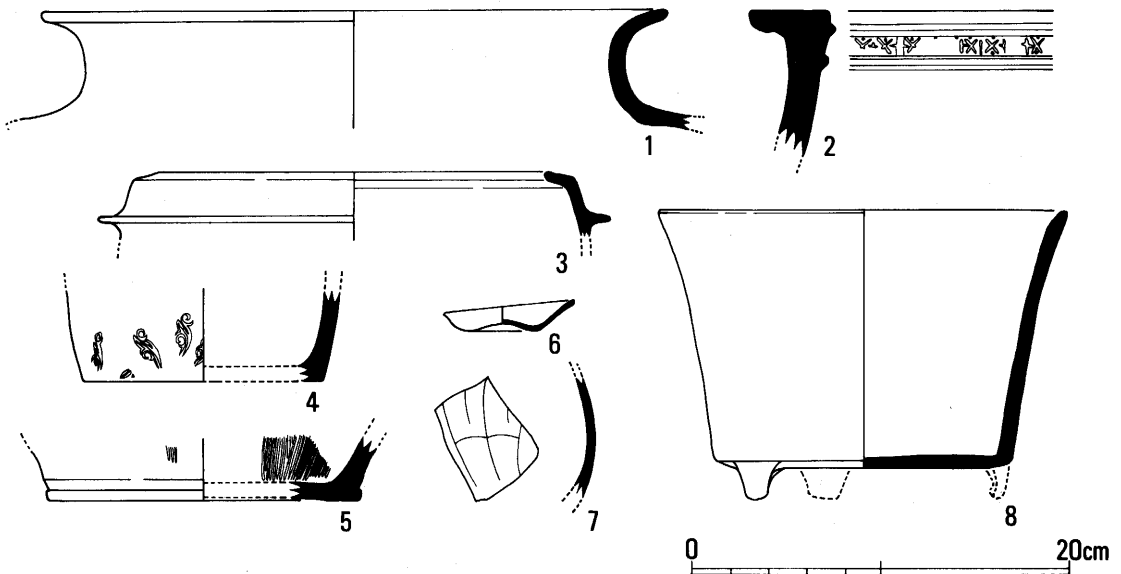
(A) 土器類

土師器皿C (第9図-6、図版9) ^{注3)} 小さな底部と低く外反する口縁部とからなる。底部は上げ底気味であり、全体に歪みがある。口縁部はやや厚く、口縁端部は丸くおさめる。口径7.0 cm、器高1.7 cmを計る。内面はよこなでを施し、外面は指おさえて仕上げている。色調は淡褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。第1トレンチ包含層出土。

土師器羽釜C (第9図-3、図版9) 短く直立した頸部と、内折する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。鏝部を貼付している。^{注4)}口縁部、頸部は内外面ともによこなでを施す。色調は淡黄白色を呈し、胎土には細砂を含有する。第1トレンチ包含層出土。

瓦質土器甕 (第9図-8、図版9) 平らな底部とゆるやかに外反する体・口縁部からなる。口縁端部はやや尖り気味におさめる。底部三ヶ所にわずかに内折する短い脚を取り付ける。全体に歪みがある。外面は細いヘラ削りを施し、内面はよこなでする。色調は内外面ともに灰色を呈し、胎土はわずかの細砂を含む。第4トレンチSD 01出土。

瓦質土器壺 (第9図-4、図版9) 平らな底部とゆるやかに内彎しながら立ち上がる胴部とからなる。胴部下端には蕨手状の唐草文の押印をめぐらす。色調は黒灰色を呈し、胎土は砂粒



第9図 出土土器(1/4)

を含む。第1トレンチ包含層出土。

瓦質土器火舎（第9図-2、図版9）斜め上方に立ち上がる体部とほぼ直角に内折する口縁部とからなる。口縁端部は丸くおさめる。平面長方形である。外面に二条の突帯をめぐらせ、その間に※状の押印文をめぐらす。内外面ともにヘラ削りを施す。色調は黒灰色を呈し、胎土はわずかに細砂を含む。第1トレンチ包含層出土。

陶器壺（第9図-1、図版9）焼締陶器の壺である。直立したのち大きく外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともよこなでを行なうが、内面の体部・頸部境にヘラ削りを施す。色調は暗赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。常滑焼系の可能性が考えられる。第1トレンチ包含層出土。

陶器播鉢（第9図-5、図版9）平らな底部と斜め外上方に立ち上がる体部からなる。内面に七条を単位とずる櫛状施文具による播り目が密に施されている。播り目は体部内面とは別に内底面にも施されている。外面はヘラ削りを施した後、よこなでを行なっている。色調は赤褐色を呈し、胎土は細砂を含む。信楽焼系の製品の可能性がある。第1トレンチ包含層出土。

青磁碗（第9図-7、図版9）体部のみ出土した。彎曲する体部外面には鐏のやや不明瞭な連弁文を配する。表面に貫入は見られない。水びきロクロ成形を行なう。釉色は灰緑色を呈し、磁胎は青灰色である。中国龍泉窯系の製品であると思われる。第1トレンチ包含層出土。

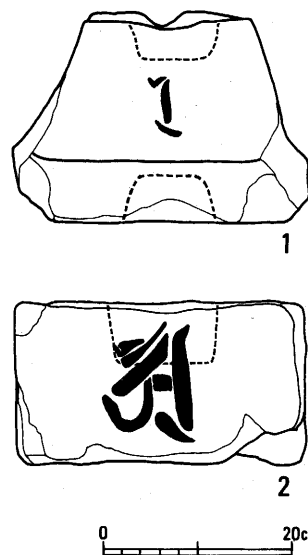
(B) 石製品

火輪（第10図-1、図版9）方錐形の笠である。軒はその下半部がゆるやかに上方に反り、軒口はほぼ垂直に切り落されている。高さ21.6cm、底辺幅31.2cmを計る。幅に対する高さの比率が大きく、縦長の感じを受ける。上・下面に平面方形の柄穴を穿つ。屋根四面にㄩ・で・ㄱ・ㄴの梵字を配す。凝灰岩を使用しており、風化が著しい。第5トレンチSD 01出土。

地輪（第10図-2、図版9）方形の基台である。4側面および上面は直線的に切り落しており上面にはさらに平面方形の柄穴を穿つ。底面は仕上げがされておらず、ノミ痕跡を残している。4側面にㄹ・ㅁ・ㄴ・ㄷの梵字を配す。凝灰岩を使用している。第5トレンチSD 01出土。

注3) 本書P27参照

注4) 本書P42参照



第10図 出土石製品 (1/8)

IV 城山地区の調査

1 検出遺構

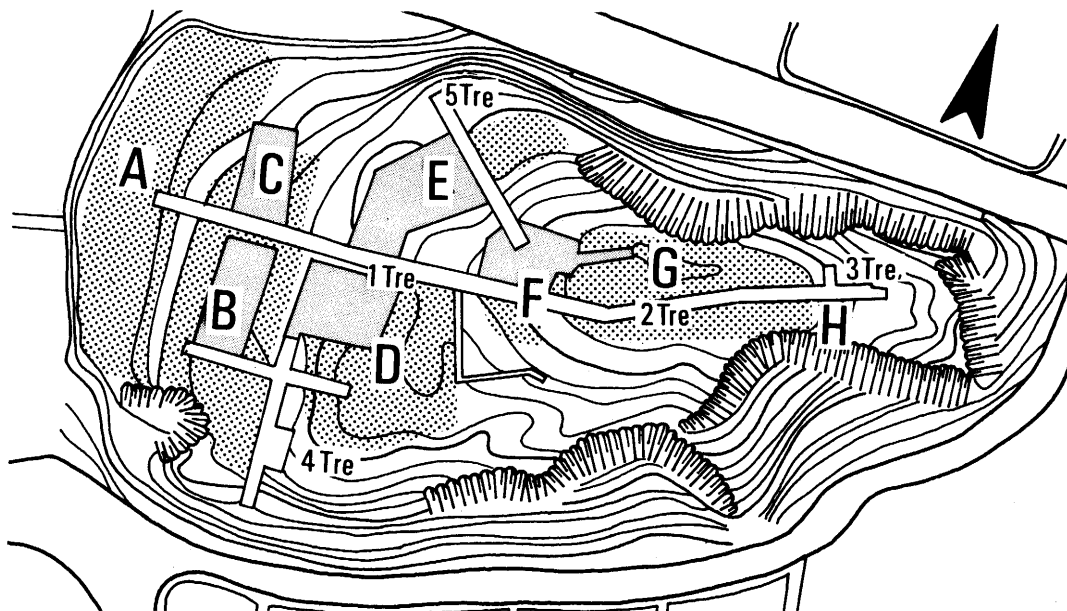
城山地区の調査では、予備調査のトレンチを中心に発掘区域を拡張し調査を進めた。以下においては、城郭の遺構と中世基地の遺構にまず分けた上で、城郭の郭と推定される平坦地を中心に調査区をA～Fに区分し、それぞれの発掘区ごとに検出した遺構について記述を進めたい。

(A) 城郭の遺構

A区 (第13図, 図版 12・13)

丘陵の西端最下段の区域で、標高87.20 m、西側水田面との比高差は約3.5 mを測る。東西約12 m南北約30 mの平坦地である。調査では予備調査第1トレンチにおいてSD 01を検出したにとどまる。

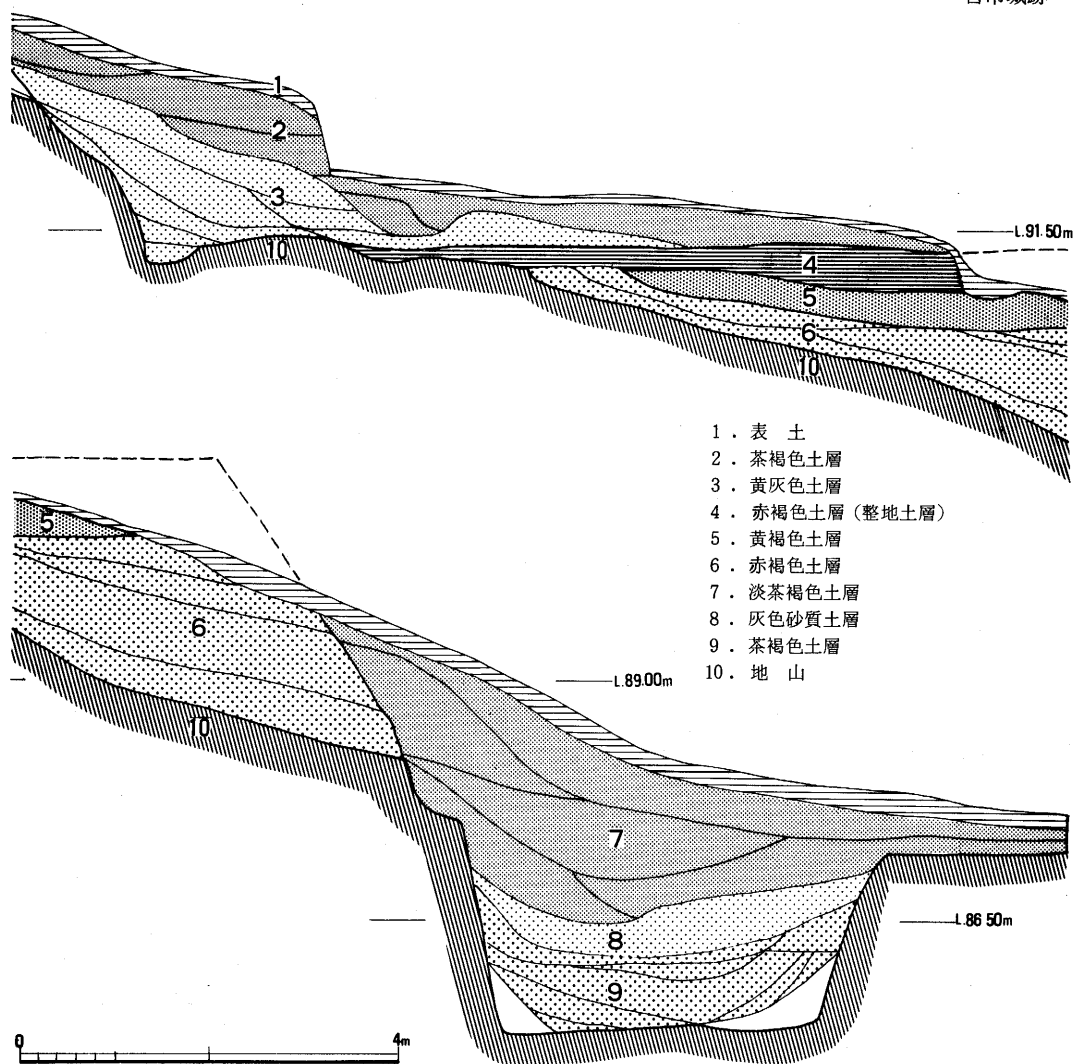
SD 01 平坦地東端で検出したもので城郭の堀と考えられる。上面幅4.4 m、底部幅3.3 m、西側での深さは1.6 mを測る。またA区の東側上段B・Cの平坦面より堀底部までの深さは6 m程度ある。地山を掘削したものであり、底の平らな箱堀形式である。堀内には有機質土層の堆積が認められないことから、空堀であったと考えられる。長さは2 m分検出したにとどまり、全体は明らかではないが、城郭の西側を画する堀として南北方向にのびているものと思われる。



第11図 発掘区位置図



第12図 城山地区の地形と検出遺構 (1/400)



第13図 A区B・C区堆積土層図(1/80)

B・C区（第12, 13図, 図版13）

A区の東側上段の区域で、標高91～92m、A区との比高差は約3mを測る。東西約12m、南北約40mの平坦地が復元しうる。この区域の土層堆積状況は、城山地区において代表的なものであるため、まず土層の状況についてのべておきたい。B・C区では、調査以前、耕作による東西の幅約6mの平坦地が存在したが、この地表面より約60cm下で東側では、ほぼ水平な地山面に至る。また西側では、その地山上面とほぼ等しい高さに、上面のかなり固い赤褐色土の堆積がみられる。この層が城郭の構築時の整地土と考えられ、城郭構築の際、西へ傾斜する旧地形を東側で削平し、その排土を西側へ盛り、平坦面をつくり出していることがうかがえる。またこの赤褐色土の下層には、黄褐色土層が堆積し、この層に中世墓が遺存する。城郭関係の遺構は、地山削平面および、赤褐色土

IV 城山地区の調査

上面で検出した。

SD 02 第1トレンチで検出したもので、平坦面東端に沿う南北方向の溝である。(幅約60cm、深さ約20cm)である。東側D区の崖下、地山削平面に掘削されることから、平坦面の整地土の自然流失を防ぐ排水路と考えられる。

SD 03 B区のほぼ中央で検出した東西方向の溝。20~30cmの河原石を2例並べ、その間に瓦質土製管を埋置する。幅約15cm、長さは1m分検出した。東西のいずれも破壊されているが、整地部分につくられることから、SD 02とつながり、整地土の流失を防ぐため土製管を使用したとも考えられる。

SK 01 予備調査第4トレンチで検出した大きな方形土壇(約6m×約9m、深さ約1.5m)である。地山を掘削してつくり、底はほぼ平らである。貯蔵用施設とも考えられるが明らかではない。埋土北部分からは、五輪塔等の石造物が多数、集中して出土した。

その他B区では、SD 03の南に、扁平な自然石(50cm×1m)が2個南北に並ぶものを検出したが、その性格については明らかではない。

D区(第12図、図版21)

B区の東側上段の区域で、標高96m、B区との比高は約5mを測る。東西約16m、南北約20mの平坦地が復元しうるが、西側は、整地土が流失し、緩斜面をなし、B区とつながる。城郭の遺構はすべて東側の地山削平面で検出した。

SD 04 D区ほぼ中央で検出した南北方向の溝(幅60~80cm、深さ約10cm)である。北側で東へまがる。

SD 05 SD 04につながる東西方向の溝(幅約60cm、深さ約10cm)である。

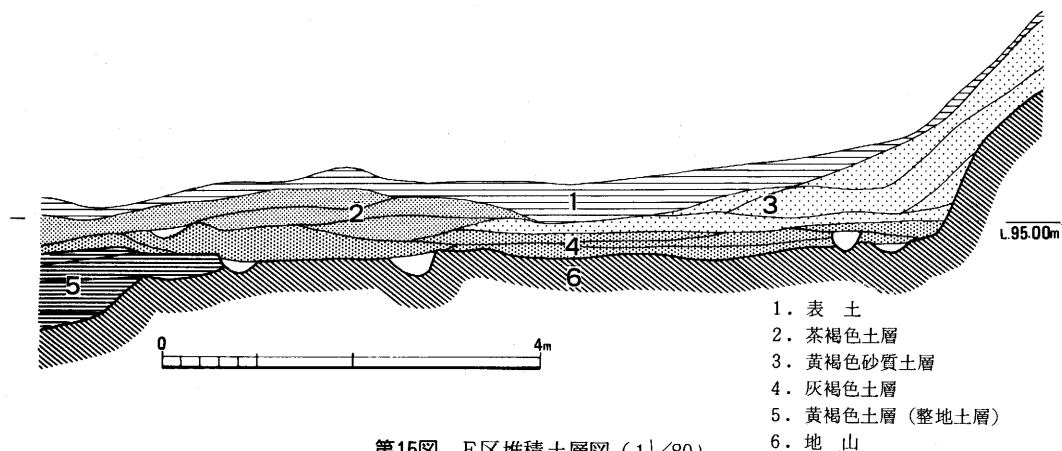
SK 02 SD 04の東側で検出した深さ約10cmの浅い土壇である。中に五輪塔火輪、一石五輪塔、小礫がならべられており、建物の礎石および、根石とも考えられる。

この他、D区から東側上段F区にかけては、地山面を掘削し、ゆるやかな傾斜部分をつくっている。通路の可能性はあるが、全体を検出していないので明らかではない。

E区(第14~17図、図版14~15)

D区の北側の区域で、標高94.5m、D区より約1.5m低い。南北約10m、東西約36mの平坦地である。大部分地山削平を行い平坦面をつくる。北側には若干盛り土している。城郭遺構の遺存は最も良好であり、地山削平面ですべて検出した。

SD 06 E区平坦面南端F区の崖下に沿って検出した東西方向の溝(幅約20cm、深さ約5cm)である。長さは13m分検出した。東端は、ほぼ直角にSD 08につながる。西側4mの部分は平瓦凹面を下にして蓋をする。平瓦で蓋をする部分には溝を掘削しない部分もある。西端で北へ屈折するが、屈折してからは、瓦列、溝も遺存せず、本来、SD 07とつながっていたと思われるが明らかではない。



第15図 E区堆積土層図 (1/80)

SD 07 SD 06 の北側，約3 mの間隔をおき平行する東西方向の溝（幅40～50cm，深さ約10cm）である。長さは16m分検出した。東端は SB 06 とつながる。この溝の一部では長さ1.2 m にわたり瓦質土製管3個が埋置されており，一部暗渠であったことがうかがえる。

SD 08 発掘区の東端，平坦地のほぼ中央で検出した南北方向の溝（20～30cm，深さ約5 cm）である。長さは5 m分検出した。

SD 09 SD 08 の東，SD 06 と同じく平坦面南端で検出した東西方向の溝（幅約20cm，深さ約5 cm）である。東端は SD 08 につながる。以上のSD 06～SD 09 は関連をもってつくられていることがうかがえ，同時期に存在したものと考えられる。

SD 10 SD 06, 07 の間の斜め方向の溝（幅30～50 cm，深さ約8 cm）である。東端は SX 01 につながり，また重複関係から SD 07 より新しいことがわかる。

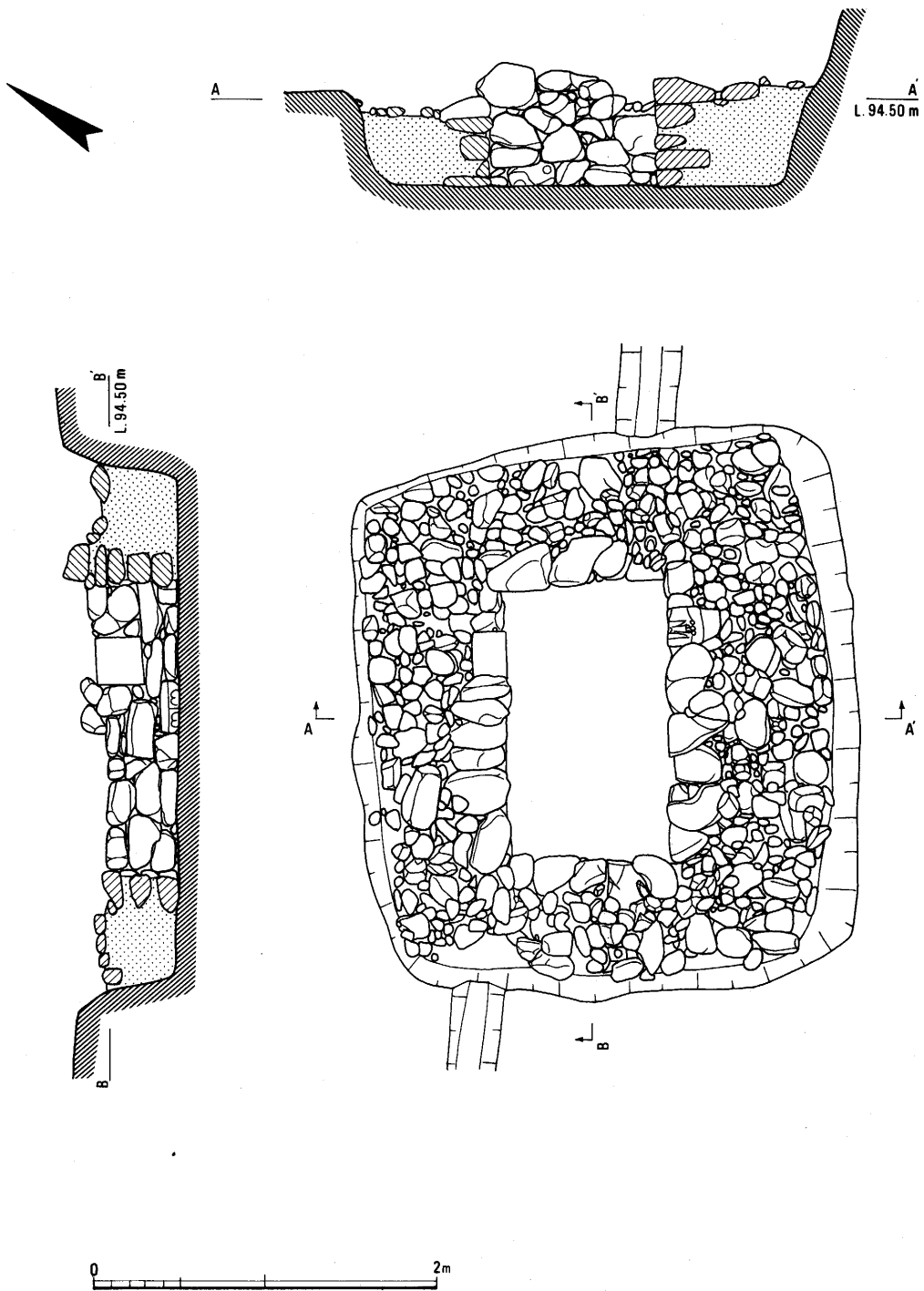
SX 01 一辺3 mの方形の掘形内に，石組みの竪穴（1.8 m × 90cm，深さ約70cm）をつくる。石組みは，30～40cmの河原石および五輪塔地輪，石仏などを石材として転用し，これらの石造物の平坦面を内側にそろえ，3～4段つみあげ壁面を構成させている。また掘形内の裏込めにも同様の河原石，石造物を使用し，土砂は用いられない。内部より土師器皿，付煤した土師器羽釜片が出土した。貯蔵用施設と考えられるが，SD 10 とつながり，また SD 06 との関連も明瞭でなく，溜枧等の貯水施設とも考えられる。

埋甕 I 掘形（径約60cm）内に瓦質土器甕（口径42cm，器高40cm）を埋置する。瓦質土器甕はほぼ完形で遺存しており，その形態は，墓地より出土した小型の瓦質土器甕と類似する。墓の可能性も考えられるが，城郭遺跡においても検出された例^{注)}があり，城郭にともなう遺構と考えておきたい。

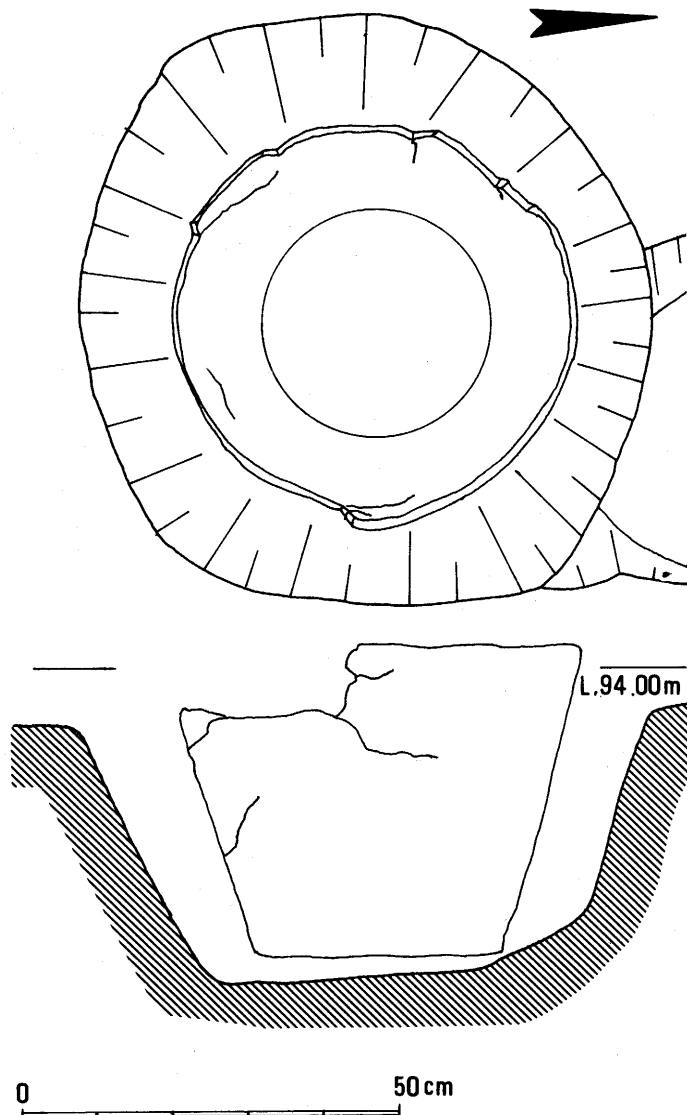
埋甕 II 掘形（径約60cm）内に瓦質土器甕を埋置するが，甕は底部のみ遺存していた。また瓦質甕の下に瓦質鉢を埋置しており，他の埋甕施設とは性格が異なるとも考えられる。

（注）同志社大学校地学術調査委員会『京都府田辺町都谷中世館跡』1979

IV 城山地区の調査



第 16 図 SX01 平面・断面図(1/40)



第17図 埋甕 I 平面・断面図 (1/10)

埋甕Ⅲ 掘形(径約60cm)内に瓦質土器甕を埋置する。甕は下半部のみ遺存していた。

礎石Ⅰ 埋甕Ⅰの西で検出したもので、掘形(一辺30cm、深さ約20cm)に上面を平坦に整えた石材(20cm×30cm)をすえつける。建物の礎石の可能性はあるが、他の対応する礎石が発見されず、礎石と断定するには問題が残る。

その他の遺構 発掘区東部においては、小さなピット(径20~50cm、深さ10~30cm)を約51検出した。大きさ、深さ、方向も一定せず、柵などの存在の可能性は否定できないが、建物の柱穴としてまとまる可能性は低い。またD区との境は、傾斜する地山面で、通路の可能性が考えられるが明らかではない。なおこの付近の地山面の落ち込みからは、青磁碗が完形で出土している。

F区 (第18, 19図, 図版16)

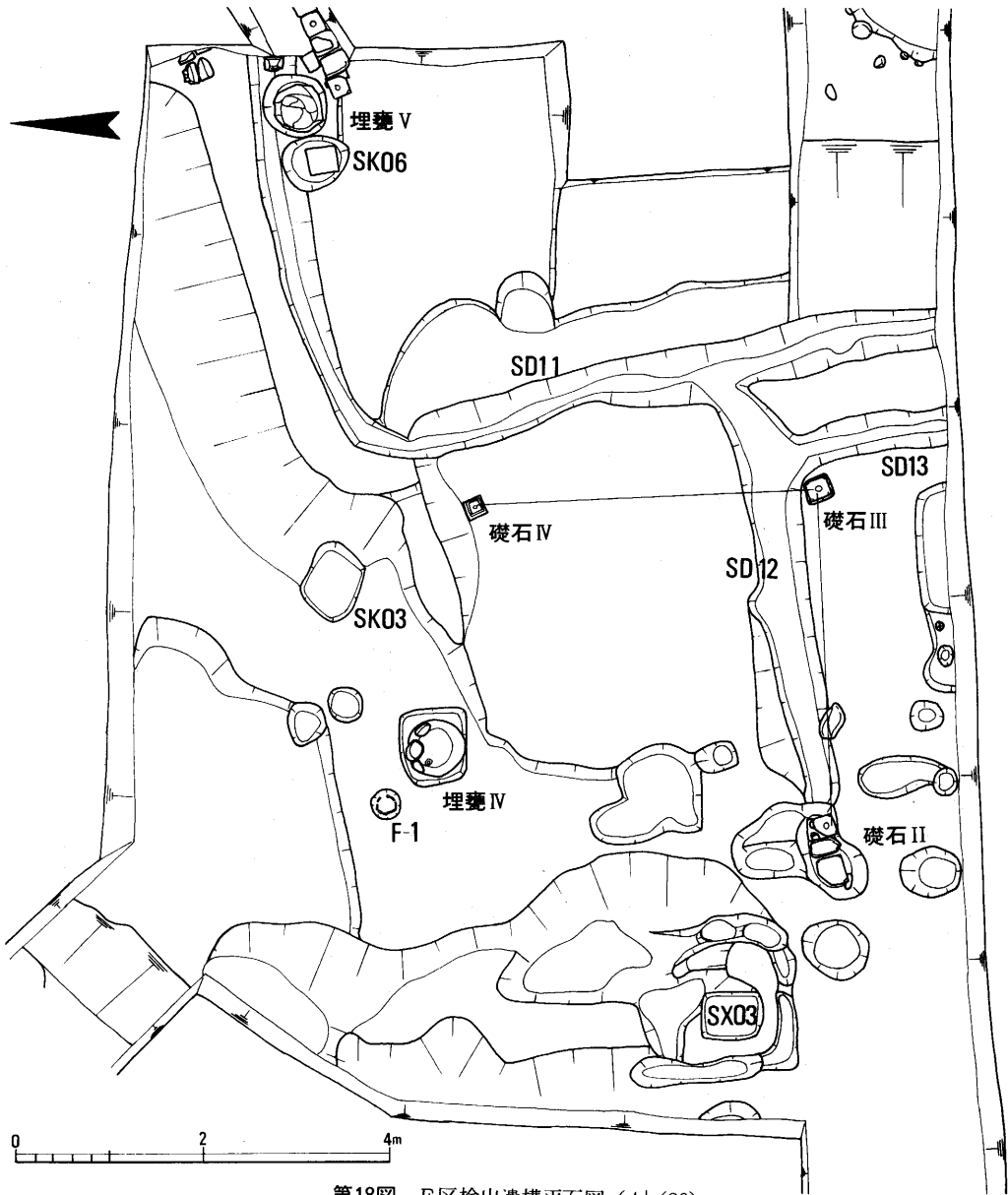
D・E区のさらに東側上段の区域で、標高100m、D区との比高差は約4mを測る。東西約10m、南北約20mの平坦地を復元しうる。土層断面の観察から、この区域においても旧地形を削平し、その排土を北および西側へ盛り土、整地し、平坦面をつくりだしていることがうかがえる。またこの区域では北部分へ別の平坦地が広がっていた可能性があるが、崩壊が著しく明らかではない。

SD 11 発掘区東端、G区の崖下に沿って検出した南北方向の溝(幅約40cm、深さ約10cm)である。平坦面に沿って北側で東へほぼ直角に屈折し、東西方向の溝となる。

SD 12 SD 11につながる東西方向の溝(幅約60cm、深さ約12cm)である。

SD 13 SD 11の西、約1mの間隔をもち平行する南北方向の溝(幅約40cm、深さ約10cm)で

IV 城山地区の調査



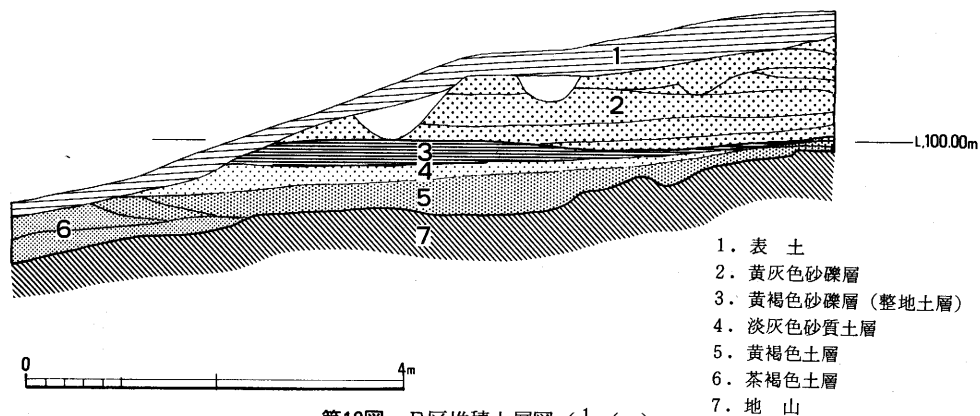
第18図 F区検出遺構平面図 (1/80)

ある。北端はほぼ直角に SD 12 につながる。

これらの浅い素掘り溝は、C～D区で検出した溝同様、城郭の排水路的機能をもっていたものと思われる。

埋壙IV 方形の掘形（一辺約80cm）内に瓦質土器甕を埋置する。瓦質土器甕（口径60cm、器高47.6cm）はほぼ完形で遺存していた。甕内部からは土師器皿が出土した。

SK 03 発掘区北側、整地部分で検出した土壌（60cm×80cm、深さ約30cm）である。地山を掘削



第19図 F区堆積土層図 (1/80)

しており、出土遺物はない。

礎石Ⅱ 第1トレンチで検出した浅い土壌(1.2 m × 50cm, 深さ約5 cm)内に五輪塔火輪を逆位に長方形石材とともにすえつけたものである。礎石Ⅲと約3.9 mの間隔をもって東西に平面的に対応するため同一の建物を構成していた可能性が考えられるが、上面の高さは異なる。

礎石Ⅲ 方形掘形(一辺約30cm)に五輪塔地輪をすえつけたものである。礎石Ⅱと東西に平面的に対応するとともに、礎石Ⅳとも約3.9 mの間隔をもって南北に対応する。

礎石Ⅳ 宝篋印塔基台部分を地山削平面にすえつけただけのものである。礎石Ⅲと平面的に対応するとともに上面の高さがほぼ等しい。礎石Ⅱ～Ⅳは本来ひとつの建物を構成していたと考えられるが、他の礎石が遺存せず、建物規模も明らかではないため、建物の存在の可能性をあげるだけにとどめておきたい。

その他の遺構 F区では、その他の遺構として、いくつかのピットおよび土壌を検出したが、出土遺物もなく、その性格は明らかではない。また整地部分下層の地山面より SX 03 および、蔵骨器1点を検出したが、中世墓地のところでのべることにする。

G区 (第12図, 図版17・18)

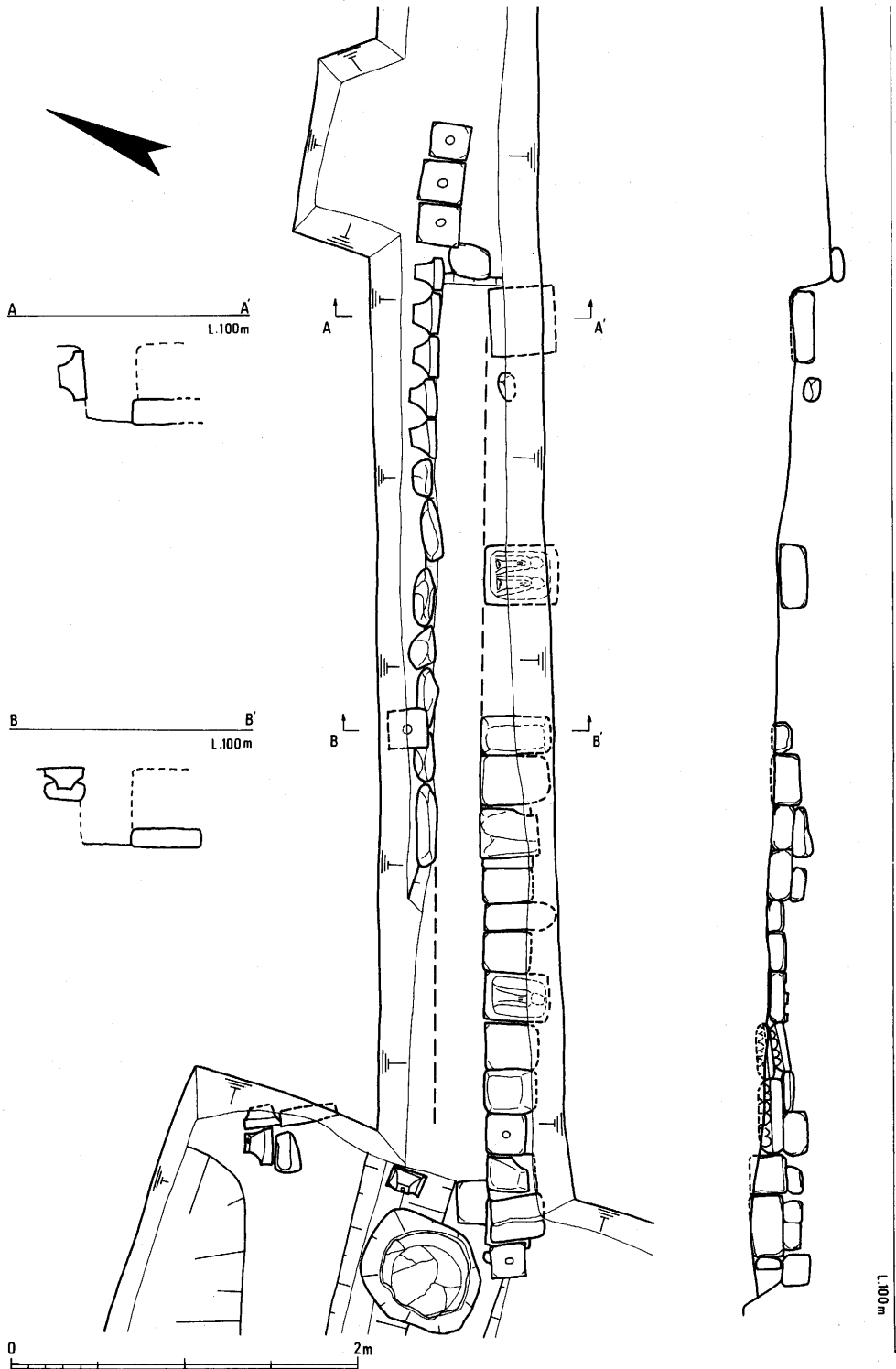
丘陵最頂部の区域で、標高101～102 m, F区との比高約1 mを測る。東西約32m, 南北6～7mの平坦地であるが、南北とも大きく崩壊している。この区域の遺構は予備調査第2トレンチF区拡張区で検出した。土層観察より、大部分地山削平によって平坦面をつくり出し、西側F区との間に若干盛り土して整地していることがうかがえる。

SK 04 第2トレンチで検出した方形土壌(1.6 m × 1.0 m, 深さ約50cm)である。平坦面のほぼ中央に位置する。多数の土師器皿が完形で出土した。

SK 05 F区との境で検出した土壌(径約60cm, 深さ約40cm)である。内に五輪塔地輪を逆位にして埋置していた。礎石とも考えられるが明らかではない。

埋壺Ⅴ SK 06 の東に接して検出したもので掘形(径70cm)内に瓦質土器甕を埋置する。瓦質

IV 城山地区の調査



第20図 SD14平面・断面図 (1 / 40)

土器甕（口径65.2cm，器高52cm）はほぼ完形で遺存しており，甕内部より土師器皿が出土した。

SD 14 埋甕Vの東で検出した東西方向の石積溝（幅約30cm，深さ約60cm）である。長さ5.6m分検出したが，上部はかなり破壊されており，石材の存在しない部分も多い。石積みは五輪塔台座，火輪，地輪，石仏を石材として転用し，これらの平坦面を内側にそろえ溝の両側面を形成させる。南側は2段，北側は1段のみ石積が遺存していたが，北側の石積の底位は南側よりも高い。底面には特別の造作はされない。F区SD 11延長線の上層に存在するため，本来G区の崖下につくられていたSD 11が，G区の拡張により埋められ，この溝がつくられたものと思われる。東端は五輪塔火輪を溝中央に3個逆位にならべ終っており，西端は北へ屈折していたと推定される。

SD 15 第2トレンチで検出した南北方向の溝（幅約1m，深さ約40cm）である。長さは2m分検出したにとどまるが，北へのびるSD 14につながる可能性がある。

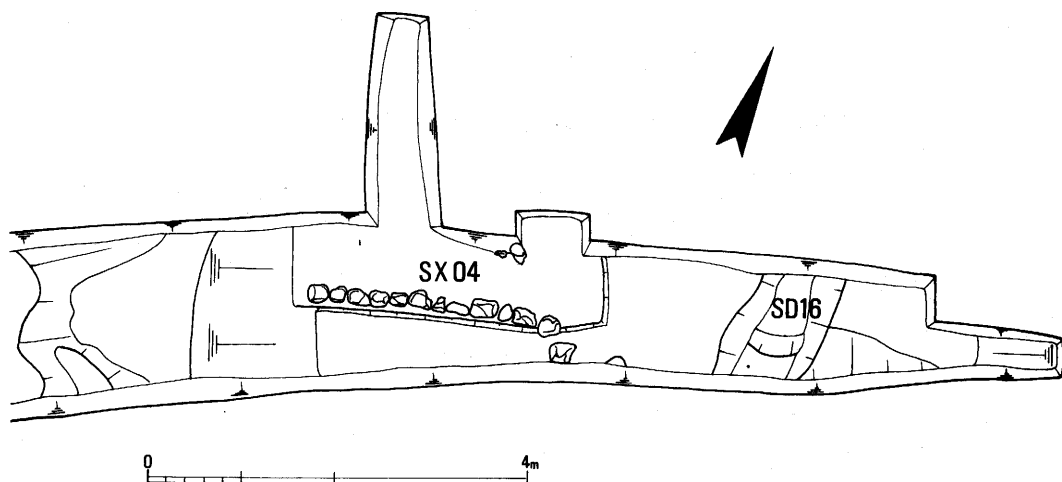
礎石V 第2トレンチで検出した。五輪塔地輪を地山面にすえつけただけのものである。東側で検出した扁平な自然石と約1.8mの間隔をもって対応するとともに，西側で検出した土壌とも約2.1mの間隔をもって対応する。この土壌を礎石抜き穴と考えるならば，東西の並びが推定されるが，他の礎石が発見されず，この区域における建物存在の可能性だけをあげておきたい。

H区（第21図，図版18）

最上段の東側，人為的に掘り切りがなされている区域である。掘切は南北方向で，上面幅約11m，底部幅約3.2m，深さ約3mである。

SX 04 掘切底面に20～30cmの河原石を東西にならべたものである。長さ2.6m分検出した。石の平坦面を南側へそろえており，何らかの施設の基底部と考えられるが明らかではない。

SD 16 掘切の底東端で検出した南北方向の溝（幅約1m，深さ60cm）である。



第21図 H区遺構平面図（1/80）

IV 城山地区の調査

(B) 中世墓地の遺構

B～F区のうち、城郭の構築にあたり、盛り土して整地した部分では、その下層より中世墓地の遺構を検出した。また城郭の構築時に地山削平を行っている部分では、墓地遺構がほとんど遺存していないが、D、F区には若干遺存するものもあり、本来、旧地形西斜面全域に墓地が存在していたものと思われる。なおA区については、発掘面積が狭く墓地の存在の有無については明らかではない。

検出した墓は101基を数え、すべて火葬墓である。土師器羽釜などの土師質の容器を蔵骨器として埋置するものが73例で大部分を占める。火葬骨だけが埋納されたものは25例ある。この場合、火葬骨は小ピット（径約20～30cm、深さ約20cm）内に遺存しているもので、本来、木箱、布袋等有機質容器を蔵骨器としてもっていた可能性が考えられる。また瓦質容器を埋置したものを3例検出したが、その内部には火葬骨やその他の遺物はまったく認められなかった。

墓地の外部施設としては、ほぼ方形に配列させた石敷施設があり、五輪塔台座部分がその上に原位置で遺存する例もある。埋置した蔵骨器に接して石仏が原位置で確認される例もあることから考えると、組合せ五輪塔、石仏が、供養塔および墓標の意味をもって建立されていたものと思われる。城郭の遺構に転用された石造物は、すべてこれらの墓地を構成していたものであろう。

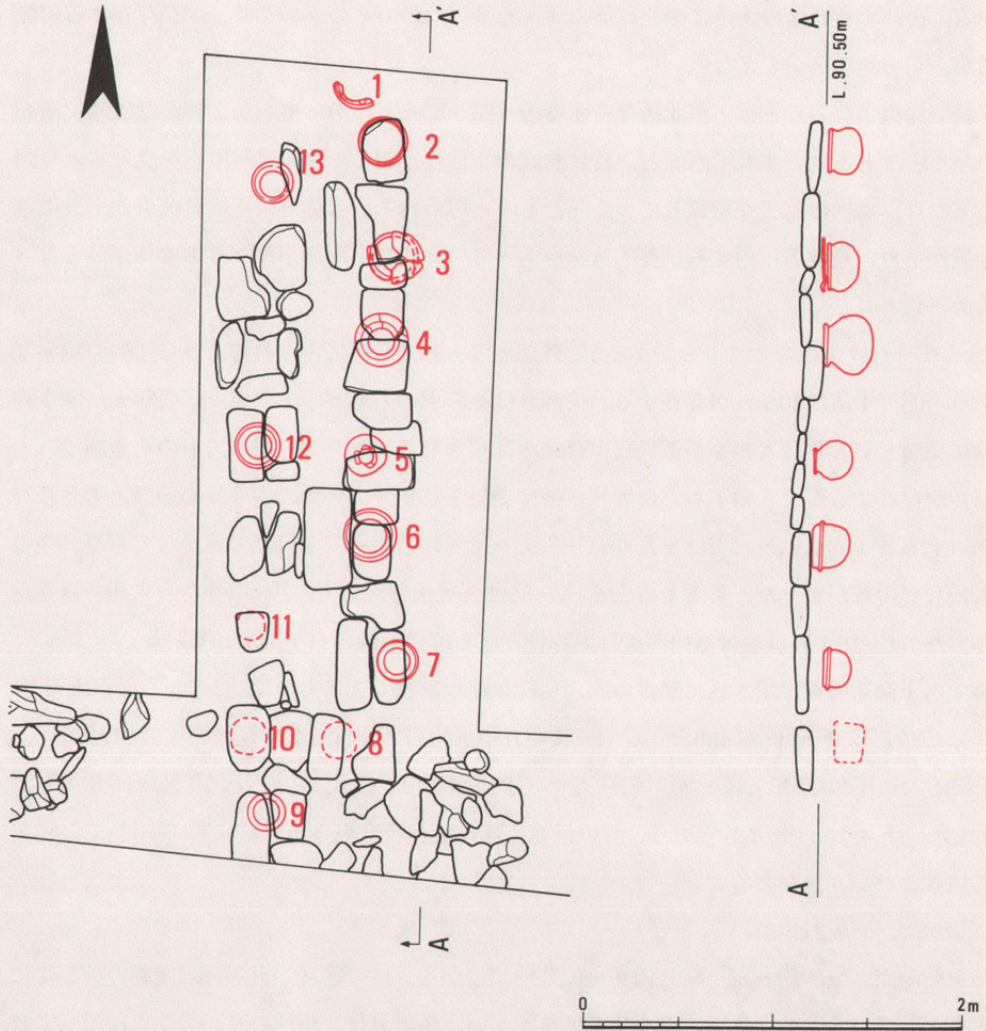
蔵骨器の埋置方法は、格別、深い土壌が掘られるわけではなく、地表をややほりくぼめたところに埋置したようで、上部の石敷と蔵骨器が接している例が多く、土壌の痕跡はきわめて不明瞭である。また埋置にあたって蔵骨器の底位に小礫、瓦片を敷く例もある。埋置に伴う副葬品は皆無に等しい。

B・C・Dの3区に墓地が集中をみせているが、破壊されている部分が存在することを考えあわせると、この三ヶ所の集中が、墓地内での単位として把握できるかどうか明らかではない。

B区（第22図、図版19）

16基を検出した。土師器羽釜などの土師質の容器を蔵骨器としてもつもの12例、火葬骨だけのもの4例である。

この区域の北部は、城郭構築時の破壊が著しく、土師器羽釜を蔵骨器とするもの2基、火葬骨だけのもの1基を検出したにとどまる。これに比べ南西の一画はやや低くなっていたこともあり、墓地遺構の遺存は最も良好であった。ここでは個々の墓の外部施設として扁平な河原石2～3個により、方形の石敷区画（一辺40～50cm）をつくる。この区画は長さ4mにわたり、2列にならんでおり、他の区域ではみられないきわめて整然とした様相を呈している。方形の石敷区画は17ヶ所推定しうが、その下に蔵骨器を埋置するもの10例、火葬骨だけのもの3例によって構成されており、4ヶ所は、その下に埋葬主体は認められなかった。なおB-3の蔵骨器には瓦質土器片を蓋として用いている。



第22図 B区西南中世墓地遺構平面図(1/40)

蔵骨器には、B-3「応永口年」、B-4「応永十六年」(1409年)、B-7「応永四年」(1397年)、B-12「長享三年」(1489年)、B-13「寛正三年」(1462年)と、被葬者の没年号と考えられる墨書紀年銘が記される。このことからこの区域では14世紀末より、ほぼ百年にわたり、東側の列より計画的に墓地の造営が行われていったことがうかがえる。なお墓地の北側は破壊されており、南側へのつづきも土砂採取のため明らかではないが、南側へはなおつづいていたものと思われる。

C区(第23図, 図版20・21)

B区の北側、東西約4m、南北約8mの地域に墓地が集中して遺存していた。検出したものは40

IV 城山地区の調査

基で、土師器羽釜を蔵骨器とするもの29例、火葬骨だけのもの10例、瓦質容器1例である。この区域ではB区にみられるような整然とした墓の配置をなさず、全体にかなり雑然とした分布の様相を呈している。後述するD区のように南北に並ぶ4～5基づつのいくつかのグループが存在する可能性もあるが、明らかに区分しえない。

この区域で注目されることは、南北に存在する段(20～50cm)に沿って石仏3体がほぼ原位置を保っていたことである。いずれも西面し、特に北端の1体は、石仏の周囲に河原石を立ててとり囲み固定しており、龕状の施設を意識してつくったものと思われる。3体ともその背後東側上段に蔵骨器の埋置があり、被葬者に対する供養的意味をもってつくられ、西側下段よりの参拝主体となっていたものと思われる。

C-2は火葬骨だけが遺存するものであるが、外部施設としてB区にみられるような4個の扁平な石でつくる石囲(1辺約40cm)が存在する。火葬骨はその下の方形ピット(20cm×20cm、深さ約20cm)内に充満しており、木箱等の蔵骨器の存在が推定される。またこの東に方形の石敷施設(一辺約60cm)が存在するが、この下からは埋葬主体は発見されず、供養用の塔婆基礎施設と考えられる。C-15では瓦質土器片、C-16では平瓦片、C-3、C-20では自然石で蔵骨器の蓋をしており、他のものにも板などの蓋があったとも考えられる。C-34は瓦質土器火舎であり、内部から火葬骨は発見されなかった。C-16よりは蔵骨器内部より火葬骨とともに「毛抜き」が出土している。

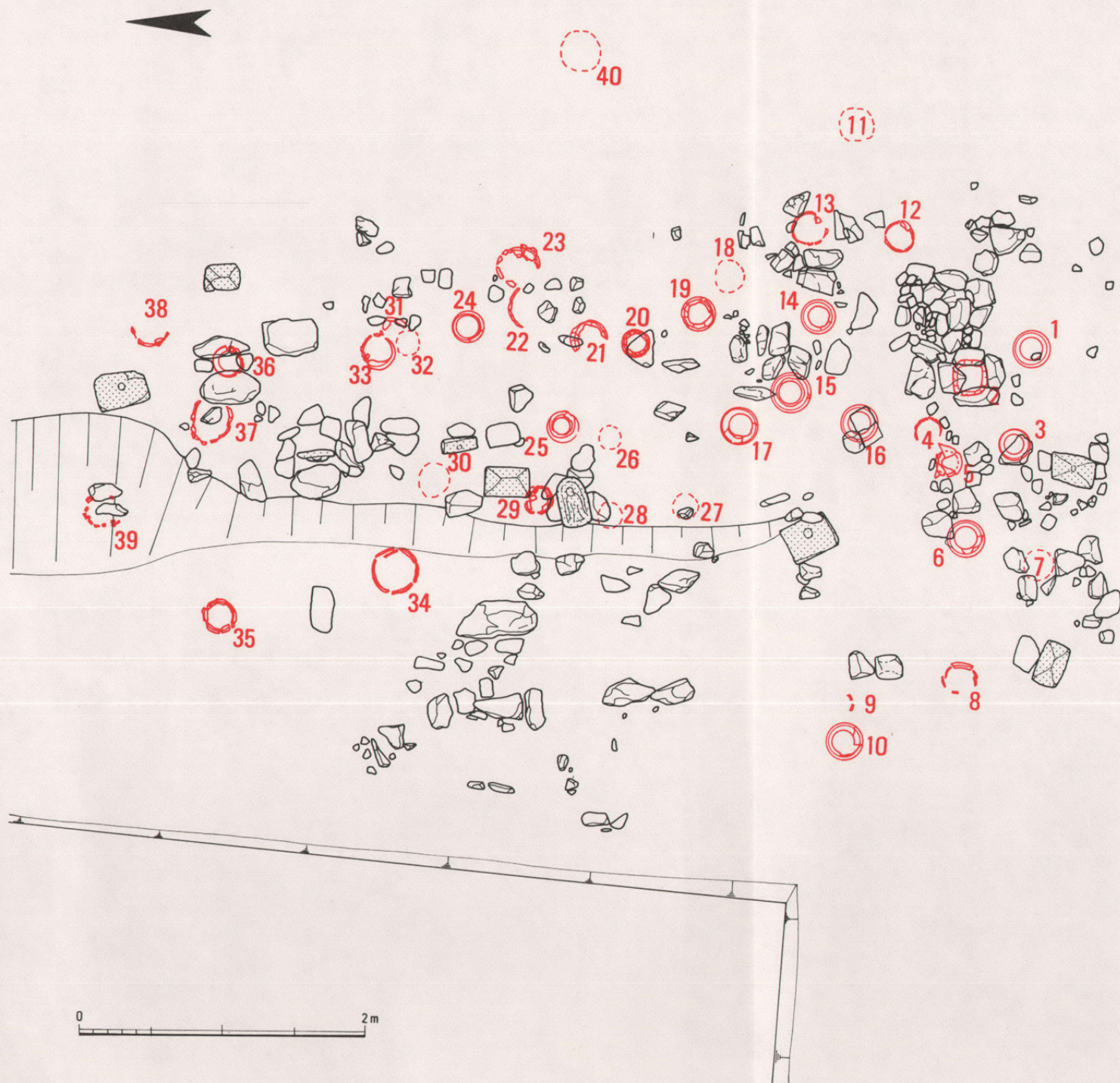
蔵骨器であ土師器羽釜に記された墨書の内、紀年銘が解読できるものは、C-35「寛正七年」(1466年)、C-21「文正元年」(1466年) C-1「文明五年」(1473年) C-15「延徳四年」(1492年)、C-16「明応六年」(1497年)、C-29「^{「永」カ}口正九年」(1512年?)、C-23「^{「永」カ}口正十三年」(1516年?)、C-10「^{「三」カ}大永^{「三」カ}口年」(1523年?)であり、この区域では15世紀後半から16世紀前半に墓地の造営が行われていることがうかがえる。

D区(第24図、図版21～23)

B区の東側斜面、東西約8m、南北約9mに墓地が広がる。この区域の東部分は城郭の構築時に地山削平を行っているため、墓地の遺存状況は良くない。西部分は、整地の際、盛り土によって墓地遺構を埋めたため、比較的その遺存は良好であった。しかし、大部分の盛り土は、自然流失しているため、墓地遺構は比較的地表近くで発見された。

検出した墓は43基であり、土師器羽釜を蔵骨器とするもの31例、火葬骨だけのもの10例、瓦質土器容器2例である。しかしながら発掘区東部分で検出した火葬骨だけのものは、破壊が著しく、火葬骨とともに土師器羽釜片も出土しており、いくつかは本来土師器羽釜を蔵骨器としてもっていた可能性がある。

この区域においてもC区と同じく、南北に段(約20～60cm)が存在し、墓地造営にあたり、旧地形を若干削平し、平坦部をつくっていることがうかがえる。また墓の分布は、B区ほどの整然とした配置をとらないが、4～5基づつ同一の平坦面に集中して存在しており、a～fの6つの小グループ



第23图 C区中世墓地遺構平面図(1/40)



第24图 D区中世墓地遺構平面図 (1/40)

プの存在を見出すことができる。

(a グループ) 南北に並ぶD-12～D-16の5基で構成される。D-14には上部に方形の石材(1辺60cm)が存在する。蔵骨器である土師器羽釜の形態から15世紀後半の造営が考えられ、D-16はD-15との重複関係からD-15より新しいことがわかる。

(b グループ) 南北に並ぶD-17～D-20の4基で構成される。aグループの南約20～30cm低い位置に存在する。D-19の周囲に方形の石敷区画(1辺約50cm)がつくられる他、その、西、南、北の三方に石列(長さ1m)があり、区画施設と考えられる。aグループと同じく15世紀後半の造営が考えられるが、造営順序は明らかではない。

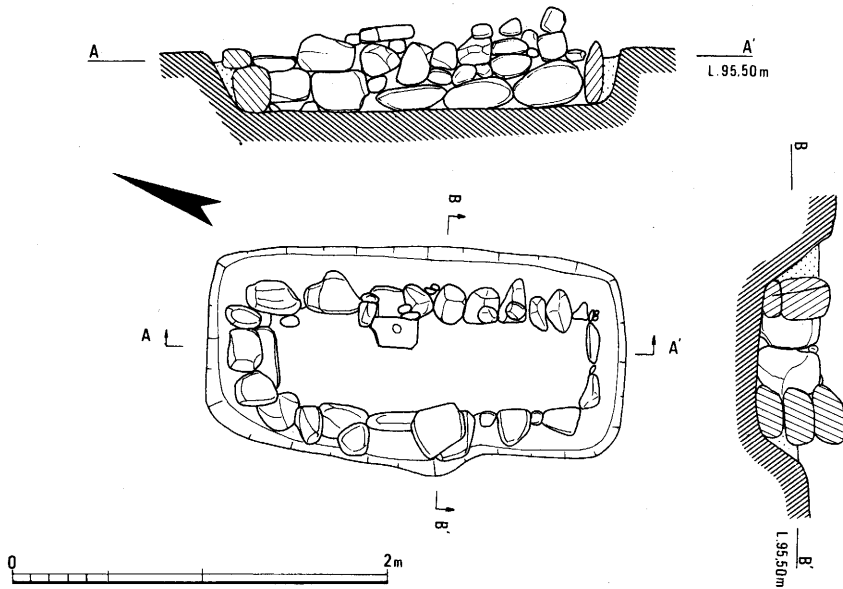
(c グループ) 南北に並ぶD-21～D-25の5基で構成される。D-21の東側に方形の石材2個(30cm×30cm)が存在する他、D-24の上部に石仏、五輪塔火輪、水輪部があり、この水輪上からは、鉄鎌が出土した。D-24は蓋のある瓦質土器甕を埋置するものであるが、内部には火葬骨、その他の遺物はまったく認められなかった。D-22が、B区で出土したものとほぼ同様の形態をもつ土師器壺を蔵骨器として使用しているので14世紀末～15世紀前半と考えられるが、他は15世紀後半の造営が考えられる。

(d グループ) 南北に並ぶD-26～D-30の5基で構成される。cグループの西約20cm低い位置に存在する。D-26の北側、D-27～D-30の西側のそれぞれに石敷施設が存在するが、石敷の下に埋葬主体は認められず、塔婆の基礎部分と考えられる。D-26、D-27の間北側には扁平な石2個をならべた上に五輪塔台座が原位置で遺存する。この下にも埋葬主体はなく、このグループに対する供養塔のものと推定される。D-28の南で検出したピット(30cm×30cm、深さ20cm)は内部から遺物の出土はなく、石仏、板碑などをすえつけるために掘られたものとも考えられる。羽釜形土器の形態から、D-26、D-27が16世紀前半と推定され、他は15世紀後半の造営が考えられる。なおこのグループの北側はcグループとの間に南北に長い平坦面(東西幅約40cm)があり、墓道の可能性がある。

(e グループ) D-33～D-36の4基で構成され、外部施設として方形の石敷施設(1辺約1.2m)をもつ。また石敷上には五輪塔台座2個が原位置で遺存していた。4基の土師器羽釜の蔵骨器の他、須恵器壺がその北側に埋置されていた。須恵器壺は、ほぼ完形で、壺そのものは時期的には8世紀を下らないものと思われ、出土品の蔵骨器への転用の可能性も考えられるが、内部からは、火葬骨その他の遺物は発見されず、その性格については今後の検討の余地を残す。土師器羽釜からD-36が16世紀前半、他は15世紀後半の造営が推定される。

(f グループ) 南北に並ぶD-37～D-41の5基で構成される。Dグループの西、約30cm低い位置に存在する。石敷施設はほとんど見られない。蔵骨器として使用された土師器羽釜には、D-39に「長禄四年」(1460年)墨書紀年銘があるが、その他のものでは、D-41がその形態から16世紀前半のものと考えられる。またD-38はその墨書銘に「覺妙房」と被葬者の名が読みとれるが、G区の地表に散在していた五輪塔地輪には同一の名を刻するものがあり、石造物と埋葬主体が合致す

IV 城山地区の調査



第25図 SX 02 平面・断面図 (1/40)

る例として興味深い。

以上 a ~ f の D 区にみられる小グループについてのべたが、D 区で検出した墓地遺構として特にあげておくものとしては、a, b グループの北側で検出した方形石敷（一辺 80~90cm）と SX 02 がある。方形石敷は、河原石を 3~4 列ならべてその間に小礫をつめるものであるが、その下および周囲からは埋葬主体は発見されなかった。塔婆基礎施設と考えられる。SX 02 は、長方形の掘形（2.2 m × 1 m）の中に石組（1.8 m × 40cm、深さ約 40cm）をつくるものである。石組は、河原石（30~40cm 大）を 2~3 段積みあげる。城郭の整地土下より発見したため墓地遺構と考えられるが、出土遺物はその埋土上層より銭貨（洪武通宝）1 点出土したのみで皆無に近く、墓地遺構と断定する確証も乏しい。

E 区

E 区では城郭構築時に大部分地山削平を行っており、D 区に近い地点で、火葬骨だけを埋納したものの 1 基検出した。

F 区

F 区においても E 区同様、地山削平部分が広いが土師器羽釜を蔵骨器とするもの 1 基と SX 03 を検出した。SX 03 は方形土壇（一辺約 60cm、深さ約 30cm）の周囲を溝（幅約 30cm、深 5~30cm）が 40~60cm の間隔をおいてめぐらるもので地山を掘削してつくっている。出土遺物は皆無であるが、中央の土壇に蔵骨器が埋置されていたとも考えられる。

2. 出土遺物

城山地区の調査で出土した遺物には、城郭の遺構およびその包含層から出土した土器類、瓦類、石製品、金属製品と、中世墓地から出土した土師器羽釜を中心とする蔵骨器、墓地を構成していた石造物がある。まず蔵骨器として使用されたものを除く土器類、瓦類について記述したのち、中世墓地の蔵骨器、石造物、その他の遺物の順に記述を進めたい。なお土製品については土器類に含める。

(A) 土器類

蔵骨器として使用されたものを除き、城山地区の調査で出土した土器類には、土師器、瓦質土器、陶磁器、須恵器があり、土製品として瓦質の土製管がある。これらは、城郭の遺構を覆う包含層および、土壌、溝、石組遺構などから出土しているが、これらの中でG区の土壌 SK 04, E区の石組遺構 SX 01 より出土したものが、数量的にも多く、まとまりをもっているのでこれらを中心にのべることにする。

SK 04 出土土器 (第26図, 図版24)

土師器皿、土製燭台、瓦質土器鉢などがある。土師器皿はその形態の差違からA, B, Cの三種に区分できる。

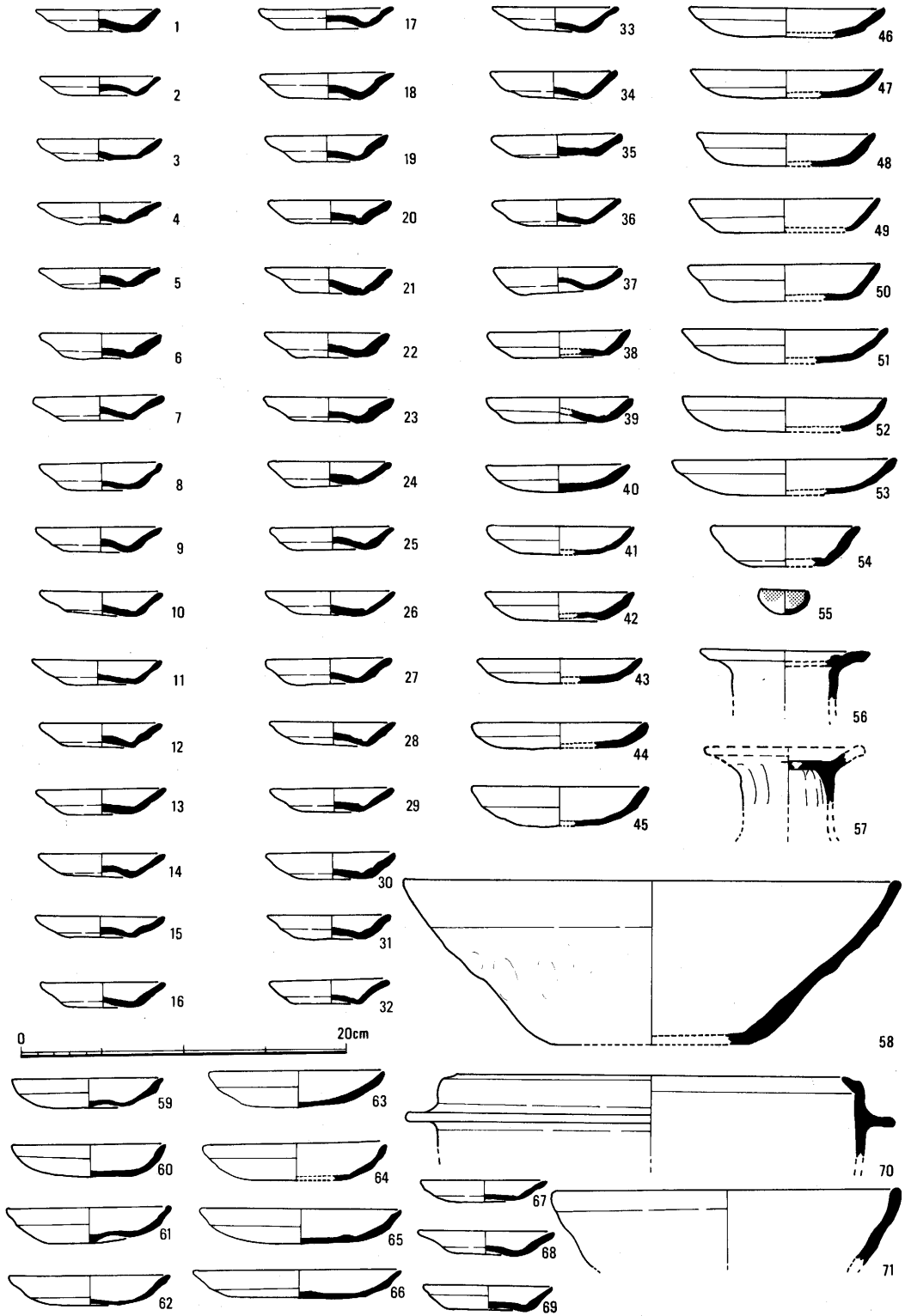
土師器皿A (38~53) 平らな底部と斜め上に開く口縁部からなる。口縁部はやや厚く、口縁端部は丸くおわる。内面および口縁部外面上半部分によこなでを施し、軽い稜線をつける。大きさによって土師器皿A I (51~53; 口径13~14cm, 器高約2.2cm), 土師器皿A II (43~50; 口径11~12cm, 器高1.6~2.4cm), 土師器皿A III (38~42; 口径9~10cm, 器高1.6~1.8cm) に分けることができる。色調は黄白色~淡黄褐色を呈し、胎土内にはわずかに砂粒を含む。49の口縁端部には油煙の黒色物質が付着している。

土師器皿B (54) やや小さい平らな底部と斜め上にひらくやや長い口縁部からなる。やや深い形態をもつ碗形のものである。口縁部はやや厚く、口縁端部は丸くおわる。内外面ともよこなでを施す。色調は淡褐色を呈し、胎土内にはわずかに砂粒を含む。

土師器皿C (1~37) 小さな底部と低く外反する口縁部からなり、底部がやや上げ底気味のものである。大きさは口径8cm前後のものがほとんどを占める。口縁部はやや厚く、口縁端部は丸くおわる。内面はよこなでを施すが外面は指おさえて仕上げ、全体につくりが荒く歪みのあるものが多い。色調は淡灰褐色を呈し、胎土内にはこまかな砂粒を含む。SK 04 出土土器ではこの土師器皿Cの数量が最も多い。

土製燭台 (56, 57) 斜め上に開く皿部と筒状の脚部からなる。57の皿部底には1ヶ所穿孔されており、脚内より竹串などをさし込み、燭台として使用されたものと思われる。いずれもよこなで

IV 城山地区の調査



第26図 SK 04 出土土器 (1~58) SX01出土土器 (59~71) (1/4)

を全体に施し、色調は暗褐色～淡褐色を呈する。

土師器碗(55) 口径、器高とも約2cmの丸底の土師器碗である。口縁部は内彎し、口縁端部はやや内側に肥厚させ尖り気味におわる。色調は淡褐色を呈し、内外面の一部に赤色顔料の付着が認められる。

瓦質土器鉢(58) 平らな底部と斜め上に開く体部からなる。口縁部はやや立ち上り、口縁端部は丸くおさめている。内面、外面上半部分はよこなで、外面下半部は指おさえを施す。色調は淡灰色を呈し、胎土中にはわずかに砂粒を含む。破片のため、片口をもつものかどうか明らかではない。

SX 01 出土土器 (第26図, 図版24)

土師器皿A, 土師器皿C, 土師器羽釜, 瓦質土器鉢がある。土師器皿A(59~66)および土師器皿C(67~69)はその調整手法、色調、胎土ともSK 04出土の土師器皿A, 土師器皿Cのそれぞれとほぼ同様のものである。また土師器皿Aには、土師器皿A I(65, 66), 土師器皿A II(63, 64), 土師器皿A III(59~62)があり、59~63には口縁端部に油煙状黒色物質が付着している。

土師器羽釜(70) 直立した頸部とほぼ直角に内折する口縁部をもつ土師器羽釜^{注)}Cである。口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部、頸部ともよこなでを施し、鐳部を貼付している。胎土内にはわずかに砂粒を含む。外面鐳部下から胴部にかけて器壁に付煤しており、煮沸器として本来の機能を果していたことがうかがえる。

瓦質土器鉢(71) 外反したのちゆるやかに立ち上る口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。内面および口縁部外面にはよこなでを施す。色調は灰色を呈し、胎土にはわずかにこまかな砂粒を含む。破片のため、片口をもつものかどうか明らかではない。

埋甕・埋甕内出土土器 (第27図, 図版24・25)

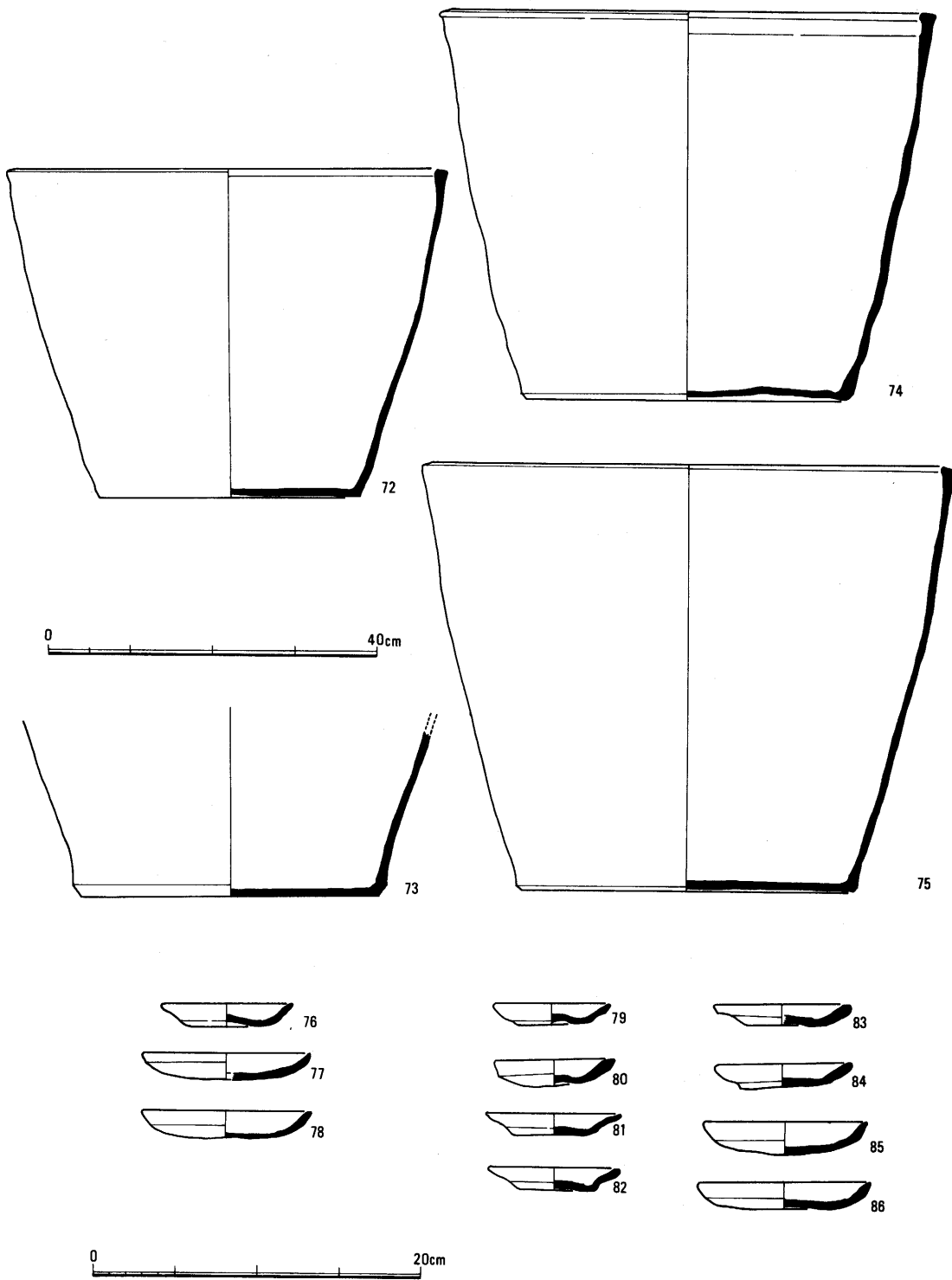
埋甕として使用された瓦質甕と、F区埋甕IV, G区埋甕V内より出土した土師器皿がある。

瓦質土器甕(72~75) E区埋甕I(72), 埋甕II(73), F区埋甕IV(74), G区埋甕V(75)である。いずれも瓦質土器で、平らな底部とやや内彎し外傾する体部からなる。口縁端部は上端を平担におさめ、内側に肥厚させる。粘土帯を輪積して成形し、円板状の粘土を貼りつけ底部をつくる。外面はへら削りの後なでを施し、底部外縁はへら削りする。内面なでとともに指おさえを施し、内面の底部接合部は強くよこなです。色調は淡灰色を呈するが、72・75の表面は炭素の吸着により黒灰色を呈している。また74は焼成が良好で堅緻である。

土師器皿(76~86) F区埋甕IV内より出土したもの(76~78)とG区埋甕V内より出土したものの(79~86)である。土師器皿A(77, 78, 85, 86)と土師器皿C(76, 79~84)があり、土師器皿Cのうち81~84は、円板状の突出した底部をもつ。

注) 土師器羽釜の呼称については本書P42参照

IV 城山地区の調査



第27図 埋甕 (72~75) (1/8)・埋甕内出土土器 (76~86) (1/4)

他の遺構・包含層出土土器（第28～30図，図版26）

E区の溝SD07より出土した瓦質土製管，E区の埋甕Ⅲの下より出土した瓦質土器鉢の他，E区の城郭遺構面を覆う包含層を中心に，各発掘区の包含層より土師器皿，土製燭台，土師器羽釜，瓦質土器鉢，甕，盤などが出土している。以下その主要なものについて記述するが，ここでは特にことわらない限り，E区包含層より出土したものである。

土師器皿C（87～112） SK04出土の土師器皿Cと同様のものが多い。上げ底気味の底部と低く外反する口縁部とからなるが，口縁部が屈曲し，ほぼ水平に広がるため，底部が突出しているもの（110～113）がみられる。口径も8cm前後のもの他，7cmから9cmのものも存在し，色調については淡茶褐色を呈するものが多い。

土師器皿A（114～118）土師器皿AⅠ（117），土師器皿AⅢ（114～116）があり，SK04出土の土師器皿Aと調整手法，胎土など共通するものがほとんどある。118は調整手法は共通するが，口縁部が直線的に外傾し，口縁端部を外側へ肥厚させているなど，形態が若干異なる。色調は黄白色～淡褐色を呈している。

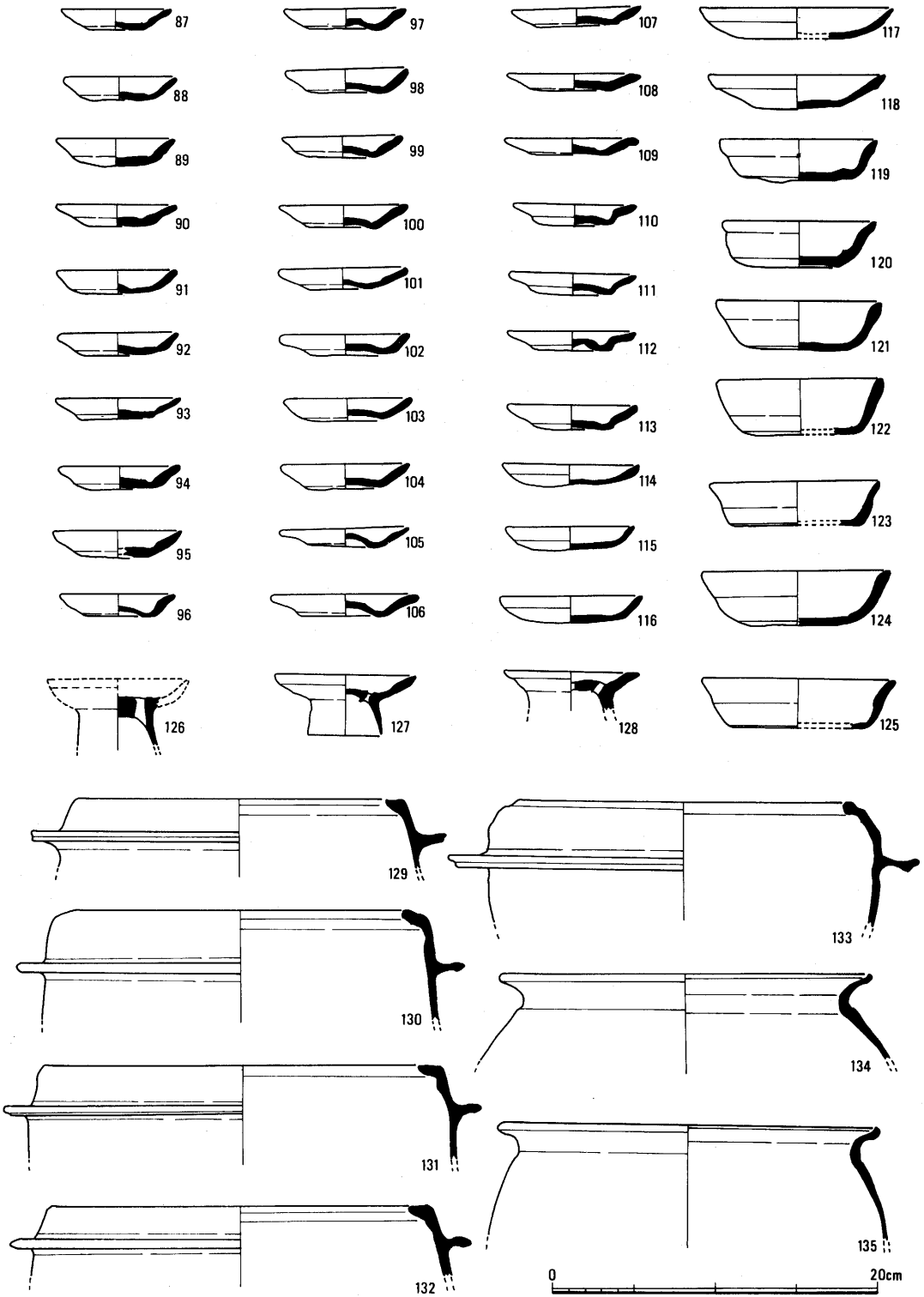
土師器皿B（119～125） やや深い形態をもつ椀形のもので，SK04出土の土師器皿Bとはほぼ同様のものが多い。色調は淡茶褐色～黄褐色を呈する。

土製燭台（126～128） 皿部分に筒状の脚部を接合したもので，皿部底に穿孔されている。126は穿孔が2ヶ所，127，128は4ヶ所に穿孔されている。穿孔は，焼成前に上から下へなされていることが観察できる。127は器壁が薄く，つくりもていねいである。皿部の内面に炭化物が付着している。色調は淡茶褐色～黄褐色を呈する。

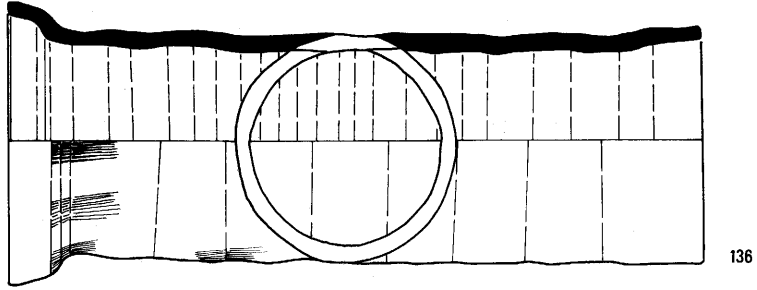
土師器羽釜（129～135） 直立した頸部をもち，口縁部が短く内折する羽釜C（129～132），内彎した頸部をもち，口縁端部を外側へ肥厚させる羽釜B（133），「く」字状に外反する口縁部をもち，口縁端部内側がわずかに立ち上る羽釜F（134，135）がある。羽釜Fについては，器壁が薄く同一個体と思われる罅部分が出土しているが復原はし得なかった。129，131，132は口縁端部が尖り気味におさめられている。130は口縁部を内側やや斜め上に折りまげており，蔵骨器として出土しているものに例がある羽釜Dの口縁形態に近似するが，羽釜形土器Dに特徴的な口縁部のよこなでによる凹線はみられない。いずれも口縁部，頸部，罅部にはよこなでを施し，胴部外面はなで，内面はなでおよび指おさえを施す。色調は淡黄褐色～淡褐色を呈する。罅部以下の胴部外面にはいずれも付媒しており，煮沸器として使用されたことがうかがえる。

瓦質土製管（136，137） E区の溝SD07に使用されていたもの3個体，B区の溝SD03に使用されていたもの1個体が出土した。いずれも大きさ，形態，成形技法，調整手法などが共通しており，完形を保っていたSD07出土の2例を図示した。円筒状の胴部と受口状の口縁部からなり，口縁端部は平坦な面をもっておわる。粘土紐の積み上げによって成形されており，頸部から胴部外

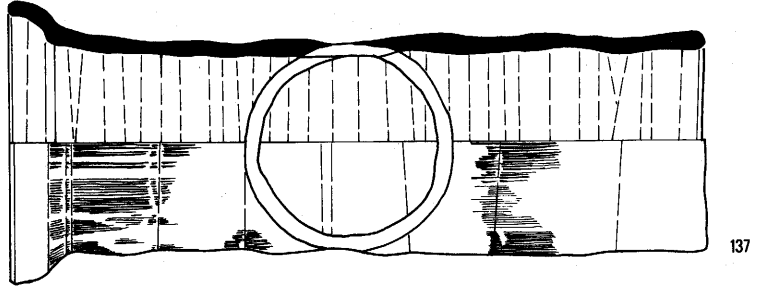
IV 城山地区の調査



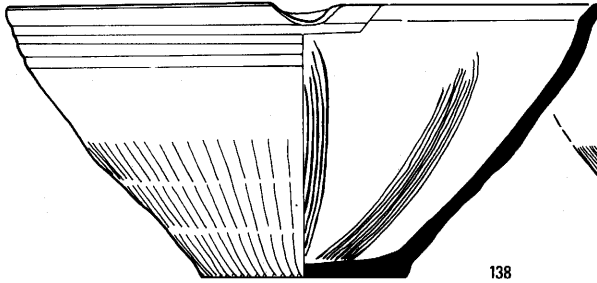
第28図 包含層出土土器 (1/4)



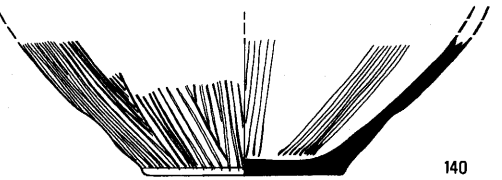
136



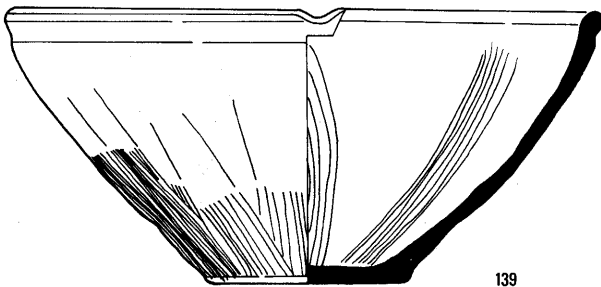
137



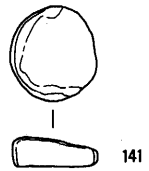
138



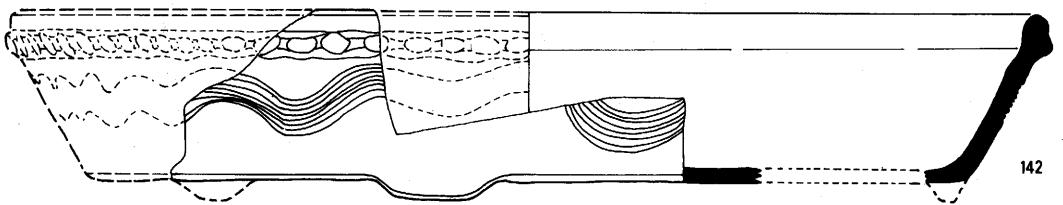
140



139



141



142

第29圖 出土瓦質土製管，瓦質土器(1/4)

IV 壊山地区の調査

面にかけてはハケ目が施される。また口縁部はよこなで、内面にはなでが施される。色調は灰色を呈し、表面は炭素の吸着により黒灰色を呈している。胎土内にはわずかに砂粒を含む。

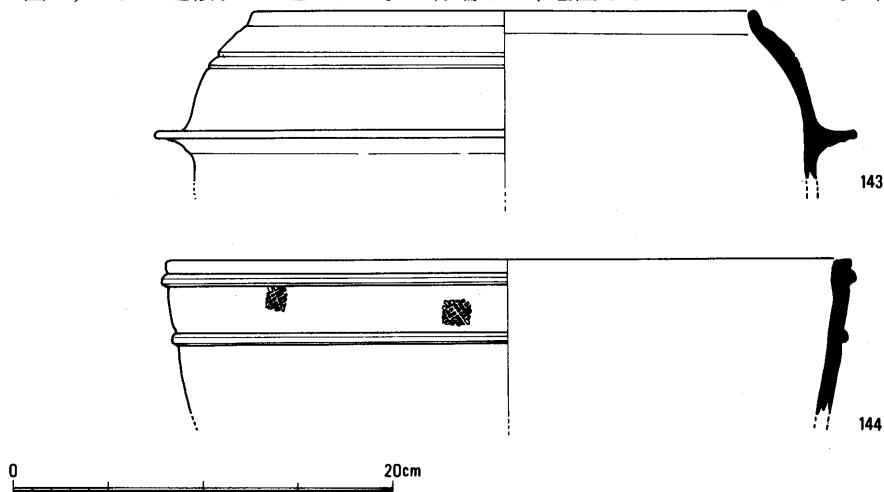
瓦質土器鉢(138~140) E区埋甕Ⅲの下から出土したもの(138), E区包含層より出土したものの(139), B区SK01より出土したもの(140)がある。いずれも平らな底部とやや内彎気味に立ち上る体部からなる。口縁端部は138ではやや外傾し、尖り気味におさめられ、139では丸くおさめられている。いずれも片口をもつ。外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部外面には横方向のハケ目が施されている。内面はよこなでの後、放射状に櫛描き挿目(9~10本)を7条単位施す。挿目の一部は、使用のため一部磨滅している部分が観察される。色調は灰色を呈し、139, 140の外面は炭素吸着のため黒灰色を呈している。胎土内にはわずかに砂粒を含む。

土製小円板(141) C区包含層より出土した。直径4.0~5.2cm, 厚さ0.8~1.5cmの大きさで、瓦質土器片を磨いてつくられる。中世墓地に伴う冥銭などの葬祭具とも考えられるが明らかではない。

瓦質土器盤(142) 広く平らな底部と外傾する口縁部からなり、台形の脚部を貼付している。内面はなで、口縁部外縁、底部外縁にはヘラ削りを施す。外面上部に指圧文をもつ突帯を貼付し、その下に櫛描波状文(8本)を1条施し装飾する。色調は灰色を呈し、表面は炭素吸着のため黒灰色を呈している。胎土内には少量の砂粒を含む。

瓦質土器羽釜(143) C区の中世墓地遺構の上層から出土したもので、蔵骨器として使用された可能性がある。内彎する頸部と直立する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめられる。内外面ともよこなでが施され、頸部外面には2本の沈線がめぐる。色調は炭素の吸着により黒灰色を呈するが、一部分赤褐色を呈する。なおこの他に瓦質土器羽釜の鏝部破片がE区SX01内より出土している。

瓦質土器甕(144) 直線的に立ち上る口縁部をもつ。器形としては蔵骨器として出土しているもの(第45図60, 62)に近似すると思われる。口縁端部は平坦面をもっておさめられる。外面に貼付突



第30図 出土瓦質土器(1/4)

帯2条がめぐり、その間に斜格子のスタンプ文が印される。色調は灰色を呈し、表面は炭素吸着のため黒灰色を呈している。

陶磁器（第31図，図版27）

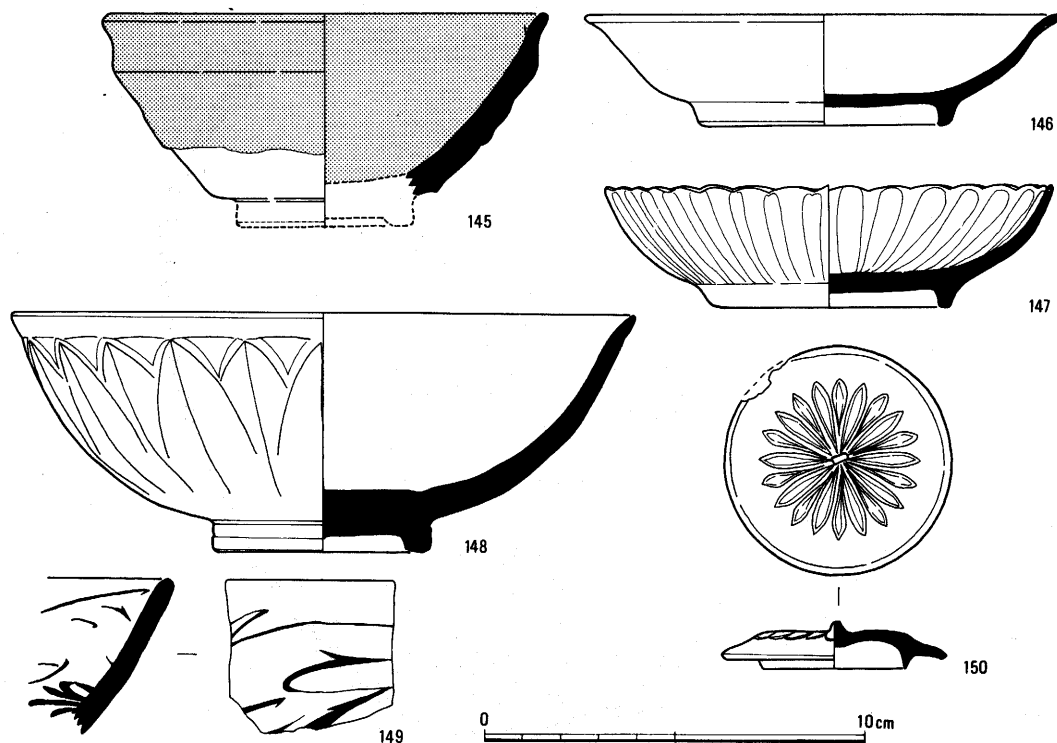
陶磁器には、施釉陶器碗の他、中国産の白磁、青白磁、青磁がある。いずれも発掘区の表土および包含層から出土したもので、遺構に伴うものではない。

施釉陶器碗（145） 高台部を欠損する。口縁部は外上方へのび、口縁端部付近で立ち上り、やや外反する。胎土は白色で、茶褐色の鉄釉が内面および外面中央よりやや下まで施される。美濃焼系の天目茶碗と考えられる。

白磁皿（146） 「S」字状にゆるやかに立ち上る口縁部をもち、高台をそなえる。高台部端面の釉を掻き取る以外は、全面に透明釉が施される。磁胎は白色で、表面に貫入は認められない。16世紀、中国景德鎮民窯系の製品と考えられる。

青磁皿（147） 高台をもち、口縁端に花卉形のきざみを入れ、内外面を削り、花卉を表現する。釉色は淡緑色を呈し、高台端部の釉を掻き取る以外は全面に釉を施す。とくに高台部外面には厚く釉がたまる。磁胎は白色で表面に貫入は認められない。

青磁碗（148, 149） 148 はほぼ完形で出土したもので、内彎し上方にのびる口縁部をもち、厚い高台をそなえる。水びきロクロ成形を行い、高台部は削り出している。口縁端部はやや外反さ



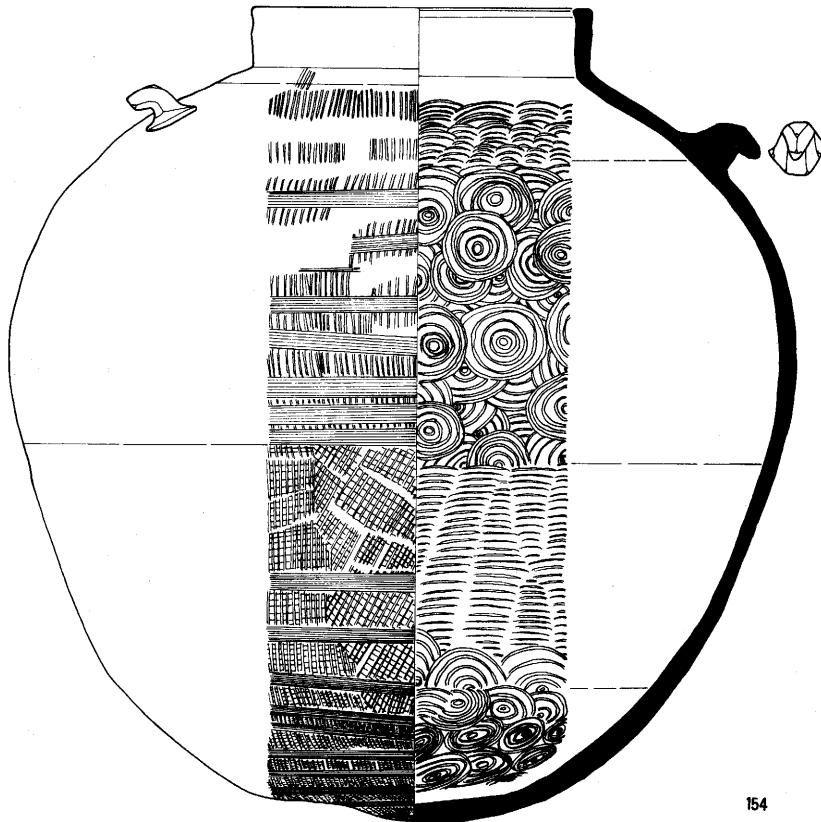
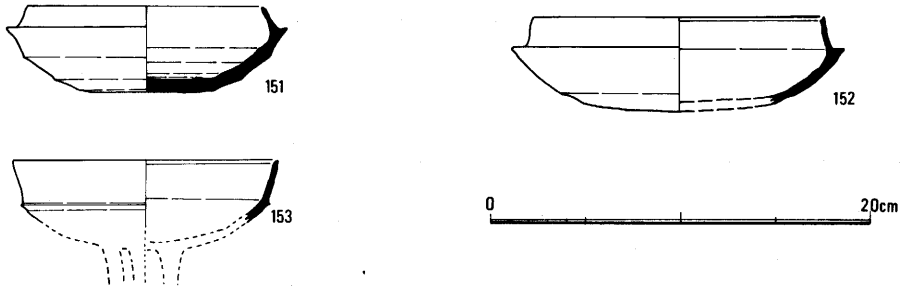
第31図 出土陶磁器（1/2）

IV 城山地区の調査

せて尖り気味におわらせている。外面にやや不明瞭な鏝のある蓮弁文を浮彫りする。釉色は灰緑色を呈し、高台端部、底部外面を露胎とする他は釉を全面に施す。露胎部分は赤褐色を呈し、磁胎は淡灰色である。表面にはやや荒い貫入がみられる。13~14世紀、中国龍泉窯系の製品と思われる。

149 は外面および内面に片切彫手法によって草花文を配するもので、釉色は淡緑色を呈し、磁胎は灰白色である。表面に貫入はみられない。

青白磁小壺蓋（150） ゆるやかに外下方にのびる天井部に菊花状の蓮弁文を型押しする。鈕をつけるがその孔は釉によってふさがれている。外面のみ青味がかった透明釉が施され、内面は露胎である。磁体は白色で表面に貫入は認められない。12世紀中国景德鎮窯系の製品と思われる。



第32図 出土須恵器(1/4)

須恵器（第32図，図版27）

包含層から出土した杯，高杯片の他，D区中世墓地から出土した壺がある。

杯（151，152） 151は，口縁部の立ち上りが比較的短く内傾し，口縁端部をまるくおさめている。152の口縁部立ち上りは，やや直立気味で口縁端部は内傾する。いずれも底部は扁平で，ヨコナデで仕上げ，底部にはヘラ削りを行う。色調は青灰色を呈し硬質である。

高杯（153） 口縁部だけの破片である。口縁部はやや外傾し，口縁端部は尖り気味におさめる。外面底部との境に稜をもつ。色調は暗灰色を呈し，自然釉がつき硬質である。杯，高杯とも時期は6世紀に属するものと考えられ，他に，須恵器小片も出土していることから，古墳が存在していた可能性も考えられる。

壺（154） D区の中世墓地eグループより出土したもので，蔵骨器として使用されていた可能性がある。球形の胴部と直立する口縁部からなり，肩部5ヶ所に把手がつく。口縁端部は上端が平担におわる。口縁部はヨコナデ，胴部から底部の外面は，タタキを施した後，カキ目を施し，内面には同心円文圧痕が残る。色調は淡灰色，硬質である。

(B) 瓦類

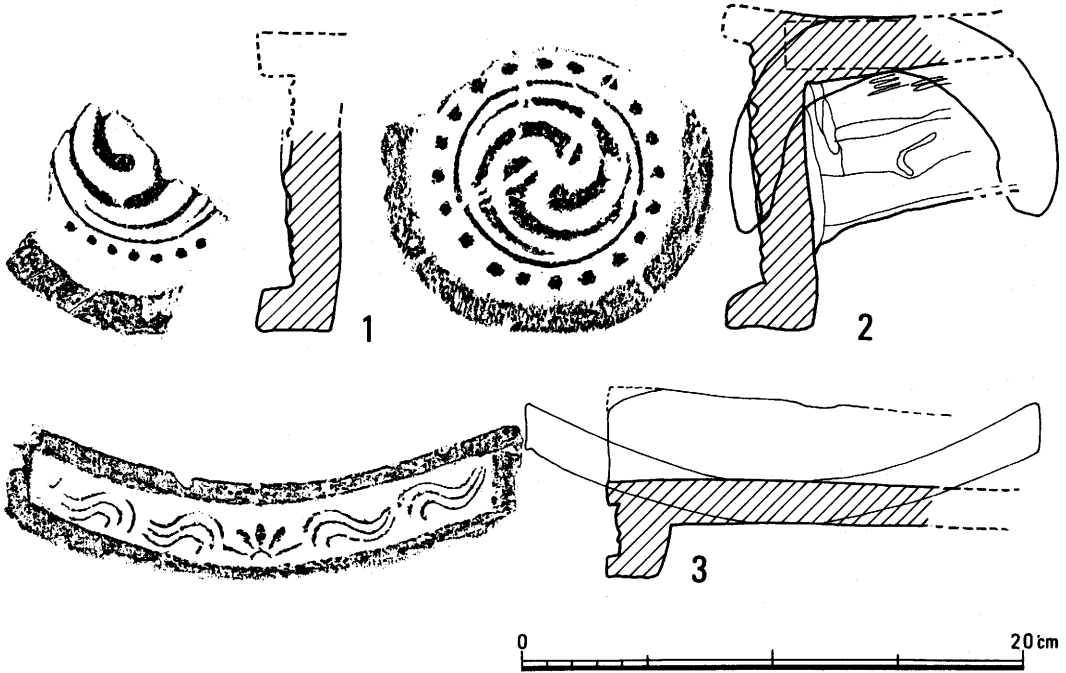
城山地区の調査で出土した瓦類は量的に少ない。B～E区城郭遺構を覆う包含層より出土したものの，E区 SD 06の蓋として使用された平瓦，中世墓地において蔵骨器の蓋として使用された平瓦などがある。城郭に存在したであろう建物については，瓦類の出土量が少なく，瓦葺建物であった可能性は低いように思われる。

軒丸瓦（第33図，図版28）

今回の調査で出土した軒丸瓦はわずか4点にすぎない。少片が多く瓦当文様のうかがえる2点のみ図示した。いずれも巴文を内区主文とし，外区内縁に珠文帯を飾り内外区を圏線で区画するものである。1は巴文頭部が左回りの三巴文で，巴文尾部は長くのびるが圏線には接しない。珠文は密に配する。色調は淡灰色で胎土中には多くの砂粒を含む。焼成は良好で非常に堅緻である。2は巴文頭部が右回りの三巴文のもので，珠文は1にくらべやや疎らに配する。丸瓦部との接合部凹面はナデが施され丸瓦凸面は縦方向にヘラ削りが施される。色調は淡灰色で，表面は炭素が吸着し黒灰色を呈する。胎土中にはやや荒い砂粒を含み，やや軟質な焼成である。

軒平瓦（第33図，図版28）

1点出土したにすぎない。中央に五葉の菊花状の蓮弁を飾り，その左右に退化した波状の唐草文3条を2単位配する。瓦当部及び顎部は，平瓦凸面に粘土を貼り，成形しているものと思われる。側面および顎部はヘラ削りを行い，平瓦部凹面，凸面とも横方向にナデ調整を施す。色調は灰白色を呈し，瓦当部両側縁付近のみ炭素が吸着し，黒灰色を呈している。胎土中にはやや荒い砂粒をわずかに含み，やや軟質な焼成である。



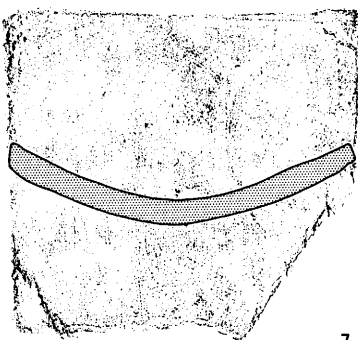
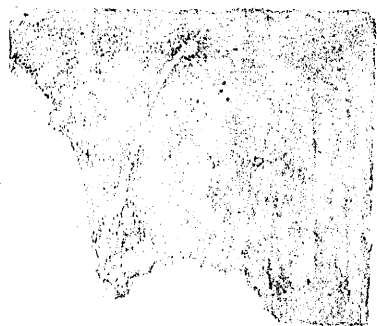
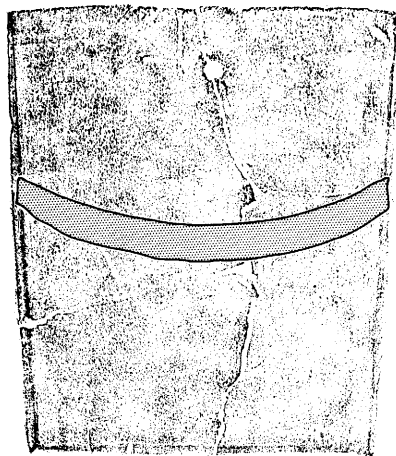
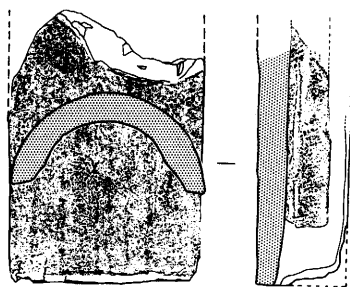
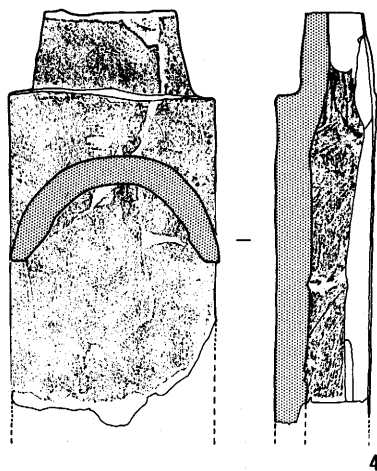
第33図 出土軒丸瓦・軒平瓦 (1/3)

丸瓦 (第34図, 図版28)

破片が多く、全体のうかがえる2例を図示した。4は凸面にナデ調整を施すが、縄目の叩き目がわずかに残る。凹面には布目および布袋紐の圧痕がみられ、玉縁部でシワが生じている。凹面側縁はヘラ削りによる面取りを行い。両側面、玉縁部端面はヘラ削りによって成形する。色調は灰白色、表面は黒灰色を呈している。胎土中にはやや荒い砂粒をわずかに含み、焼成は良好、やや堅緻である。5は凸面に縦方向のヘラ削りを行う他、凹面の端縁寄りにヘラ削りによる大きな面取り(削り)を施す。淡灰色で、胎土中にやや荒い砂粒を含む。焼成は良好、非常に堅緻である。

平瓦 (第34・35図, 図版29・30)

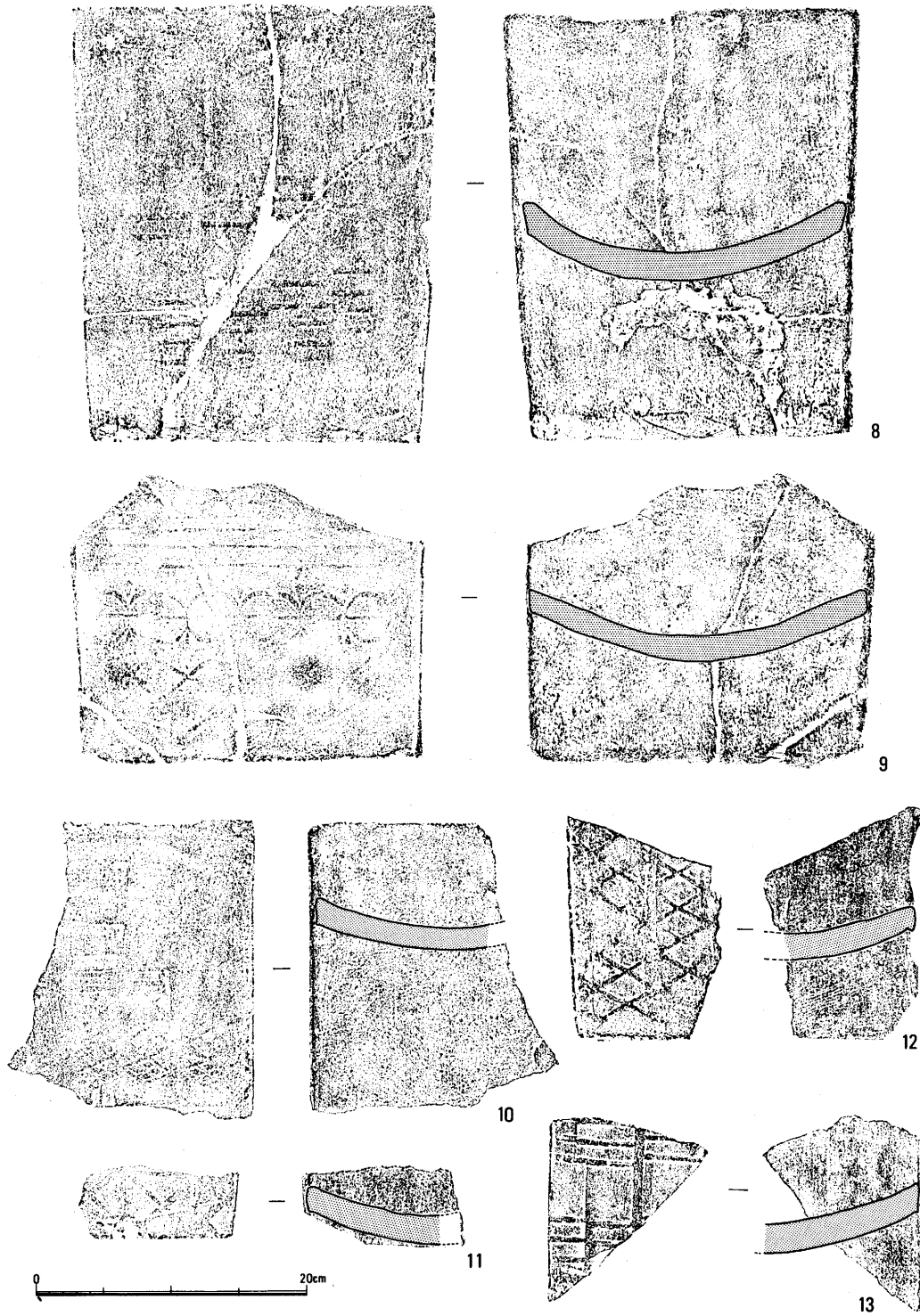
丸瓦に比べ出土量は多いが、その代表的なものについてのみ図示した。いずれも両側面および端面はヘラによって成形される。6, 8, 9, 12の凹面前端(狭端)縁付近の部分は水切りのためヘラ削りによる面取りを行う。6は、凸面縦方向のヘラ削り、凹面はナデ調整し、釘孔をもつ。色調は明灰色で、胎土中にはわずかに砂粒を含む。焼成は良好で非常に堅緻である。7は、凸面はナデ、凹面には荒い布目が残る。色調は灰白色、表面は黒灰色を呈する。胎土中にわずかに砂粒を含み、やや軟質な焼成である。8~13は、凸面に叩目文様が残るもので、種々の叩目文様がみられる。凹面はいずれもナデ調整を行っている。8, 9がやや軟質な焼成で色調は8が淡黄褐色を呈し9は灰白色、表面は黒灰色を呈している。10~13はいずれも焼成は良好で、非常に堅緻である。色



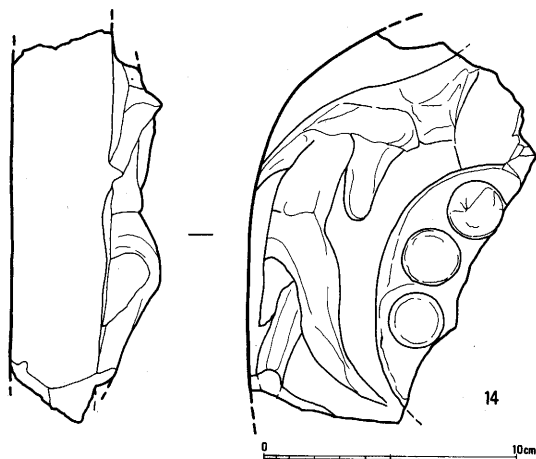
0 20cm

第34図 出土丸瓦・平瓦(1/5)

IV 城山地区の調査



第35図 出土平瓦(1/2)



第36図 出土鬼瓦(1/3)

10, 11, 13が淡灰色, 12が青灰色を呈し, いずれも炭素の吸着はみられない。

鬼瓦 (第36図, 図版30)

肩部の破片と思われる。珠文帯をめぐるしその外側に植物文様を飾っている。珠文はひとつづつ型押ししてつくり, 植物文様は粘土帯を貼りつけて, 全体をへらによって成形する。色調は淡青灰色を呈し, 硬質である。

(C) 蔵骨器 (第37~45図, 図版31~38)

蔵骨器として中世墓地に埋置されていたものには大きく分けて土師器羽釜を中心とする土師質の容器と瓦質のいわゆる火消壺形土器^{注1)}と呼ばれる小型の甕および瓦質土器火舎がある。これらのものは, 奈良元興寺極楽坊において納骨用容器として使用されていたことがすでに知られており, 奈良盆地を中心とする地域で墓地に蔵骨器として埋置されている例があることも知られている。今回の調査で出土したこれらの蔵骨器は, 比較的, 数量的にも多く, 蔵骨器に墨書銘のあるものも多いため, 従来の元興寺極楽坊の資料とともにきわめて良好な資料となるものと思われる。

蔵骨器に記された墨書銘は, 信仰の内容をうかがう上で重要であるが, 被葬者の没年号が記されたものは, 蔵骨器の確実な編年基準資料ともなる。墨書は土師器羽釜の胴部, 頸部に記されるものが多く, 鏝部, 胴部内面に記されるものもある。墨書の内容は, 被葬者の戒名・没年月日・カタカナ, 漢字による六字名号(南無阿弥陀佛)・『観無量寿経』中の1句である「光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨」・『大般涅槃経』に説かれる「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽」などの偈・種子では阿弥陀三尊, 地藏をはじめ五大種子・真言では光明真言^{注4)}などがあり, これらが何種類かくみあわされて記される。いずれも元興寺極楽坊納骨器にもみられるものであり, 浄土欣求, 墮地獄の救済, 滅罪積善を願う共通した信仰がうかがえる。(別表1参照)

注1) 『日本仏教民俗基礎資料集成第1巻』 1976

注2) 注1および元興寺極楽坊『元興寺極楽坊総合収蔵庫(第1収蔵庫)建設報告書』 1965

元興寺極楽坊出土の蔵骨器には, 包蔵坑より出土した納骨容器と, 墓地遺構から出土したものがある。

注3) 元興寺極楽坊他, 奈良市多聞山遺跡, 大慈仙墓地, 正暦寺裏山遺跡, 桜井市浅古共同墓地, 森谷山遺跡, 榛原町大王山遺跡などが知られる。

注4) 注1と同じ。

IV 城山地区の調査

土師器羽釜については、^{注5)}従来いくつかの研究^{注5)}成果があり、基本的にこれらの成果を踏まえ口縁部形態の差異を中心に分類を行った。しかしながら従来、土釜Aあるいは羽釜形土器A'と呼称されていた鏝をもたないものについては、形態上区別して土師器壺、土師器鍋として呼称する。鏝をもつ土師器羽釜については従来の呼称に従い、B、C、D、Fに区分した。なお蔵骨器として出土した土師器羽釜には器壁に付煤したものはみあたらない。

土師器壺 (1～3) 下半部に最大径をもつ球形の胴部と斜め上に開く口縁部からなる。口縁端部は内側に巻き込み肥厚させている。3個体出土したが、2個体(1, 3)はB区において、隣接して埋置されていた。いずれも口縁部はよこなで、胴部、底部外面はなで、内面は指おさえおよびなでが施される。3は器壁が薄くヘラ削りが施されたものと考えられるがその痕跡はていねいに消され観察し難い。2には頸部外面に凹線が2条施される。色調はいずれも黄白色を呈し、胎土はきめこまかい。3に「応永十六年」(1409年)の墨書紀年銘があり、他の2例も著しい差異のないことからほぼ同時期のものと思われる。

土師器鍋 (4, 5) 半球形の胴部と斜め上および水平に近く開く口縁部からなる。口縁端部は内側に巻き込み肥厚させている。2個体出土したが、いずれもB区より出土しており、隣接して埋置されていた。口縁部はよこなで、胴部内外面ともなでが施されるが、5の内面底部付近にはハケ目が施されている。色調は4が淡黄褐色、5が灰褐色を呈し、胎土はきめこまかい。4に「応永」の墨書銘が記されており、いずれも14世紀末～15世紀初頭にその時期が求められよう。

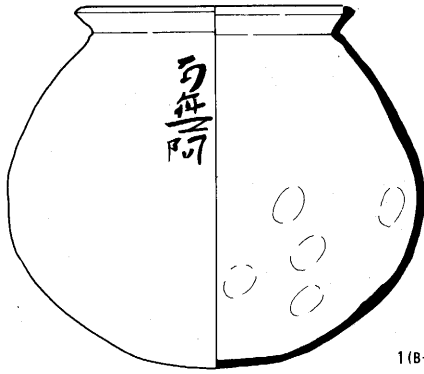
土師器羽釜B (6～12) 鏝をもつ羽釜形土器(鏝釜形土器)である。口縁部端部を外側へ肥厚させるもので、器壁がやや厚く口縁端部を丸く肥厚させるもの(6～10)と、器壁が比較的薄く、頸部が直立したのち口縁部を内折させ、口縁端部を平たく外側へ折り返しているもの(11, 12)がある。いずれも口縁部はよこなで、胴部、底部外面はなで、内面は指おさえおよびなでを施すが、6の内面にはハケ目が施されている。なお9の側面には1ヶ所穿孔されている。色調は黄白色～淡黄褐色を呈する。頸部が直立気味に立ち上る6に「応永四年」(1397年)の墨書紀年銘があり、14世紀末のものであることがわかり、15世紀後半のもの(7, 8)へと時間的推移とともに頸部が内彎してゆくことがうかがえる。10は頸部が長く、全体に扁平な形状を呈しており、7, 8に後続するものと考えられるため、16世紀初頭にその時期が求められよう。11, 12については、胎土が6～10に比較してきめこまかく、鏝の形態も短く突線状のものをもつものがあり、異なった製作系統が考えられるが、他の出土例^{注6)}などからみて時期は16世紀には降らないものと考えられる。

注5) 奈良県教育委員会『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報10』 1958

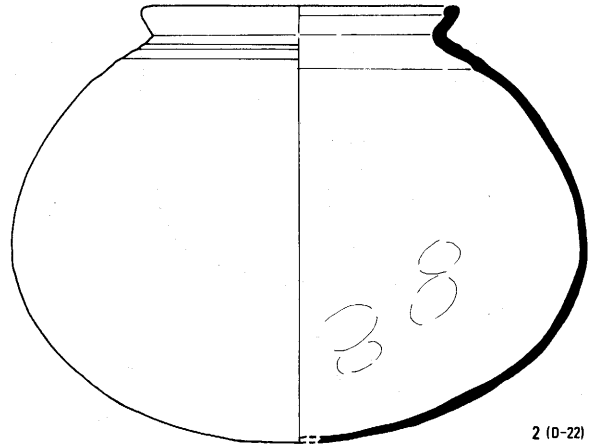
稲垣晋也「法隆寺出土資料による土釜の編年」『大和文化研究7-7』

伊藤久嗣「元興寺極楽坊出土の羽釜形土器」『元興寺仏教民俗資料研究所年報第一冊』

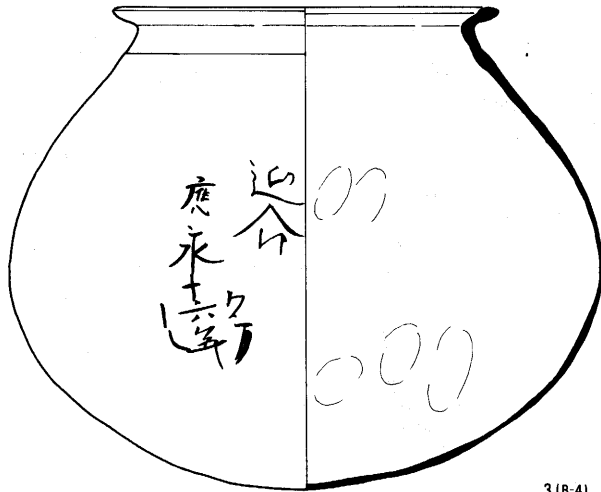
注6) 「平城京右京三条四坊 四坪発掘調査報告」参照



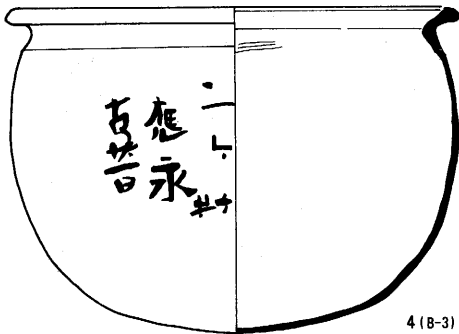
1 (B-5)



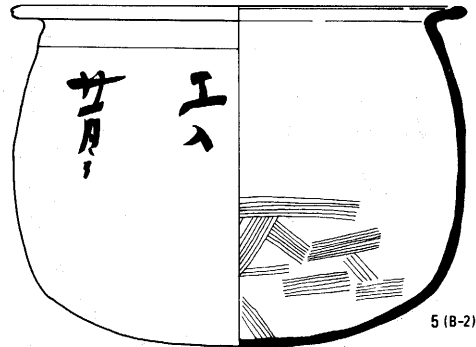
2 (D-22)



3 (B-4)



4 (B-3)

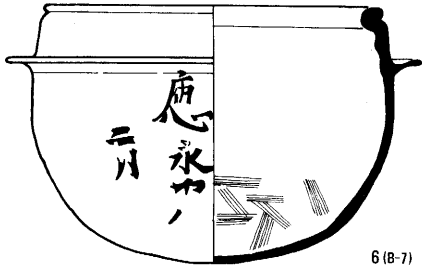


5 (B-2)

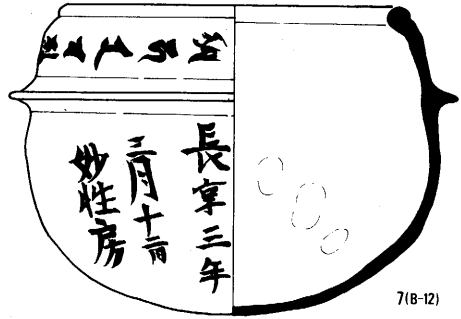


第37図 出土蔵骨器(1) (1/4)

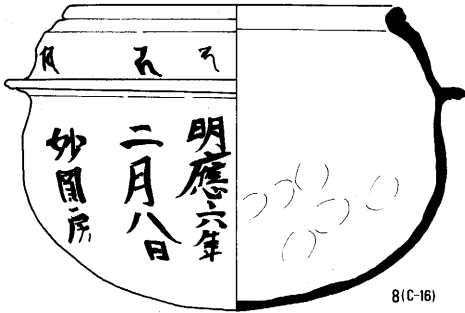
IV 城山地区の調査



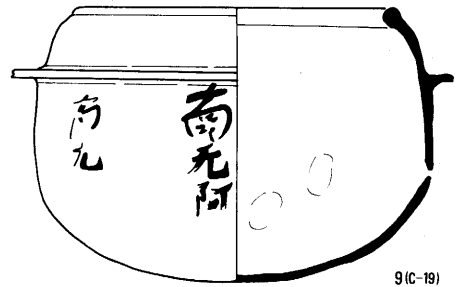
6(B-7)



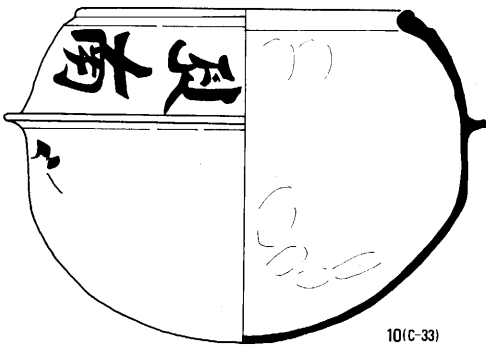
7(B-12)



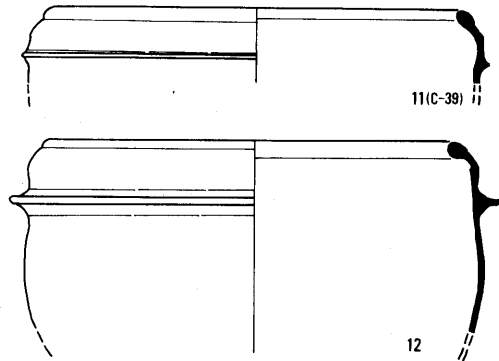
8(C-16)



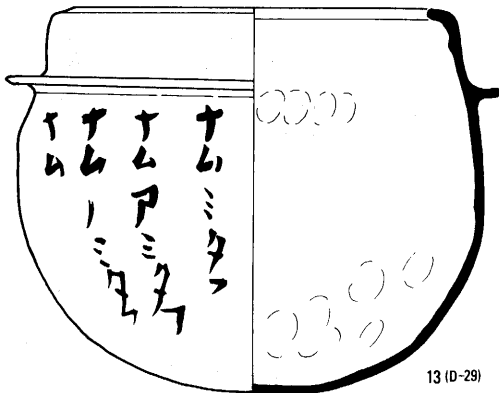
9(C-19)



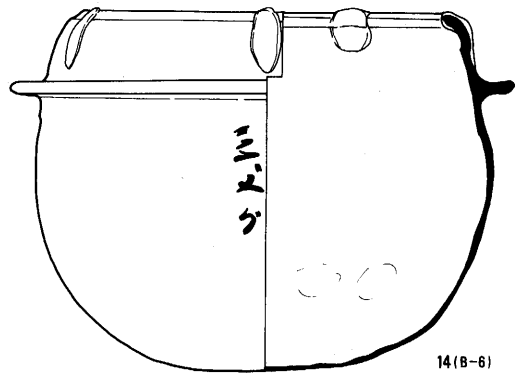
10(C-33)



11(C-39)



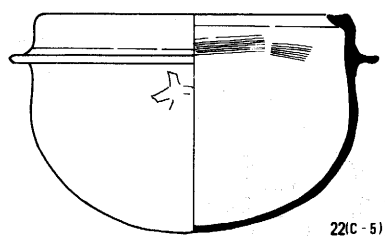
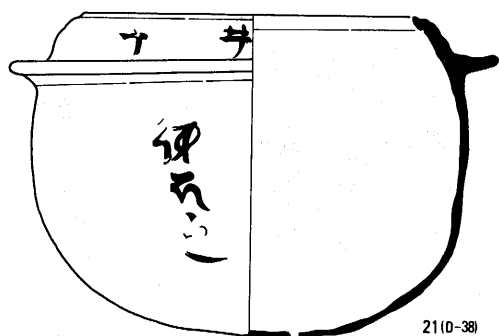
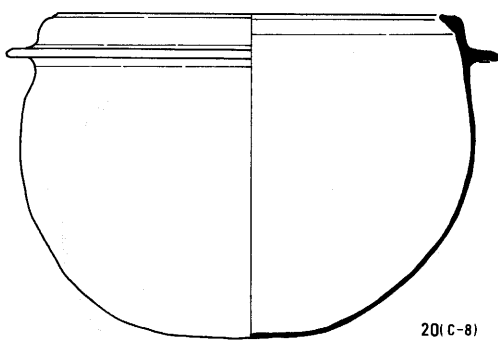
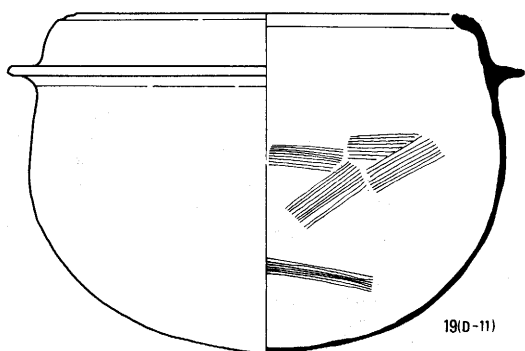
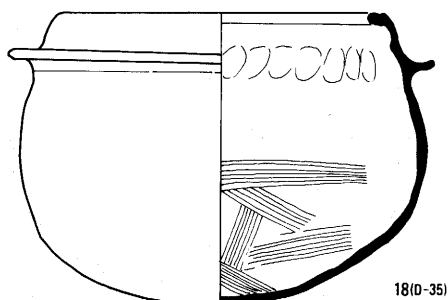
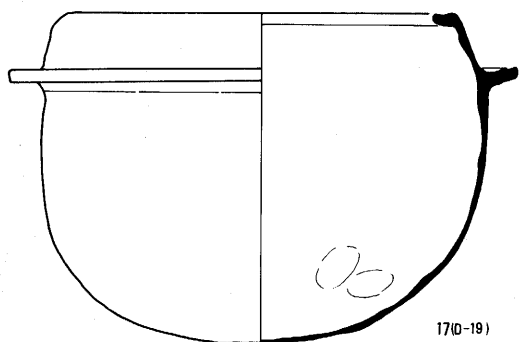
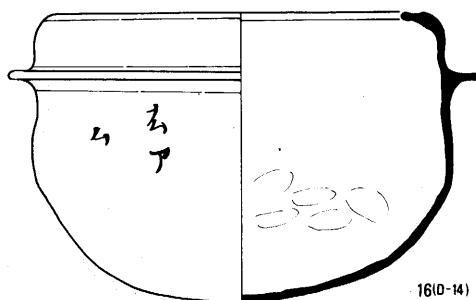
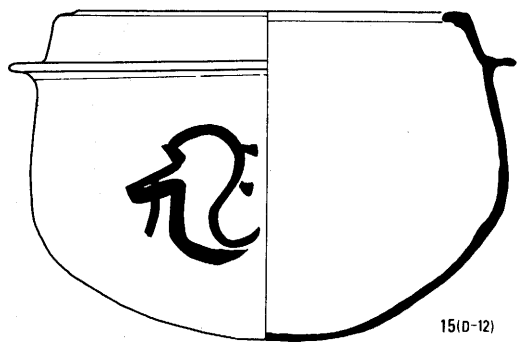
13(D-29)



14(B-6)

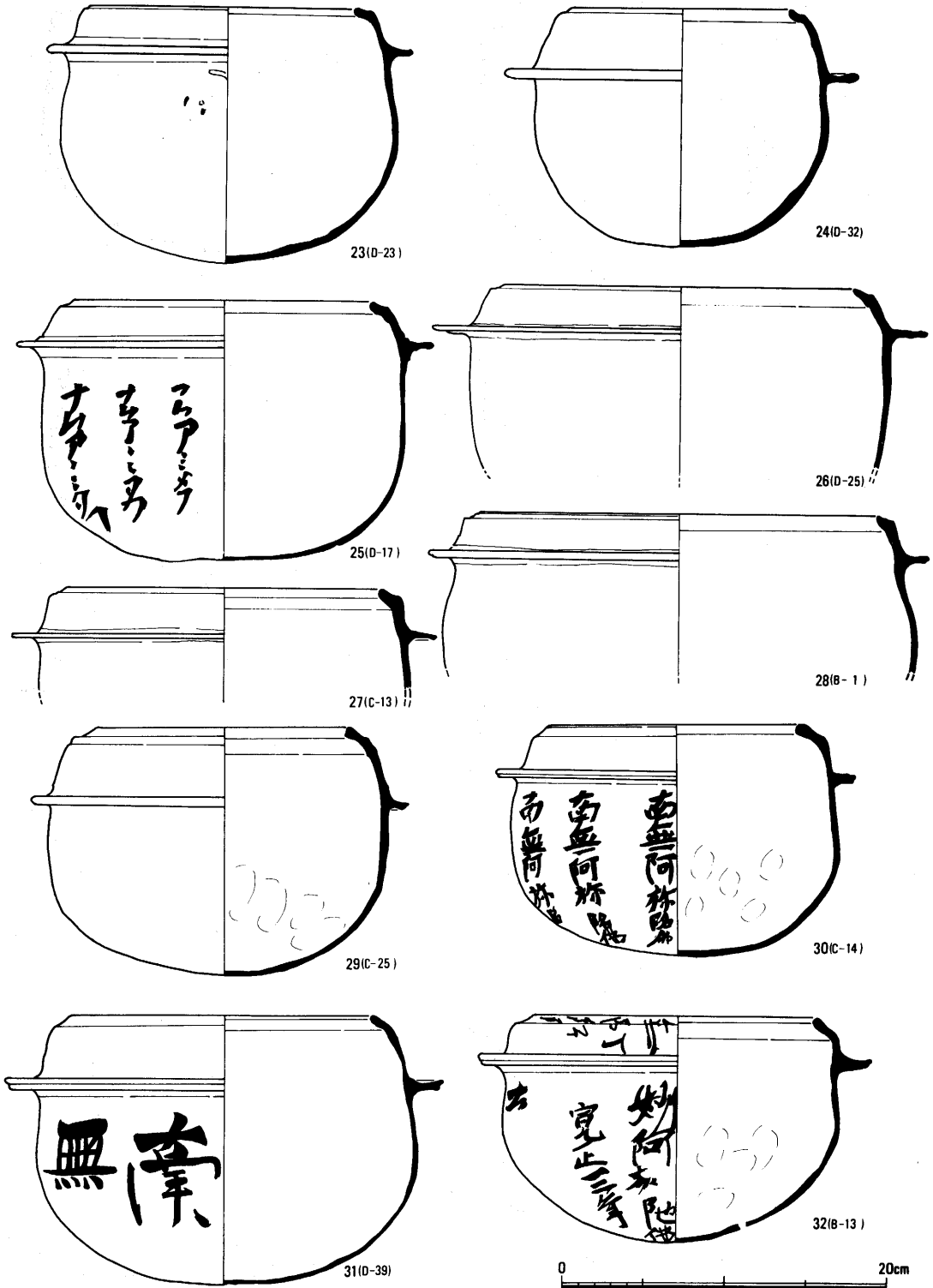


第38図 出土蔵骨器(2) (1/4)

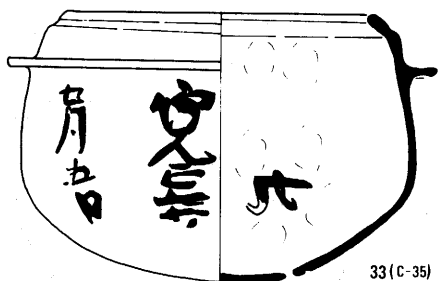


第39図 出土蔵骨器(3) (1/4)

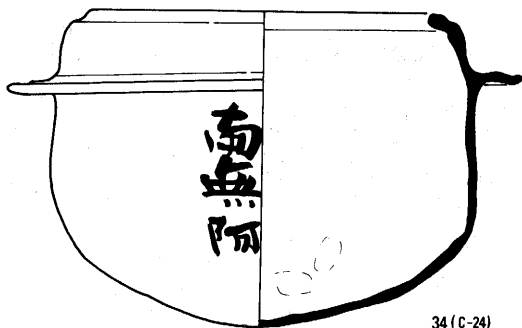
IV 城山地区の調査



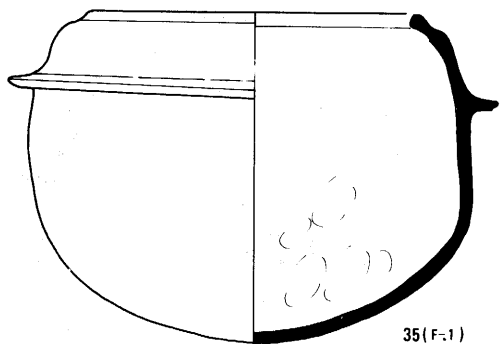
第40図 出土蔵骨器(4) (1/4)



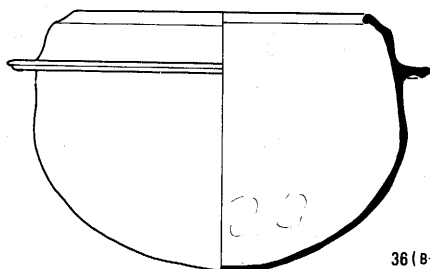
33(C-35)



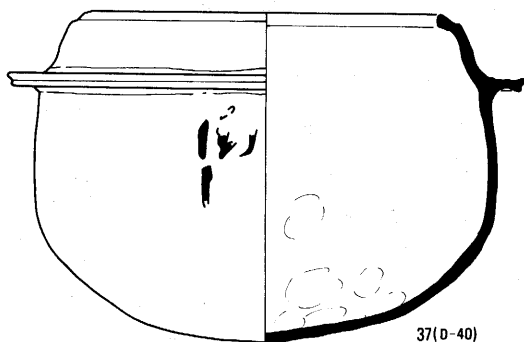
34(C-24)



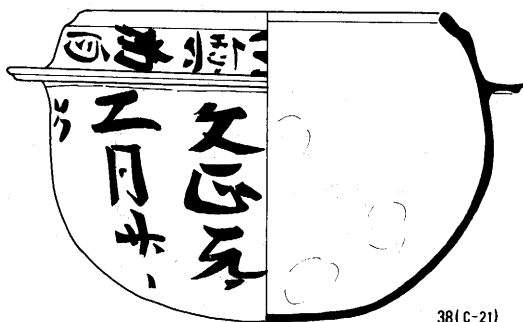
35(F-1)



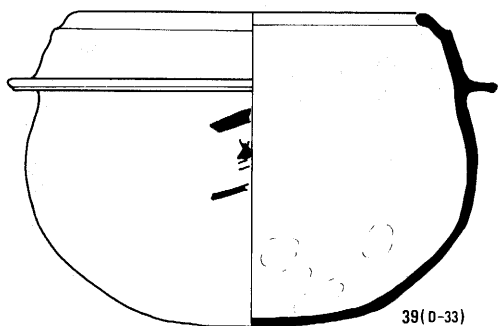
36(B-9)



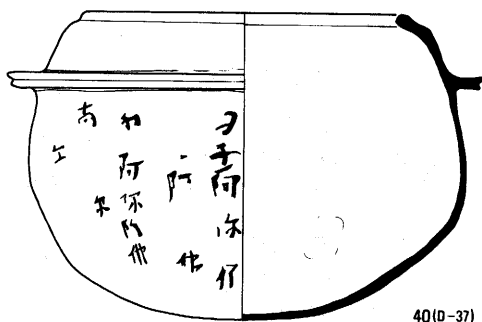
37(D-40)



38(C-21)



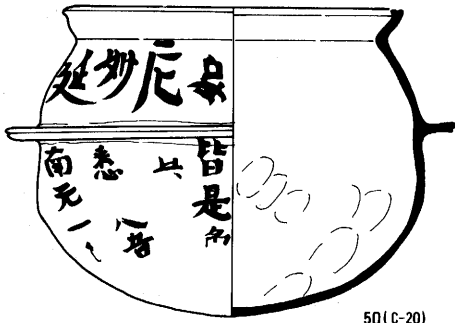
39(D-33)



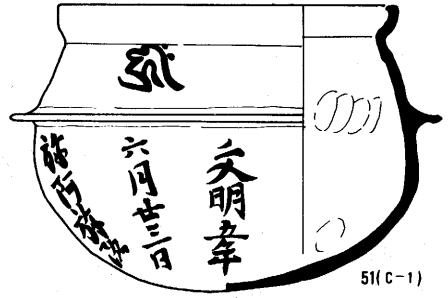
40(D-37)



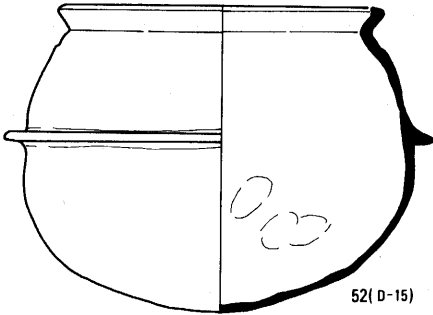
第41图 出土藏骨器(5) (1/4)



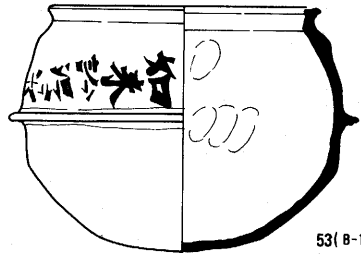
50 (C-20)



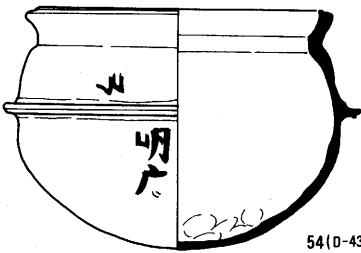
51 (C-1)



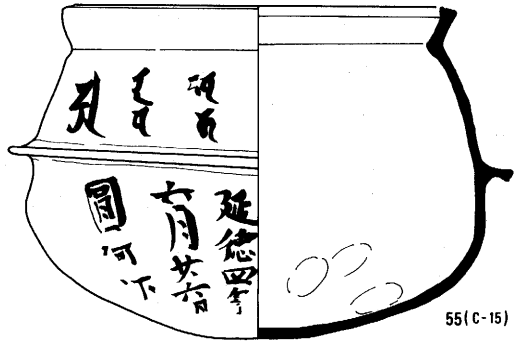
52 (D-15)



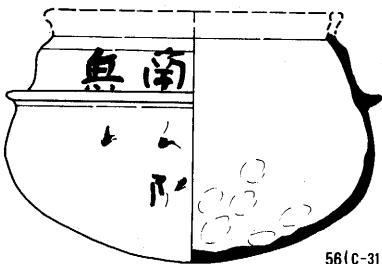
53 (B-14)



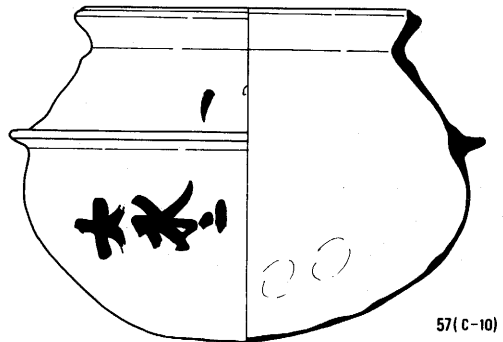
54 (D-43)



55 (C-15)



56 (C-31)

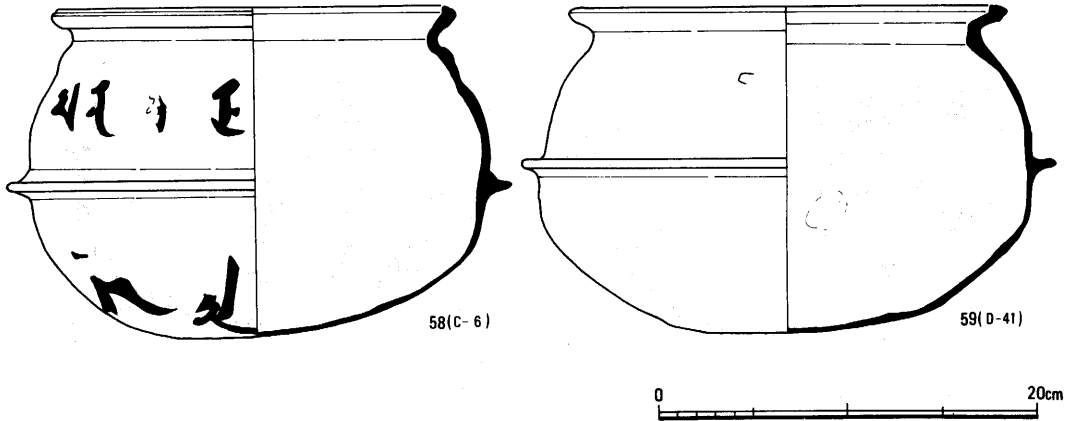


57 (C-10)



第43図 出土蔵骨器(7) (1/4)

IV 城山地区の調査



第44図 出土蔵骨器(8)(1/4)

土師器羽釜C (13~28) 鐔をもつ羽釜形土器で、やや内傾する頸部と、直角に近く短く内折する口縁部をもつ。調整の手法は他の土師器羽釜とほぼ同様である。口縁部のよこなでによって口縁部がやや斜め上に立ち上り、口縁上面に凹線がめぐるもの(23~28)があり、これらは口縁部の成形技法において羽釜Dと密接な関係をもっているものと思われる。14は口縁部に5ヶ所凸帯を貼付している他、19の口縁上端面には沈線が2本施される。また21の底部には2ヶ所穿孔されている。色調は、黄白色~黄褐色を呈し、胎土はきめ細かい。墨書銘があるものの中には紀年銘があるものはないが、すべて15世紀中頃~後半にその時期が求められるものと思われる。

土師器羽釜D (29~49) 鐔をもつ羽釜形土器で、内側、斜上方にのびる長い口縁部をもつ。調整手法は、他の羽釜形土器と同様であるが、口縁部を斜め上につまみ上げるように付加させており、よこなでによってつけられる接合部上面の凹線が特徴的である。色調は淡黄褐色を呈するものが多いが、淡橙褐色を呈するもの(33, 40, 41, 47)がある。31に「長祿四年」(1460年), 32に「寛正三年」(1462年), 33に「寛正七年」(1466年), 38に「文正元年」(1466年)の墨書紀年銘が記されており、羽釜Cと共通する頸部から胴部にかけて直線的に内傾し、深い形態をもつもの(29~40)が15世紀中頃~後半の時期と考えられる。また42には、「永^カ正十三年」(1516年?), 45には「永^カ正九年」(1512年?)の墨書紀年銘があり、頸部が長く、胴部下半に最大径をもつ全体に肩平な形状を呈するもの(41~49)が16世紀初頭の時期と考えられる。なお、32には1ヶ所、41には2ヶ所、それぞれ底部に穿孔されている。また41の墨書は内面にも記されており、火葬骨の納入以前に墨書が記されたことがうかがえる。

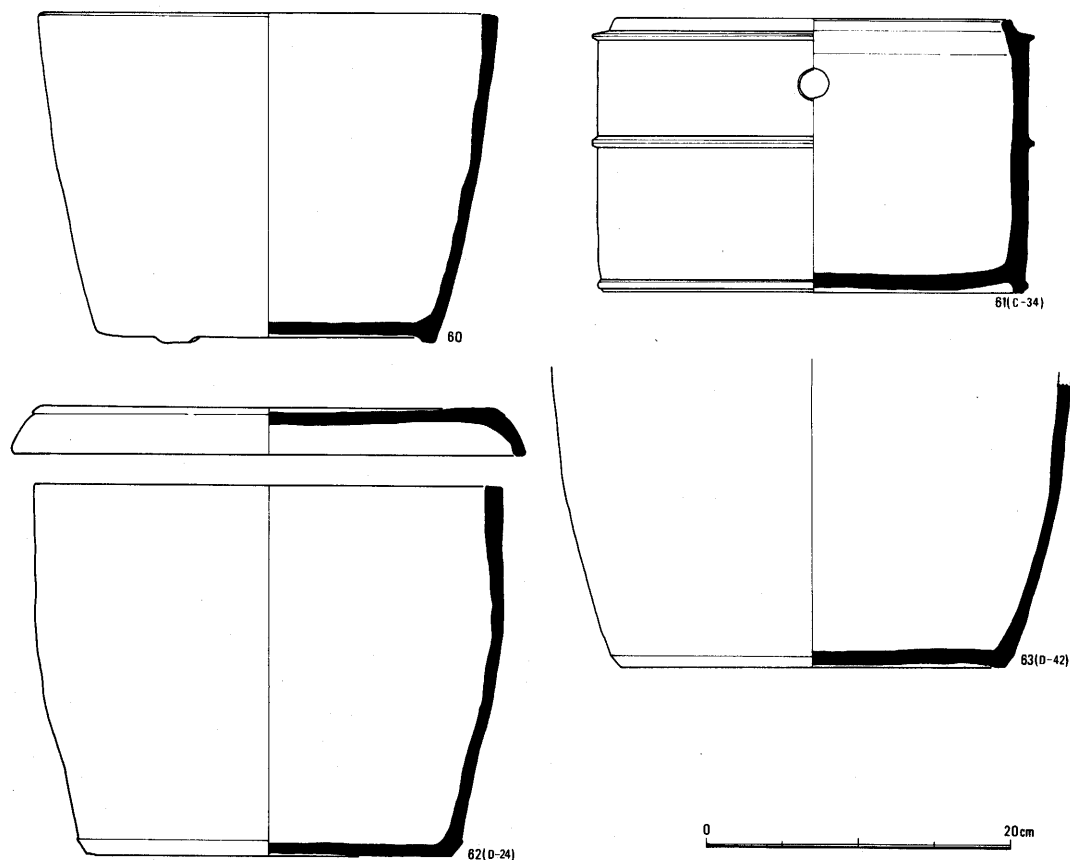
土師器羽釜F(50~59) 鐔をもつ羽釜形土器で「く」字状の外傾する口縁をもつ。口縁端部は平坦におわり、内側に若干の立ち上りをもたせる。調整の手法は他の羽釜形土器と同様である。色調は橙褐色を呈するもの(50~52)と淡黄褐色を呈するもの(53~59)がある。51に「文明五年」(1473年), 54に「明応」, 55に「延徳四年」(1492), 57に「大永^{三カ}〇年」(1523年)の墨書紀年銘があり、15世紀後半から16世紀前半へと時間的推移とともに羽釜Dの変化と同様、頸部が長く

なり（鏝位置の下降）、扁平な形状を呈するものへと変化してゆくことがうかがえる。

瓦質土器甕（60, 62～63） 平らな底部と外傾して立ち上る口縁部からなる。口縁端部は平坦である。城郭遺構の埋甕として使用された瓦質土器甕を小型化したもので、成形、調整手法とも共通する。60は台形の脚部を3ヶ所に取りつけており、62は、蓋をもつ。63はやや器形が大きい、62と同一手法を用いている。類例は元興寺極楽坊墓地、奈良市大慈仙町墓地、多聞山墓地などから出土しており、時期的には、16世紀前半とすることができよう。

瓦質土器火舎（61） 平らな底部と直立する体部からなる。粘土帯の輪積した体部に円板状の粘土を貼りつけ底部をつくる。口縁部、脚部を貼りつけ、口縁部は直立し端部は平坦におわる。外面に2条の突帯をはりつけ、その間に円形透し孔を2方向より穿つ。よこなで仕上げられる。色調は灰白色を呈し、表面は炭素吸着により黒灰色を呈する。きわめて近似するものが京都同志社女子大学図書館建設予定地 SK 329 より出土^{注7)}しており、16世紀にその時期が求められる。

注7) 同志社大学校地学術調査委員会『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』 1978



第45図 出土蔵骨器(9) (1/5)

IV 城山地区の調査

(D) 石造物

城山地区では、調査以前より五輪塔をはじめとする石造物が地表に散在しており、石仏60数点は、丘陵西北部に集められていた。これらの石造物は、城郭遺構であるE区の石組遺構 SX 01、G区の溝 SD 14 などとその石材として転用されていたものもあり、出土数量は、439 点に及ぶ。石造物の種類及びその点数は、表1に示したとおりであるがその約60%は組み合わせ五輪塔の各輪が占め、石仏が約23%を占めており、五輪塔、石仏が墓地の外部施設の中心を占めていたことがうかがえる。またその石質は、ほとんどすべてが花崗岩系のものを使用しており、以下石造物の代表的なものをとりあげ報告するが、特にことわらない限り花崗岩系の石質のものである。

五輪塔

地・水・火・風・空の各輪を組み合わせ一つの塔形を構成する。空輪、風輪は一石で彫成されるため、4つの部分と台座によって構成される。五輪塔の各部分には一方または四方に五大種子を梵刻するものが見られるが、なにも刻さないものが最も多い。検出した墓地遺構では、台座を除き原位置を保っていたものがなく、組み合わせ関係を明らかにしうるものはない。しかしながら推定総高は30～50cm前後に復原される小型のものが中心になるものと思われる。

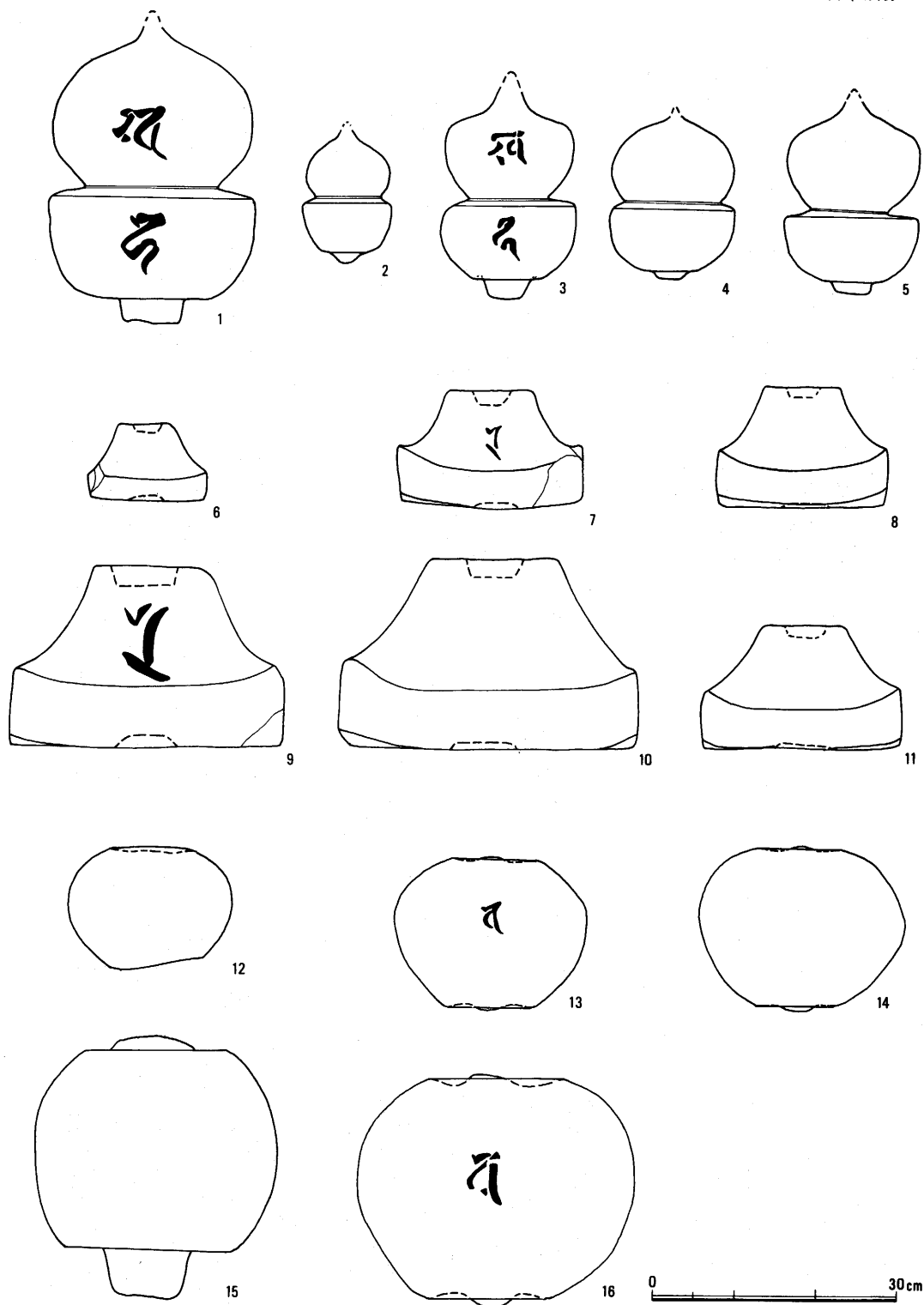
空風輪（第46図，図版39） 宝珠形の空輪と半球形の請花である風輪部からなる。風輪部はその最大幅をもつ上端より、空輪部との境を斜めに彫成する。底面中央には、柄を彫出するが台形に彫出するものと半球形に彫出するものが見られる。1は高さ、幅とも他を上回る1点であり、四方に卍字を刻する。3は一方のみに梵刻を施している。2は最小のものである。総高20～25cm程度のもの（4，5）が数量的に多い。空，風輪の境のくびれが大きなもの（5）と、くびれが小さく全体に丸味をおびるもの（4）がみられる。

火輪（第46図，図版39） 方錐形の笠で、その軒が、端部近くになり上方に反るものと、軒中央より円弧を描き反るものがある。軒口は屋根の傾斜の反りによって厚さを増加させ、垂直に近く切る。上面の柄穴は逆台形に深く掘るが、下面の柄穴は浅い。10が最大のもので、6が最小のものである。9は四方に卍字を刻するが、7は一方にのみ梵刻を施す。高さ11～20cm前後、底辺幅19～30cm前後のもの（7，8，11）が数量的に多い。8は底辺に比べ高さがやや高い。

水輪（第46図，図版39） 球形で最大径が中央部よりやや上方にあり、上下の端面をやや掘りく

種別	五輪塔					一石五輪塔	宝篋印塔				板碑				石仏							
	空風輪	火輪	水輪	地輪	台座		基台	笠	相輪	五輪塔状板碑	尖頭状五輪板碑	圭頭状板碑	板碑台座	石仏 AI	石仏 AII	石仏 AIII	石仏 B	石仏 CI	石仏 CII	石仏 A 屋根	石仏 A 台石	
点類	41	86	34	54	56	4	2	1	1	3	3	7	1	51	12	1	23	10	4	33	12	

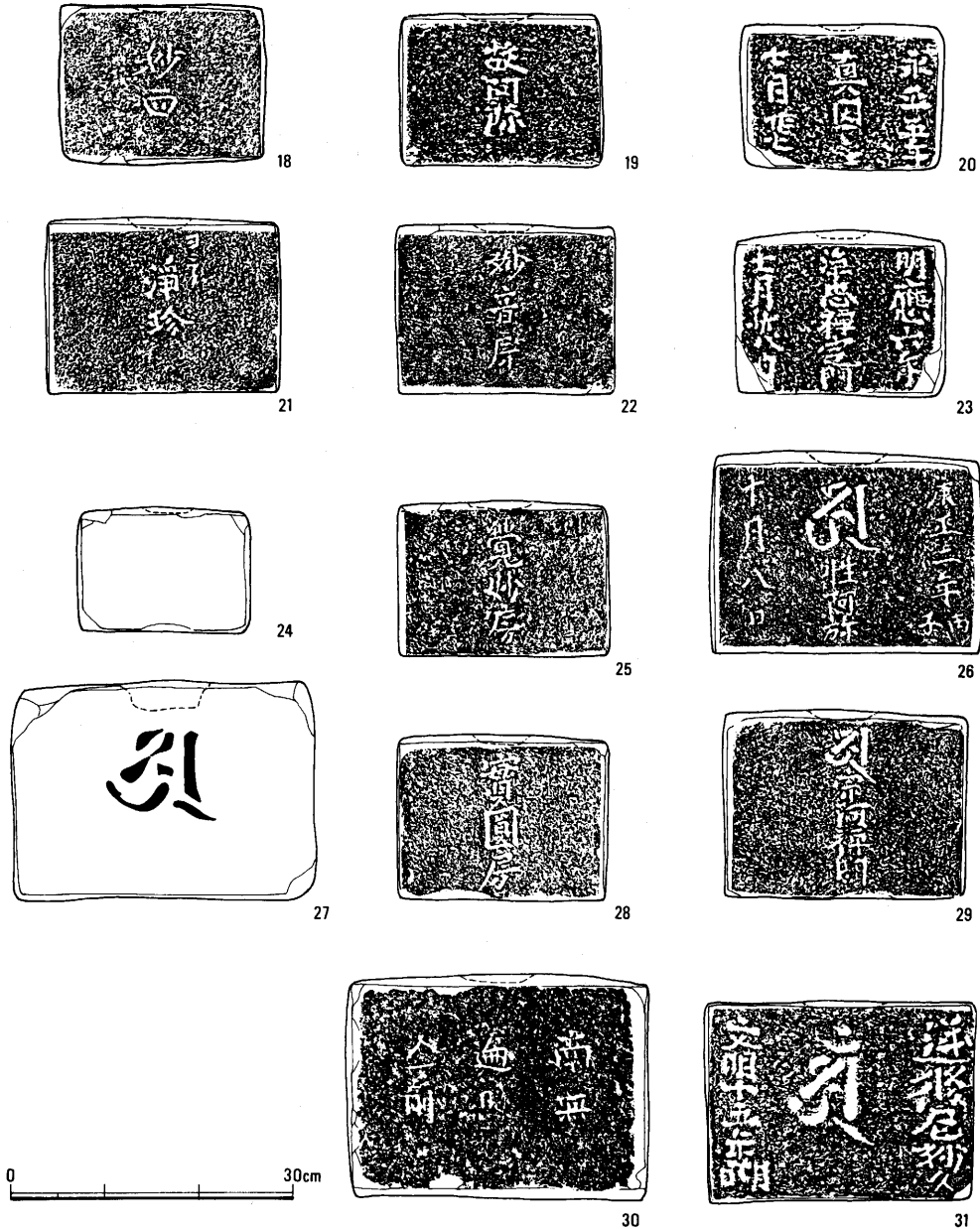
表1 出土石造物計数表



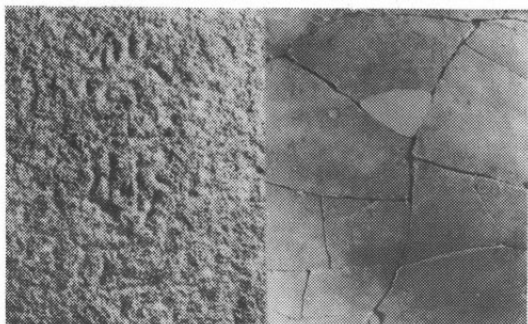
第46圖 出土空風輪，火輪，水輪（1/8）

IV 城山地区の調査

ぼめ柄を彫出する。上端面は下端面よりやや広くつくる。ㄥ字を一方にのみ刻する13, 16がみられる。16が最大のもので12が最小のものである。高さ15~21cm前後, 最大径19~28cm前後のもの(13, 14)が数量的に多い。15は凝灰岩系の石質の石材を用い, 上下端面を大きく切り, 下端面の地輪と組み合う柄も長く大きい。最大径が中央部付近にあり, 形態的には鎌倉期の遺例に近似する。



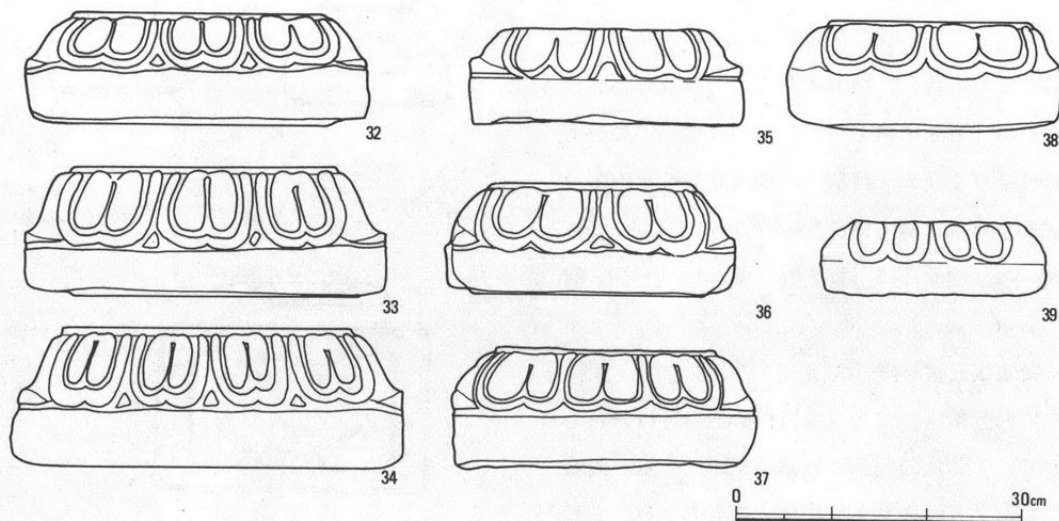
第47図 出土地輪 (1/8)



第48図 「覺妙房」銘の地輪と蔵骨器

名のみ刻するものが多く、18「妙西」、19「故阿旃」、21「淨珍」、22「妙音房」、25「覺妙房」、28「實圓房」、29「ヲ宗阿禪門」があり、25の「覺妙房」、については、D-38の蔵骨器(第39図21)に同一名が墨書されている。年号をともに刻したのものには20「永正五年 真因 七月廿七」、23「明明應六年 淨忠禪定門 七月廿八日」、26「康正二年丙子 ヲ性阿旃 七月八日」がある。31は逆修塔としてつくられたもので「逆修尼妙久 ヲ 文明十五年七月月」と刻されている。30には三行にわけて「南無 遍照 金剛」と刻される。24は地輪の中で最少のものである。図示したものの他に、底辺(約26cm)に比べ高さが低い(約10cm)のもの(図版40-17)が4点ある。これらは凝灰岩系の石材を使用しており、側面の柄穴が深く大きい。

台座(第49図, 図版41) 四方の側面に複弁の蓮弁を刻し、上面に段(高さ1cm内外)を彫出する。上下面にはノミ痕跡を残す。底辺幅43.0cmのものから18.0cmのものまで大小あり、蓮弁が4葉、



第49図 出土五輪塔台座(1/8)

地輪(第47図, 図版40) 方形で4側面および底面は直線的に切り落されているが、上面は中央部に向けて若干盛り上げ、中央部に柄穴を掘る。底面はノミ痕跡が残され、仕上げはされない。幅18~30cm前後、高さ12~23cm前後のものが数量的に多く、13点に銘文、梵刻が施される。27は四方にヲ字を刻するが、底辺に対する高さが他のものに比べ低く、上面の柄穴も深い。在銘をもつものの中では法ヨ□□

IV 城山地区の調査

3葉、2葉のものが大きさに対応している。蓮弁の形態の違いによって台座Aと台座Bに分けられる。台座Aは、子葉と蓮弁の外形を彫成するもので、2葉の蓮弁をもつ台座AⅡ(35, 36, 38)、3葉の蓮弁をもつ台座AⅢ(32, 33, 37)、4葉の蓮弁をもつ台座AⅣ(34)がある。台座AⅡとAⅢには、蓮弁が連続するもの(37, 38)と蓮弁が離れ、その間に間弁を彫成するもの(32, 33, 36)がある。台座AⅣは蓮弁が離れている。また、台座AⅡには、上面の段を彫出ししないもの(35)がある。台座Bは、子葉の外形のみ彫り、蓮弁を表現するもの(39)で上面の段は彫成されない。

一石五輪塔(第50図, 図版40)

五輪をとともに一石に彫成したもので4点出土した。いずれも地輪部を欠損する。40は正面幅より側面の幅がやや狭く、扁平につくられている。

宝篋印塔(第50図, 図版40)

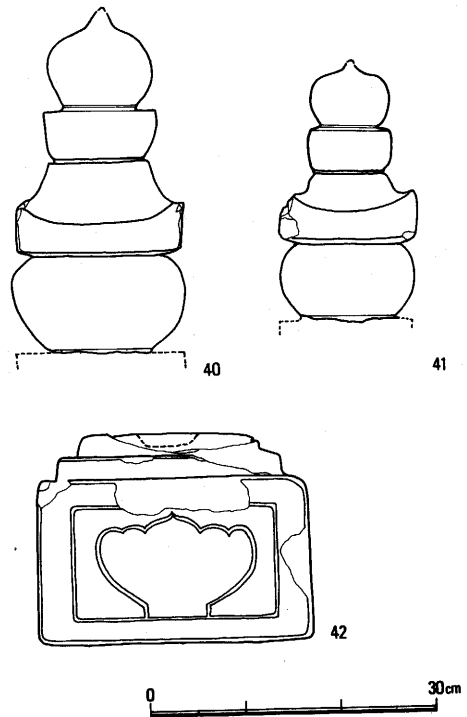
基台(基壇)、塔身、笠、相輪の各部の組み合わせによって成り立つ。基台2点、笠、相輪の破片各1点が出土した。笠の破片は、底辺約26cm、やや外傾する高さ8cmの隅飾(方立て)を彫成する。基台は底辺39.5cmのもの28.0cmのものがあり、図示した後者はその側面の一面に周縁の中に格狭間を彫成する。またいずれもその上部に2段の段を造り出し、その上面に塔身を受ける柄穴をもつ。

五輪塔状板碑(図版42)

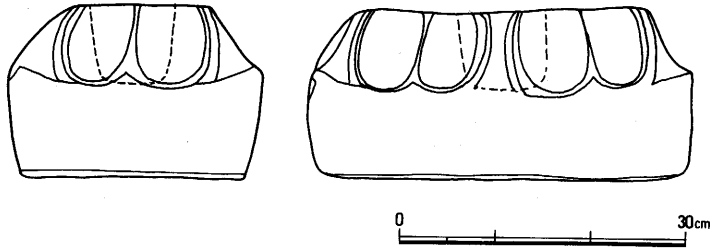
半截五輪塔、板石五輪塔と呼ばれるもので、周囲を五輪塔形に切出した板碑である。3点あり、内1点は空風輪部を欠損する。幅22.0~22.5cm、高さ63~66cmである。前面および側面はていねいに彫整し仕上げるが、裏面はほとんど加工しない。43, 45の基部は、加工せず自然石のままに残し、地中に埋め込む型式をとる。また44は下面に柄をつくる。43は地輪中央を舟形にほりくぼめ、合掌手の地藏立像を半肉彫りする。44は水輪中央に舟一字を刻する。45は火、水、地輪部にそれぞれ「火」「水」字を刻する。

尖頭状五輪板碑(図版42)

舟形五輪塔、背光五輪塔板碑とも呼ばれるもので、尖頭状の板碑に五輪塔を彫成する。周縁をもち、五輪塔形を浮彫りするもの2点、五輪塔形を線刻するもの1点がある。いずれも頭部、基部を欠損している。肩部はつくらず、幅は



第50図 出土一石五輪塔
宝篋印塔基台(1/8)



第51図 出土板碑台座(1/8)

23.5～27.5cmである。
47は「南無阿弥陀佛」の
名号を刻し、空風輪が大
きな比率を占めている。
46は水輪部に𪛗字、地輪
部に「頌賢」と法名が刻
される。

圭頭状板碑 (図版42)

類型板碑(稜角式・剣頭式)と呼ばれるもので7点ある。頭部を三角形に切り、その底辺に1～2条の帯を刻出し、以下を柱状にする。「南無阿弥陀佛」の六字名号を刻し、基部は自然石のまま埋め込む形式である。高さ65～75cm、幅18～24cmの中小型のものが多い。1例には、右下に「妙真房」と法名が刻される。

板碑台座 (第51図, 図版41)

長辺の側面に2葉、短辺の側面に1葉、複弁の蓮弁を彫成する。上面の柄穴は大きく深い。板碑に附帯するものと思われるが、組み合う板碑は出土していない。

石仏 (図版42～44)

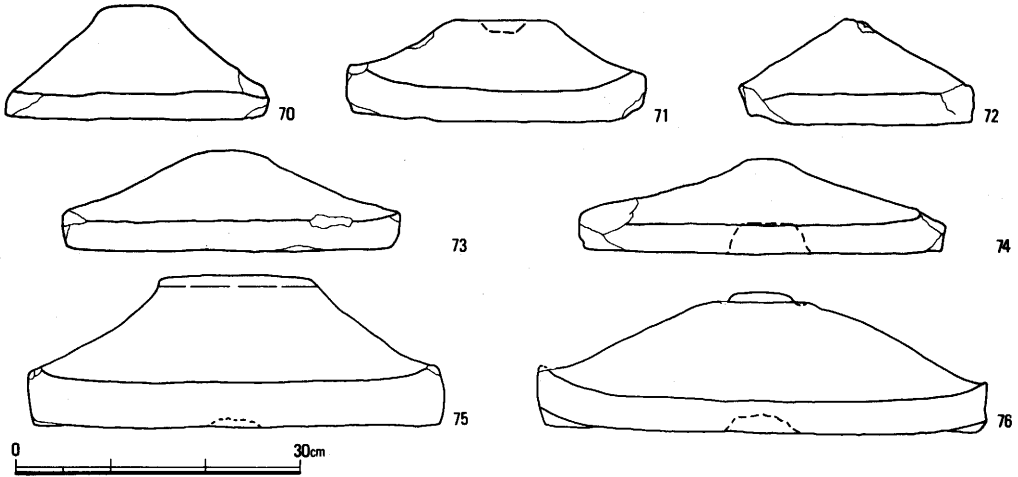
箱形の枠内に仏像を刻出する箱仏と呼ばれる石仏A、尖頭状(舟形)の光背に仏像を半肉彫りする石仏B、板碑内を掘りくぼめ仏像を刻出する石仏Cの三種に区分できる。

石仏A (50～59) 最も個体数が多い。仏像1体を刻出する石仏AⅠ (50～54)が51点、2体を刻出するAⅡ (55～58)が12点、三体刻出する石仏AⅢ (59)が1点ある。枠の上下に柄をもつもの、上面にのみ柄をもつもの、柄をもたないものがあり、大きなものはほとんど屋根や台石が附帯し、仏龕状を呈していたものと思われる。AⅠはほとんどが地藏立像で、阿弥陀立像(53)が1点ある。最大のものが71.5cm×37.5cm、最小のものが24cm×19cmであるが、28～40cm×8～30cm前後のものが多い。地藏像の形像は、左手宝珠、右手錫杖のもの(50)が多く、左手宝珠、右手与願印のもの(51)がこれにつき、合掌手のもの(52)もみられる。52は、仏像の衣および、円形の光背を赤色顔料で彩色している。阿弥陀像は来迎印を結ぶ。石仏AⅡは、地藏立像2体あるいは、地藏立像、阿弥陀立像を組み合せたもので、地藏像の形像には左手宝珠、右手施無畏のものも認められる。また58には「文龜二年香阿禪門、正月十日 法妙禪尼」と銘が刻されている。AⅢは破片であり、磨滅が著しいため不明な部分が多いが三尊形式のものであることがわかる。

石仏B (60～65) ほとんど地藏立像で左手宝珠、右手与願の形像(61)が多い。阿弥陀座像(64, 65)が2点ある。また63は地藏座像で、形態が他のものと異なる。

石仏C (66～69) 一尊形式のもの石仏CⅠと二尊形式の石仏CⅡがある。石仏CⅠは地藏立像が多く、合掌手のもの(66)がほとんどだが阿弥陀立像(67)が1点みられる。66には右下に「道

IV 城山地区の調査



第52図 出土石仏屋根 (1/8)

阿」と法名が刻される。C IIは、地藏立像、阿弥陀立像を組み合せるもの(69)が多く、69には「文亀元年辛酉 西阿於九月廿二日」の銘が刻されている。68は高さ112cm、幅27cmあり、69とともに、圭頭状板碑に含めるべきものとも考えられる。

石仏屋根(第52図、図版41) 寄棟の笠形のもので、石仏Aに附帯するものである。下面に柄穴をもつものもたないものがある。柄穴は中央やや長辺寄りに掘られる。上面に平坦面をつくり、宝珠を受ける柄穴を掘るもの(71、78)もみられる。

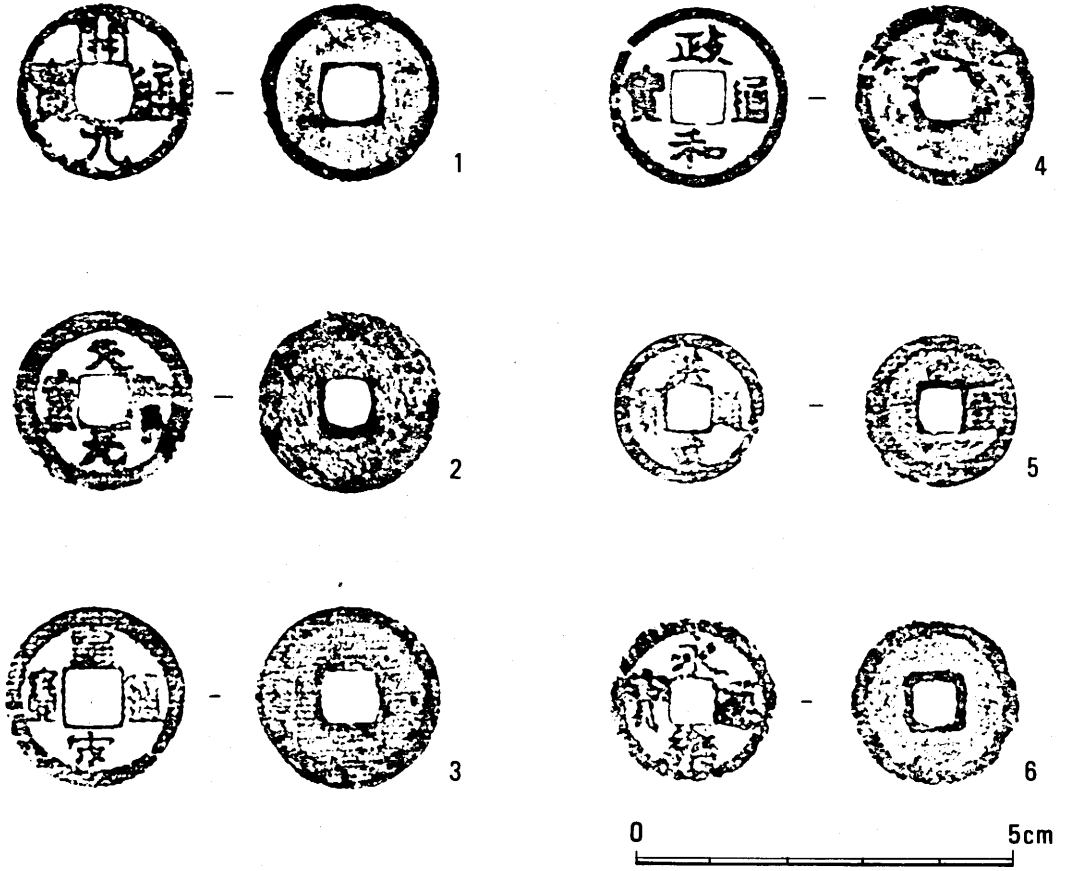
石仏台座(図版41) 石仏Aに附帯する長方形の台石である。上面中央やや長辺よりに柄穴を掘るが、柄穴のないものもある。柄穴には円形のもの(80) 方形のもの(79)がある。

(E) その他の遺物

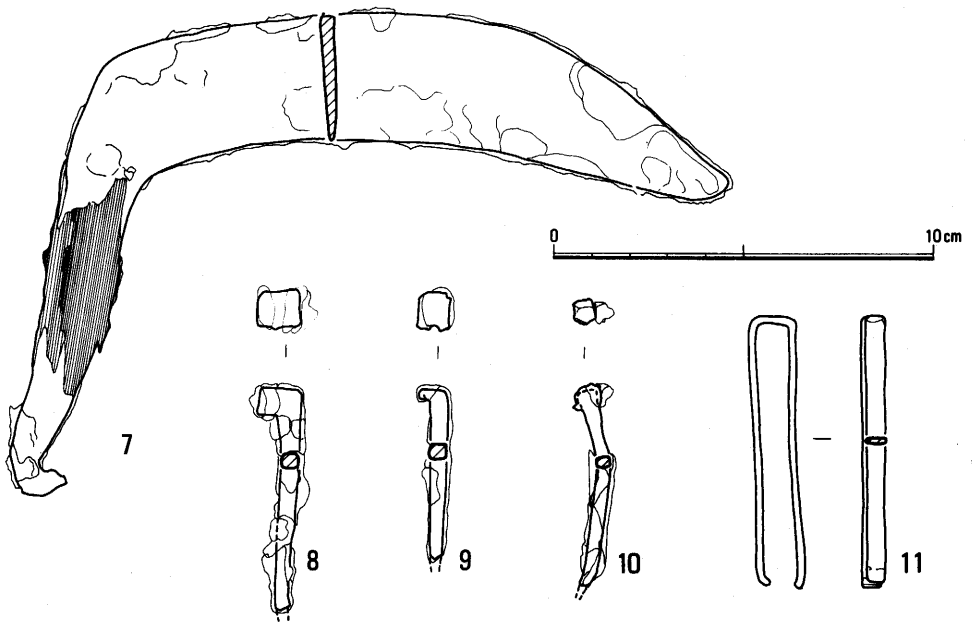
その他の出土遺物として銭貨、鉄鎌、鉄釘、毛抜きなどの金属製品、硯、砥石などの石製品がある。

銭貨(第53図、図版45)

8点出土した。1点がD区 SX 02 の上層より出土したもの(5)である他、他は包含層および表土より出土したもので遺構に伴うものではない。墓地の冥銭あるいは奉養銭である可能性もあるが明らかではない。開元通寶(1)唐・武徳4年(621年)初鑄、天聖元寶(2)北宋・天聖元年(1023年)初鑄、政和通寶(4)北宋・政和元年(1111年)初鑄、洪武通寶(5)明・洪武元年(1368年)初鑄、永樂通寶(6)明・永樂6年(1408年)初鑄が各1点あり、皇宋通寶(3)北宋・宝元2年(1039)初鑄が2点ある。なお図示しなかった破片1点は、嘉祐通寶(北宋・嘉祐年間初鑄)と思われる。

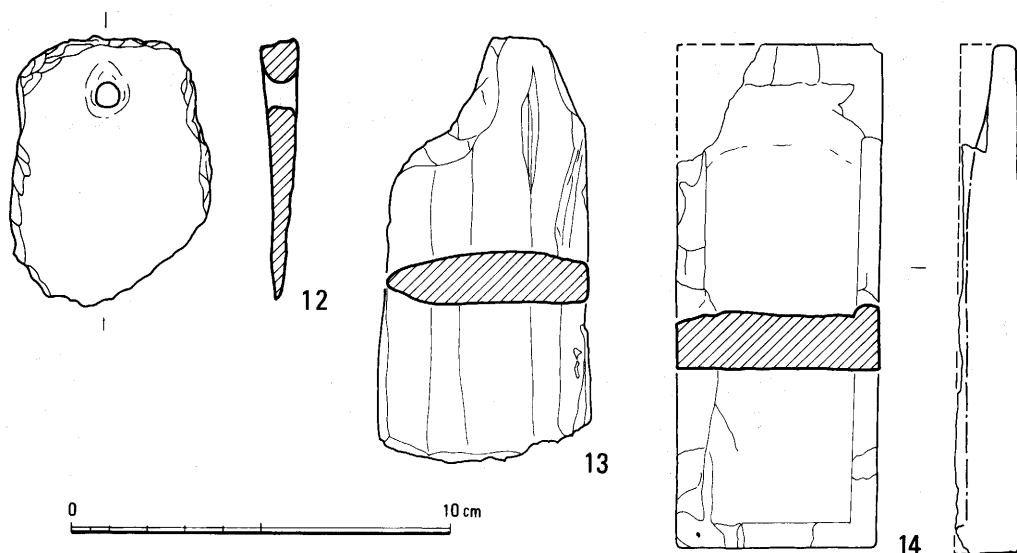


第53圖 出土錢貨拓影 (1/1)



第54圖 出土金屬製品 (1/2)

IV 城山地区の調査



第55図 出土石製品(1/2)

鉄鎌 (第54図-7, 図版45)

D区の中世墓D-24の上部に遺存しており、水輪の上のにせられた状態で出土した。遺骸に刃物を添え、悪霊のとりつきのを防ぐまじないとするのは、民俗例に知ることができるが、同様の意味をもつものか明らかではない。柄部の木質が付着している。

鉄釘 (第54図-8~10, 図版45)

3点あるがいずれも包含層より出土したもので遺構に伴うものではない。

毛抜き (第54図-11, 図版45)

C区中世墓C-16の蔵骨器内に火葬骨とともに納められていたもので銅製である。

金属製品では他に、火縄銃の弾丸と思われる鉛玉(径約1cm)が1点包含層より出土したが、時期については明らかではない。

砥石 (第55図-13, 図版45)

粘板岩を用いており、破損している。表裏の平坦面、側面の一面を使用する。

石硯 (第55図-14, 図版45)

E区包含層より出土した。粘板岩を用いており、外堤のほとんどは欠損する。硯面は磨滅し、一部に墨が付着する。硯面の周囲には刻線が1条めぐる。

不明石製品 (第55図-12, 図版45)

穿孔された板状の石で、周囲が打ち割られており、本来の形状を保つものか明らかではない。

V ま と め

1. 城郭遺構について

今回の調査では、いままでまったく推定の域を出なかった古市城について、その城郭遺構の一部ではあるが具体的に明らかにでき、古市城の実態解明にあたっての貴重な手がかりを得ることができた。

上ノ段・高山地区、城山地区いずれにおいても、調査以前に遺存していた段状の平坦地が、城郭の郭として造成されたものであることが確認され、これらの地区が城郭跡であることが証明されるに至った。また上ノ段・高山地区では、その台地南斜面中腹に設けられた堀（SD 01）を検出し、城山地区では、同様に、丘陵西端に設けられた堀（SD 01）を検出することができた。上ノ段・高山地区では、城郭内の施設について明らかにするまでには至らなかったが、城山地区では、溝、石組施設等の遺構が検出でき、これらの遺構よりの出土遺物は、城郭存続期のまとまった資料となりうる。

城郭の時期については、城山地区では後述するように築城以前に存在していた中世墓地の存続が16世紀前半まで及んでおり、検出した城郭遺構は、15世紀の古市氏全盛期の城郭ではないことが明らかになった。しかしながら天正八年（1580年）の織田信長の命による大和諸城破却以前にその時期は限られることから、16世紀中葉、いまして限定するならば永禄年間（1558～1569年）に築城の時期が求められるのではないだろうか。これは、城山地区が「永禄元年の新城」といった伝承が近世に残されているのと合致することからも肯定されうるものと思われる。古市氏は、永禄年間には、松永久秀の傘下として筒井方と対立していることが知られているがその動向については明らかでない部分が多く、今回の調査の成果は、16世紀の古市氏の動向を探る上で重要な資料となるものと思われる。

城山地区が古市氏の全盛期であった15世紀に墓地であった以上、15世紀以前の古市城は古城地区および上ノ段・高山地区に限られていたことは確実視される。古城地区、上ノ段・高山地区が同時に城郭として利用されていたかどうかは明らかではなく、今回の上ノ段・高山地区の調査で確認した城郭遺構についても、出土遺物からは時期を求め難い。しかしながら15世紀、古市澄胤の時期には盛んに城郭内に建物を新築し、「古市に堀を掘った」ことも知られ、城郭が拡張、整備されたことが想定される。推測が許されるならば、本来古城地区に存在していた古市氏の居館を中心に、この時期上ノ段・高山地区にも城郭として改変の手が加えられ、古市城が形成されたとも考えることができるであろう。

なお城山地区で検出した溝 SD 14・石組施設 SX 01 の石材には、石仏・五輪塔などの墓地の

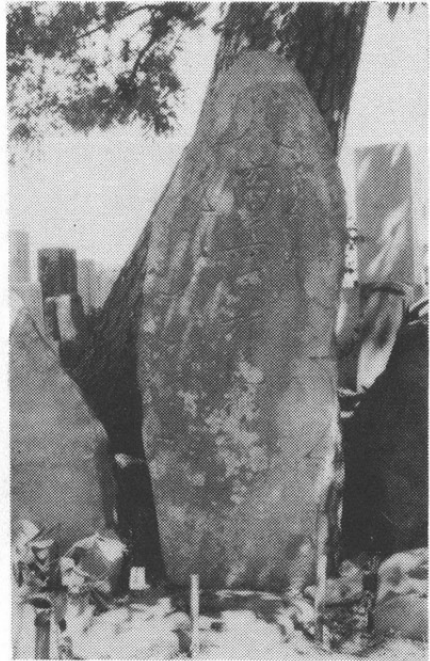
V まとめ

石造物を転用している。このような例は、^{注4)}奈良市多聞城跡・^{注5)}京都市旧二条城跡などに知られる。築城にあたって石材の急要のため手近な石造物を利用したのではあろうが、墓地の破壊、石造物の転用にあたっては、まず、墓地の存在とその祭祀を否定し、その上に築城を行わせる封建領主の権力、敢えて否定せねばならない緊急事態の存在などが想定される。しかしながら、墓地の破壊、石造物の転用の実行にあたっては、やはりその背景に、中世的な宗教性の否定と克服、合理性といった新しい意識が、芽生えていたことも事実であろう。そこからは、中世社会から近世社会への変動といった時代の息吹きを感じとることができるものと思われる。

2. 中世墓地遺構について

城山地区で検出した中世墓地は、墓地の規模、内容において、奈良盆地内での中世墓地の実態究明にあたっては、きわめて良好な資料となるものと思われる。しかし、出土人骨の人類学的検討を含め、墓地についての考察は、今後の多くの検討作業をまたねばならない部分も多い。ここでは現在までに知り得た墓地の時期とその特徴についてまとめておきたい。

まず墓地の造営の時期についてみるならば、幸いにも、蔵骨器として使用された羽釜形土器には、被葬者の没年号と思われる紀年銘が墨書されているものがあり、五輪塔、石仏などの在銘とともに、確実な墓地の存続の時期を求めることができる。墨書銘で最も古いものは、B-7(6)に記された「応永四年」(1397年)であり、墨書銘のない他の羽釜形土器の中にも、大幅に時期のさかのぼる可能性があるものはなく、墓地の造営開始は、14世紀末頃に求めてよいと考えられる。また蔵骨器の墨書銘の年代で最も新しいものはC-10(57)に記された「^三大永□年(1523年)であり、16世紀前半まで墓地が存続していることがわかる。墓地を構成する石造物では中～小型の組合せ五輪塔、小石仏が大部分を占めることから、尖頭状板碑(背光五輪板碑)が墓標として外部施設の主流を占めるようになる16世紀後半以前にその廃絶の時期が求められ、墓地の廃絶は、16世紀中頃、城郭の築造がその直接の要因となった可能性が考えられよう。以上のことから、城山地区の墓地は14世紀末より16世紀中頃までのほぼ150年間およそ3～4世代にわたって形成されたものとみてまずさしつかえないと考えられる。



第56図 古市墓地所在名号碑

一方現在古市町の北側に存在する古市念仏寺墓地には、「天文七年」(1538年)銘の地藏石仏および、「永禄九年」(1566年)の名号碑が存在しておりそれ以前の石造物は

見あたらない。このことから城山の墓地が現存する墓地の前身であったとも考えられ、念仏寺が現在の墓地よりも城山に近く、その西北に接した場所に所在していることについても注意を払わねばならないであろう。

次に検出した墓地の特徴、被葬者の問題についてふれておきたい。まず第一の特徴としてあげられるのは、墓地の構造、内容がきわめて等質的なことである。現在まで奈良県下における中世墓地の発掘調査例としては、榛原町大王山遺跡^{注7)}、谷畑遺跡^{注8)}などが知られている。それらの墓地の様相と今回の城山地区で検出した墓地の様相を比較するならば、外部施設として地表部に石敷施設をもち、羽釜形土器を蔵骨器として使用するものがあるなど類似点もあげられる。しかしながら大王山遺跡においては、瀬戸あるいは常滑、伊賀焼といった陶器を蔵骨器としてもつグループ、火葬ではなく土葬のグループなど、城山地区では見られない墓地における「差」の存在が指摘されている。この「差」については、被葬者の「身分的差異」を表徴するものとしてとらえられている。時期的な問題についても考慮されねばならないが、城山地区においては、火葬骨だけが検出されたもの、蔵骨器をもつものとの間には、墓域を異にするなどといった差異を表徴する様相はみられず、墓地全体が、火葬といった同一の葬制をもち、羽釜形土器を蔵骨器として使用するものが多いなど、ほぼ同様の構造、内容をもった個々の墓によって構成されているといったことが、その性格をうかがう上で、大きな特徴と思われる。

このような特徴をもつ城山地区の墓地について考えるとき、前述した大王山、谷畑遺跡などの山間部を除き、奈良盆地内に限れば、この時期の墓地の実態について、今回の調査例以外に明らかなものが少ない。しかしながら多聞城墓地遺構^{注9)}などは、ほぼ同時期で城山地区と同様の様相を呈していたものと思われ、城山地区に見られる葬制、墓制は、奈良盆地一帯では、ごく普遍的なものであったとも考えることができる。そしてその被葬者については墓の数量的な多さから、限られた支配者層ではなく、より広範な階層が、その被葬者として浮び上がってくるのではないだろうか。しかしこの場合、羽釜形土器といった日常雑器の蔵骨器としての使用は、手近なものの転用といった被葬者の階層を表徴するといった視点からだけではなく、羽釜形土器といった限定された器種のもつ宗教的意義についても考えねばならないだろう。

現在の奈良盆地に見られる墓地の中には、中世にその起源をもち、村落内あるいは村落間の結合^{注10)}によって形成された「惣墓」「郷墓」とよばれるものが数多くある。これらは14世紀以降の生産力の向上、仏教の民間への普及定着、民衆の地縁的結合(惣村)を背景として墓地の形成あるいは墳墓の集団化がなされたものと考えられている。城山地区の墓地についてもこのような室町期の墓地の増加、被葬者層の拡大の中でとらえていかねばならない。

墓地を構成する石造物の造立からは墓地造営者のかなりの経済的負担が考えられ、その経済的上昇を考えねばならないが、石造物の造立は、被葬者への追善作業の所産でもあり、石造物は墓標としての意味も兼ね備えていたものと思われる。つまり、墓が単なる死体処理の場ではなく、供養、

V まとめ

参拝の場として意識されていることにも注目せねばならない。また惣供養的、万霊供養の意味で造立されることが多い六字名号を刻む圭頭状板碑の存在からは、墓地全体の管理意識の存在もうかがえるのではないだろうか。古市の地域においては、先にも触れたように現在の墓地に永禄九年銘の名号碑が存在する。この碑には35名以上の人名が刻され、村落において、「念仏講」あるいは「一結衆」と呼ばれる墓地をめぐる地縁的な結合組織が存在したことが明らかで、こうした信仰集団によって城山地区の墓地が造営、管理されていたといった推察を加えておくこともあながち無駄なことではないだろう。

D区にみられる4～5基ずつのグループの存在については現段階では断定は許されないだろうが、やはり同一の造営主体によって継続的に営まれた可能性が考えられる。おそらくその背景には、血縁で結ばれた集団（家族）が存在したであろうが、その実証については、今後の課題となるものである。

以上多分に推測を重ねて述べてきたが、今回の調査で得られた墓地の資料は、今後の分析方法のあり方によっては、中世後期の「村落構造」あるいは「家族」についての解明に迫る重要な資料になるものと考えられ、文献史学の成果に加え、考古学的方法が、中世社会の解明に有効な手段となりうることを改めて指摘し、まとめとしておきたい。

注1) 北浦定政『古市里の由来の事』文久四年(1864)

注2) 注1および『和州諸將軍伝』

注3) 『大乘院寺社雑事記』

注4) 奈良県教育委員会『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』1958

奈良市教育委員会『多聞廃城跡発掘調査概要報告』1979

注5) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『平安京関係遺跡発掘調査概報』1975

注6) 奈良市『奈良市史工芸編』1978

注7) 榛原町教育委員会『奈良県宇陀郡大王山遺跡』1977

注8) 白石太郎他「榛原町萩原・谷畑中世墓地の調査」『青陵24』

注9) 注4参照

注10) 野崎清孝「奈良盆地における歴史的地域に関する一問題—墓郷集団をめぐる—」

『人文地理25—1』

注11) 木下密運「中世の念仏講衆」『元興寺仏教民俗資料研究所年報1969』

付章 古市氏と古市城

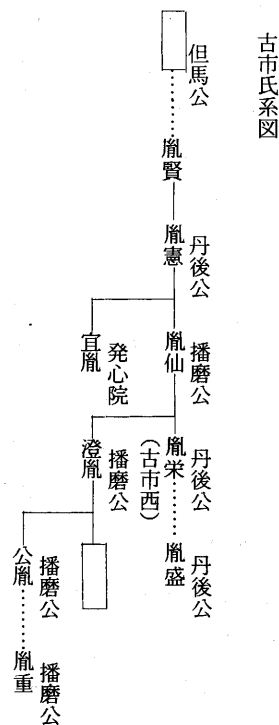
奈良女子大学助教授

村田 修 三

古市氏は衆徒として興福寺の大和国支配の一翼をになった豪族であった。衆徒とはいわゆる僧兵の中、興福寺領庄園の庄官——下司職や給主職（預所職）等に任ぜられて、鎌倉時代から南北朝内乱期を通じて抬頭した大和武士のことである。しかし平安末・鎌倉初期の僧兵は、その後寺内の僧侶集団の性格が変化したので、直接系譜的に衆徒につながるとはいえない。鎌倉後半期から衆徒の身分に編成された人々は、寺僧が預った庄園に土着したもの、逆に土着の名主層が僧侶身分をかりて庄官になったもの、あるいは土着せずに寺住し続けたものなど、さまざまなので、いちがいに武士とはいえないが、主なもの国人・土豪層に属する武士である。

大和武士には、衆徒の外に、春日社の神人の一部に位置づけられる国民の身分のものが居り、興福寺にとっては、衆徒はいわば譜代の家臣、国民は外様の家臣に相当する。興福寺権力を両分した一乗院・大乘院の両門跡が南北朝内乱期に対立したのに伴い、衆徒・国民もそれぞれこの両門跡に分属した。室町時代には彼等は共に門跡の坊人と呼ばれる。衆徒では一乗院方の筒井氏、大乘院方の古市氏が傑出し、官符衆徒（衆徒の中から選ばれて寺中に勤任し検断を司る）の棟梁の座を競い合った。国民では一乗院方の越智・箸尾両氏、大乘院方の十市氏が有力であった。以上の5氏が大和武士の中から大名化する可能性を持つに至った豪族・有力国人であった。特に北和の筒井・南和の越智両氏は、永享1年（1429）以後の大和永享の乱で両陣営の首領格となって争ったので、戦国期までこの両氏を中心とする二大陣営の対立という配置が続いた。古市氏は在地支配の実力という点では他の4氏に及ばなかったが、全盛期の澄胤の代には官符衆徒の棟梁の地位を占めた。

古市氏の本拠であった古市の地は、福島市が本来の地名で、鎌倉後期にその市を現在の紀寺附近に移して南市ができた後に、その跡が古市とよばれるようになったといわれるが、大乘院の所領の名としては福島市の名が長く用いられた。15世紀の後半の「御兵士引付」によれば、古市氏の給分は「福島市下司以下悉皆、付上生講作主、高田庄之内切田十八石云々、河口之内本庄郷藤沢名半分、坪江内狭（牧）村請口ノ内六十貫」となっている。同じく「福島市下司以下惣知行」と記される。古市氏が「悉皆」「惣知行」する福島市が今日の古市の地をさすことは疑いない。ところ



第57図 古市氏系図

付章 古市氏と古市城

が「三箇院家抄」には大乘院領として福島市と別に「古市」の名もみられ、「藤原ノ郷ニアリ、建長御記之五反ハ八嶋云々」とある。この「古市」の土地は6反で、文明6年(1474)当時、年貢上納責任者の百姓として「古市殿左衛門太郎」・「藤原殿」・「長井九郎右衛門」の3人が2反宛名請けしている。藤原郷は元来古市の地も含む郷であったが、古市が古市郷とよばれるようになると、これとは区別されて、地蔵院川を隔てて南をさすようになる。八嶋郷はさらにその南にある。建長年間(1249~55)に古市の名でよばれる5反の所領が八嶋にあったことが正しいとすれば、古市の地名は南市の創設よりも遡ることになる。後考にまちたい。

古市氏がこの地に勢力を築いて古市の地名を名字に名乗るようになるのがいつか不明だが、正中2年(1325)に古市但馬公の名が知られる(「春日社家祐臣記」)。この年、大乘院家内部で前門跡尊覚と当門跡聖信が争って尊覚は古市氏の館を本拠にした。翌々年、尊覚は聖信に打勝って門跡に復帰した(永島福太郎氏『春日社家日記』の紹介による)。古市氏が当時すでに大乘院家内部に大きな力を持っていたことがわかる。

古市氏の系譜がはっきりするのは、至徳3年(1386)、衆徒の評定に参画した胤賢からである(『春日神社文書』1339)。胤賢は明德5年(1394)、幕府が東山内の小夫に発向した時、福住宗久・竜田英舜と共に参陣した(「小夫宗清発向奉行下向引付」)。胤賢の跡は胤憲がついだ(「大乘院日記目録」附載系図)。

胤憲の子胤仙は前的大乗院門跡で興福寺別当であった安位寺経覚を助けて筒井順永・成身院光宣らと争った。嘉吉3年(1443)、胤仙は豊田頼英と組んで筒井方を追い、雑務検断職(官符衆徒)の1人に任ぜられた。経覚と胤仙は文安1年(1444)、現在の奈良ホテルの地に鬼園山城を築き、筒井方の反攻に備えたが、翌年筒井方に奪われた。以後しばらく経覚は古市氏を頼って古市の迎福寺に居住した。岩井川をはさんで南部鬼園山城の筒井勢、古市城の古市勢が合戦することしばしばであった(以上『経覚私要鈔』)。経覚は興福寺別当に復して後も古市に居住したので、迎福寺は古市御所とよばれた(『大乘院寺社雑事記』寛正2年9月2日条以下)。鎌倉末に古市但馬公の館が大乘院門跡の居所となった時以来の伝統が、一層発展した形で再現されたのである。

以上のように、胤仙時代には館が古市城とよばれる城郭に発達していた。宝徳1年(1449)7月、城の東の岸の松木が折れた音が迎福寺の経覚の耳まで届いたという(『経覚私要鈔』)。東に岸を伴うような地形といえば、現在の東市小学校地(字上ノ段)である可能性が高い。その北の台地(字古城)にも古市城跡の伝承があるが、そこは東に岸はない。いずれにせよその西麓の現在の集落とほぼ同じ位置に、当時城下集落が存在していたことも次のことからわかる。胤仙の子の胤栄の代のことになるが、長禄2年(1458)7月、古市で催された風流は、まず古市城から古市春藤(胤栄)自ら参加した行列が練り出し、続いて延命寺・北口・市庭(場)・南口の順で練った(『大乘院寺社雑事記』)。江戸時代の村絵図によると、延命寺は環濠で囲まれた集落の西口にあたる。市場跡推定地の字市立垣内は南口の西に接している。村の口の近くに風流を仕立てる単位となる地縁

組織が存在したこと、その全体が環濠集落ないしその原形となる防禦的な集落を形成していたことがわかる。

享禄3年(1454)から河内の畠山氏の内訌がおこり、細川氏に支援された政長方と国人の多くを組織した義就方との対立が激化した。これが応仁の乱の一因になるのであるが、大和の国人達もこの争乱にまきこまれた。筒井・十市氏らは政長方、越智・古市氏らは義就方に属した。応仁の乱にもこの形勢がそのまま持ちこまれ、古市胤栄は越智氏と共に西軍についた。大和国内の合戦は文明7年(1475)に本格化する。この年2月に越智氏が越智郷の人夫を毎日300人動員して古市の堀を掘った。大規模な合戦は7年の後に9・13年にも演じられ、いずれも越智・古市方の勝利となった。文明9年には越智氏が今市城、文明13年には越智・古市両氏が協力して山内に新城を築いた。両城は従来の自然発生的な国人の在地支配の城ではなく、大和一国の制圧をねらう戦略的な陣城である。文明7年の古市の堀築造も一連の戦略の中で評価することができよう。古市城が単に古市氏だけの城郭ではなく、大和の西軍全体にとって高い戦略的な位置をしめて大改修の加えられたことを示している。文明7年の堀の記事は集落の環濠をさすのか、台地上の城の部分の堀をさすのか、いずれか断定しがたい。先の風流の諸口の記事からすでに環濠の形成が推定されるが、地形及び政治的な背景から推して、城を拡張・強化するためには、環濠集落を外郭としてかためる必要があるので、集落の環濠の拡張工事であっても、これは同時に築城を意味すると考えることができる。

文明7年、古市の堀が掘られた直後に、古市胤栄は家督を弟の澄胤に譲った。以後胤栄は古市西家として、澄胤を助けて古市氏の強盛に尽した。澄胤については永島福太郎氏の「古市澄胤」(『戦乱と人物』)等にくわしい。古市氏歴代が築いてきた大乗院門跡との緊密な関係に加え、義就方の優勢を利用して、政界に羽振りをかした。文明9年には官符衆徒棟梁の座についた。所領支配と家臣団組織の面では越智氏にはるかに及ばなかったが、古市郷周辺の鹿野園・藤原・山村諸氏を与力とし、東山内の北部から南山城の一部(木津・笠置)にまで勢力を及ぼした。

応仁の乱から戦国期にかけて、大和の有力国人は国中の平野部の本貫地周辺を本領とし、山間部に後背地の勢力圏を築き、両地域を結びつけて勢力を保つ戦略をとった。筒井氏は筒井郷周辺と東山内の福住周辺とを結びつけた。十市氏は十市郷から布留郷南部までを新たな「十市郷」とよばれる勢力圏とし、これと東山内の小山戸・小夫一帯を結びつけた。越智氏は越智郷中心に高市郡全域を新たな「越智郷」とし、これと吉野地方とを結びつけた。古市氏も彼らとよく似た平野部・山間部に両枝かけた勢力圏を築いたことが注目される。

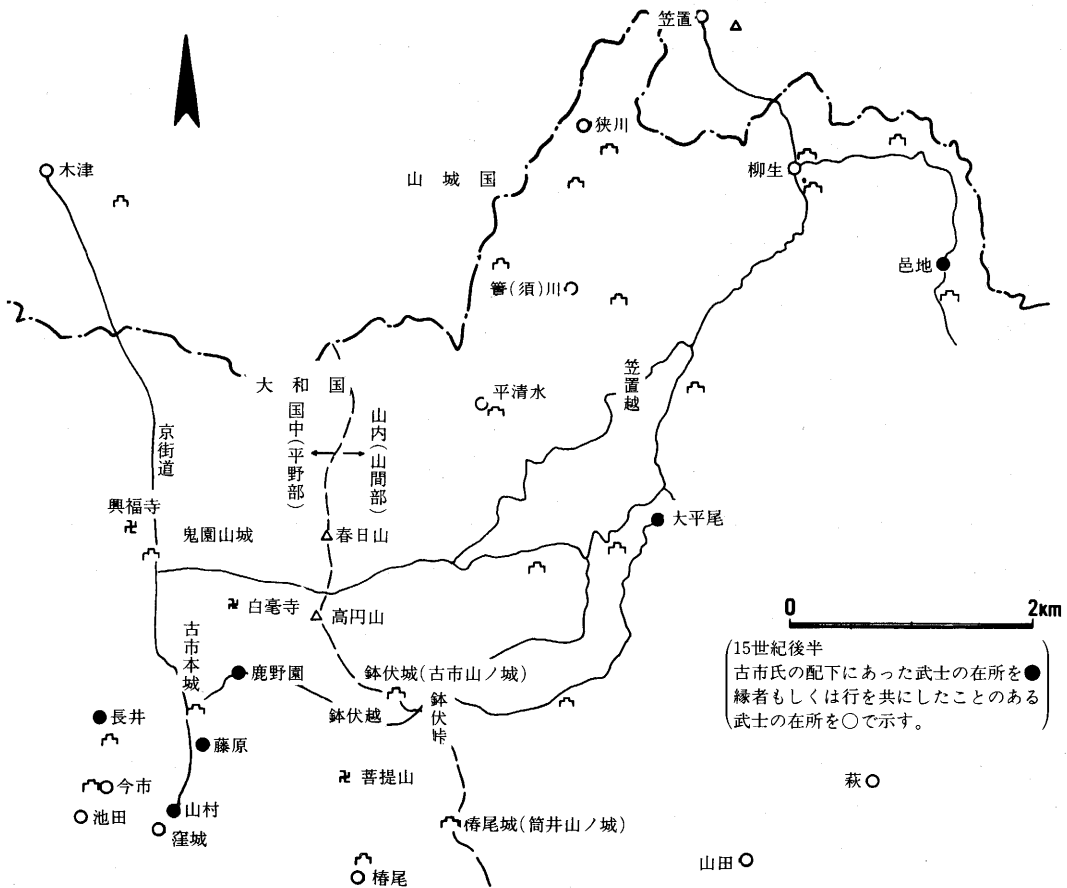
古市澄胤は実力面での弱さを政治力と財力で補った。古市氏の勢力圏は大和の東北辺にあり、南都と京都の間の交通路を押えるのに有利であったので、木津の馬借等にも支配をのぼし、他の有力国人には見られない特異な経済力を築いた。胤仙時代以来日明貿易で活躍した渡来人の楠葉西忍との親交が示すように、商業支配面での進出は従来からの特徴であったが、澄胤の代になってから、馬借一揆の手引、徳政令の利用、奈良の商人の被官化など交易活動との関係は一層強まった。馬屋

付章 古市氏と古市城

を城内に5間、城の西に2間、母の旧宅に3間新造したこと（『大乘院寺社雑事記』文明17・閏3・27）は、軍用馬としてだけではなく、自ら馬借の頭目として馬を動かしていたことを推測させる。また、応仁の乱の京都をさけて南都に下った公家・芸能人も古市を訪れ、澄胤の主催する連歌・茶湯等に参加したので、古市城は文化的サロンの様相も呈した。

澄胤の絶頂期は明応2年（1493）を中心とする数年間である。この年細川政元は將軍を廃し、長年支持してきた政長を殺して義就と結んだ。この政変の背景には8年間続いていた山城国一揆をめぐる諸将間のかげひきがからんでおり、越智家栄と古市澄胤が暗躍した。政変の結果澄胤は晴れて京都の政権の一翼をになうことになり、山城国一揆を鎮圧して南山城の綴喜・相楽2郡を与えられた。

ところが河内では、一時没落していた政長の子尚順が勢いを盛り返し、明応6年に義就の子義豊（基家）を破ったので、大和でも筒井方が復活し、越智・古市方を破った。この年10月6日、澄胤は古市本城に自ら火を放って笠置に逃げた。翌7日から5日間にわたって古市城は「竹木を払う」、



第58図 古市氏の勢力関係地図

つまり破却を受け（『大乘院寺社雑事記』）「広野」となった（『大乘院日記目録』）。古市城最初の落城である。これ以後筒井氏が大和の政治史の主導権を握り、古市氏は専ら京都から南下する国外勢力に寄生して命脈を保つことになる。

明応8年（1499）10月、長年の好敵手だった筒井・越智両雄の和睦がなり、大和国衆の30余人が両畠山氏に合力しない旨の盟約を結んだ。古市氏はこれから除かれた。永島氏はこれを「自決主義」の現れ、あるいは山城国一揆と同例と評価される（「古市澄胤」、『奈良県の歴史』）。一国内の国人層が国外勢力に従属せず、独自に離合集散し覇を競い合う中から地域的な統一権力が生まれるというのが戦国大名形成の主要な道筋であるが、大和でもその気運が芽生えたといえる。これ以後史料上に国人を「国衆」と記す用例が目立つようになる。京都で細川政之政権が生まれ幕府の公的な権威が失墜したということが、幕府の膝元の大和での独自の動きを許したのである。古市氏だけがこの新しい気運に背を向けたのである。

大和国衆の自立とはいっても、筒井氏らは畠山尚順と気脈を通じていたので、細川政元は同年12月、部将の赤沢朝経（沢蔵軒宗益）を派遣して、古市澄胤の手引きで筒井以下の国衆を破った。澄胤は赤沢ら京軍の後だてで再び南都を支配し、翌9年3月、古市城再建工事を開始した。しかし永正1年（1504）9月、京都の政争で赤沢朝経が失脚したあおりで、澄胤は筒井方に敗れ城を焼いて没落した。翌2年11月、国衆が再盟約したのが（以下『多聞院日記』による）3年7月、京都で赤沢が復活し、又もや古市澄胤の先導で大和に乱入、抵抗する国衆は一国一揆を催して多武峯等に立籠ったが惨敗した。4年には細川政元が暗殺され赤沢朝経が敗死した。古市丹後公胤盛は朝経と共に丹後で戦死し、澄胤は京都に逃れた。しかし今度も国衆は同じ苦汁をなめる。政元の跡をついだ細川澄元が父政元と同様に赤沢朝経の子長経を乱入させたので、一国一揆の国衆は駆逐された。政局がめまぐるしく変る中で、古市澄胤の復活は三度目を迎えたが、翌5年に細川高国が入京して澄元を追ったので、赤沢軍は総崩れとなり、さすがの澄胤も7月28日、大和の某所で生捕られて殺された（「春日社司祐弥記」）。

国衆の統一の障害であった古市澄胤が死んでも、他の国衆も再び盟約する機会を得ぬまま、細川高国・畠山尚順と結ぶ筒井順興、他方細川澄元・畠山義英（基家の子）と結ぶ越智家令を夫々中心とする両派に分れて対立した。澄胤の跡をついだ古市公胤はかつてのように越智方に属した。永正8年（1511）7月、公胤は彼に与力する吐山・多田ら山内衆と共に鹿野園の上の六寸に築城して古市城の回復を伺ったが、8月に細川高国が澄元方を破った舟岡山の戦いの余波で、筒井・十市・箸尾らの軍勢に敗れて春日山に逃れた（「祐園記」）。その後数年間の史料を欠くが、古市城の再建には成功したらしい。

永正17年（1520）3月当時、澄元方の勝利に伴い、軍事的には越智氏が、政治的には古市氏が南都を支配するという往年の配置がみられる。5月に高国方が京都を制圧したので筒井勢が復活、古市公胤は「山ノ城」に退いた。（「祐維記」）。古市の「山ノ城」とは、鹿野園から東山内へ登る鉢

付章 古市氏と古市城

伏越えの近く（鉢伏集落の裏山）に遺構の残る城のことと思われるので、以後鉢伏城と仮称することとする。（先の六寸の城と称するのは、字六寸が鹿野園に向ってかなり降った場所なので、「山ノ城」とは別であろう。字六寸には明確な遺構は検出できない。）鉢伏については、永正3年7月に古市丹後が「鉢伏方ヨリ帰宅」（『大乘院寺社雜事記』）という記事があるので、明応6年の古市本城落城以後、ここに陣をしく戦術をとるようになっていたと思われるが、本格的な城が構えられたことが知られるのは永正17年が最初である。

鉢伏城は5月9日に筒井方に攻められて落ち、破却された。公胤は東山内の大平尾に退いた。6月に古市勢が盛り返して白毫寺に入り、堂舎を破却してその材で元の鉢伏城を再建した。10月に両畠山の和睦を背景に筒井・越智・古市3者の和睦が成ったが、今回は十市氏が排除された。この時点まで公胤は大平尾と鉢伏城の間を往復し、和平交渉の使者も鉢伏城を訪れている。

大永1年（1521）11月、公胤が義英と通じたので、古市・鹿野園・鉢伏・藤原各地が筒井勢によって焼かれた。翌2年には山内の根拠地の大平尾・邑地両郷も蹂躪され、古市氏は没落した（以上「祐維記」）。まもなく公胤は復活したが、筒井氏の支配に服することになった。大永年間には珍らしく平和の維持された時期である。十市氏も復活し、筒井・越智・箸尾・十市4大豪族が連合支配する形を呈した（後世「大和四家」という表現が用いられるのはこの時の体制をさす）。しかしこの体制は、実は河内の畠山植長（尚順子）に支えられたもので、越智氏が植長の圧力に抗しきれなかったことによるらしい。そのため国内で主導権を握る筒井氏の戦国大名化への動きも停滞し、官符衆徒の棟梁として興福寺権力を支えた。この体制の下で古市氏は2流の国人の地位に甘んじざるをえなかったのである。

大永7年（1527）、細川晴元が高国を破り、畿内は再び泥沼のような争乱に陥った。翌享禄1年、晴元の配下から抬頭した柳本賢治が大和に乱入、大和は再び国外勢力の直接支配を受けることになる。この時、古市氏は越智氏と共に柳本勢と結んだ。天文5年（1536）、今度は河内から木沢長政が入国し、信貴山城に拠った。長政は筒井順昭と結んで十市遠忠と対立したが、天文11年の長政の敗死後、一時遠忠・順昭の両雄が並び立った。翌12年4月、古市氏は順昭に叛いて古市本城を自焼没落したが（『多聞院日記』）。柳生氏と共に出沒し、奈良中に屋錢をかけるなどしている（「学侶引付」）。

筒井順昭は天文14年十市遠忠死後めざましい活躍ぶりで、15年には越智氏を破って従え、翌年には箸尾氏を降した。天文20年順昭は病死したが、幼主順慶を擁立する筒井氏の大和制覇は進む。21年7月、古市牢人衆が籠る邑地郷を焼払った（「享禄天文之記」）。以上の経過からみて、古市氏は天文12年以来山内に封じこめられ、古市城を回復することはできなかったようである。

この間に京都では細川氏の家臣の三好氏が主家をしのいで畿内の制圧をはかり、その下から松永久秀が抬頭した。永禄2年（1559）、松永久秀は大和に進出、信貴山城に拠り、翌3年には筒井順慶を追って大和の大半を支配、4年には多聞城を築いて南都を掌中に収めた。ここに興福寺の

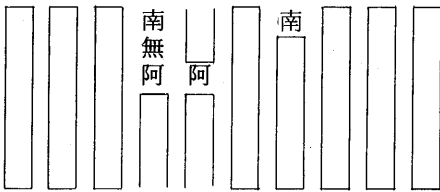
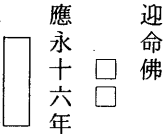
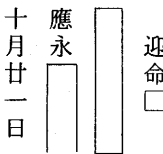

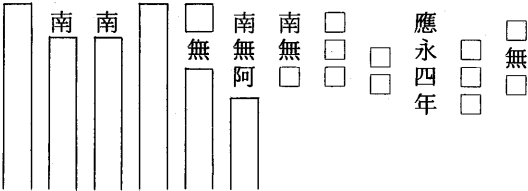
支配権は事実上崩壊した。筒井氏が諸豪族を降してもなおできなかった興福寺権力の打倒の第一歩が国外勢力によって切開かれた。しかし松永氏は抵抗する国衆との関係上旧体制を一掃することはできず、旧勢力と妥協した。天文12年以来筒井氏に圧迫されていた古市氏はここで息をふき返し、松永配下の武将として活躍したらしい。筒井方が盛り返した永禄8・9年には古市郷を焼打ちされた。10年には一時的に筒井方に降ったが、松永方に復帰した時に又もや古市郷を焼かれた。松永氏の衰退の端緒となった元龜2年(1571)の辰市合戦には、古市兄弟が負傷した(以上『多聞院日記』)天正5年(1577)の松永氏滅亡後、古市一族は牢人し大平尾と邑地に隠棲したと伝える(古市念仏寺蔵・北浦定政筆録「古市の里由来の事」)。天正12年(1584)に死んだ筒井順慶の葬式目録に「古市播磨守」の名が見えるが、大和武士としての古市氏の活躍は松永滅亡と共に終わったとみていいだろう。

古市氏歴代の本城として焼亡・再建がくり返された古市本城は、現在の東市小学校敷地を中心とする台地上にあったことは疑いないが、今回発掘調査された字城山の城跡は本城といろいろ関係があるのだろうか。「古市の里由来の事」に記す伝承によると、字城山は永禄1年(1558)に古市播磨守・同周防守が築いたということである。旧本城は弘治年間(1555~57)に筒井氏によって攻め落され、古市両名は大平尾・邑地両村に蟄居したが、松永久秀の後見により鉢布施(伏)の上米山に要害を、鹿野園の上六寸に番所を築いた。新城になってから旧本城(字古城の地とする)時代の村を移し、天正7年(1579)に古市氏が没落、大和大納言(豊臣秀長)によって新城が破却されたので、村も元の地(現在地)に立帰ったという。豊臣秀長の城郭破却は8年の織田信長の破城令との混同、米山や六寸の築城は先に見た永正年間公胤の事績との混同であろうから、信憑性に欠ける面があるが、字古城も古市城域の一部とみることは可能だし、字城山を松永時代の新城とする点は今回の発掘の結果とも矛盾しないようである。落ち目の古市氏にとって台地上の広大な城は守るに難く、字城山の方が要害性に富んでいることもこの伝承に一定の説得力をもたせている。

別 表

1. 出土藏骨器墨書銘集成
2. 出土石造物法量表(1)
3. 出土石造物法量表(2)
4. 出土石造物法量表(3)

別表 1. 出土蔵骨器墨書銘集成

番号	墨書位置	内 容
1 (B-5)	胴部	
3 (B-4)	胴部	
4 (B-3)	胴部	
5 (B-2)	胴部	
6 (B-7)	胴部	

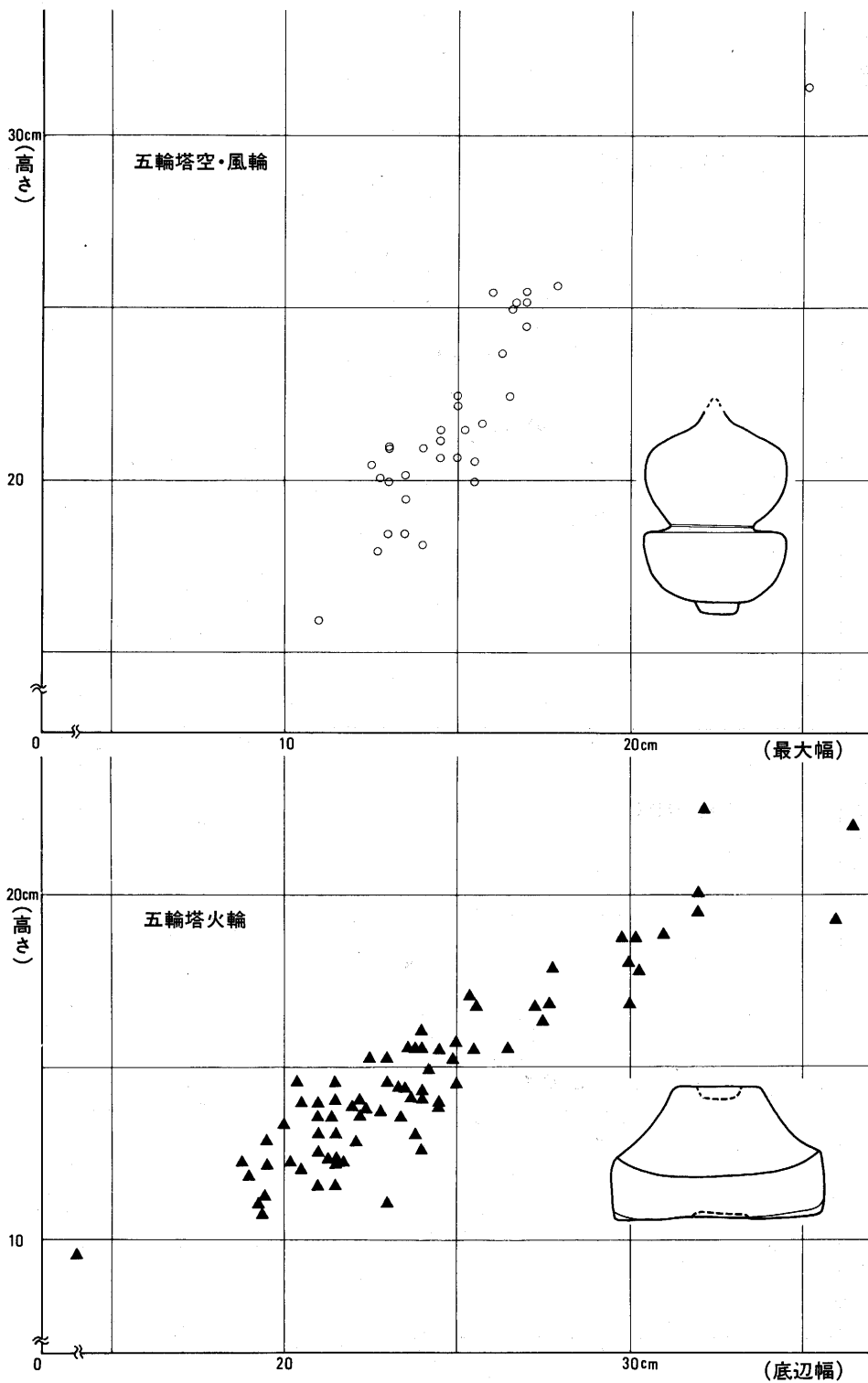
番号	墨書位置	内	容
14 (B-6)	胴部		
15 (D-12)	胴部	ア □ 飛 飛	
16 (D-14)	胴部		
21 (D-38)	頸部	□□□	サ井
	胴部		
22 (C-5)	胴部		
23 (D-23)	頸部	□	南 ^カ
	胴部	□	南 ^カ
25 (D-17)	胴部	ナムアミタフツ 十二月 ハウ タウシ	

別表 1

番号	墨書位置	内	容
29 (C-25)	頸部	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
	胴部	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 5px;"></div> </div> <p style="text-align: center;">「双」カ</p>	
30 (C-14)	胴部	<p>南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛 南無阿耨陀佛</p> <p style="text-align: right;">圓阿耨陀佛 <input type="checkbox"/> 明五年</p>	
31 (D-39)	頸部	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
	胴部	<p>佛陀阿無南佛陀阿無南佛陀阿無南</p> <p style="text-align: center;">取捨四年 三月十日 覺阿耨陀佛</p>	
32 (B-13)	頸部	南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛	
	鐔部上面	佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛	
	鐔部下面	南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛南無阿耨陀佛	
	胴部	<p>佛陀阿無南佛陀阿無南 佛陀阿無南</p> <p>南無阿耨陀佛 <input type="checkbox"/></p> <p>南無阿耨陀佛 <input type="checkbox"/></p> <p>地藏大 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/></p> <p>南無 <input type="checkbox"/></p> <p style="text-align: right;">妙阿耨陀佛 寬正三年</p>	
	内面	佛 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	

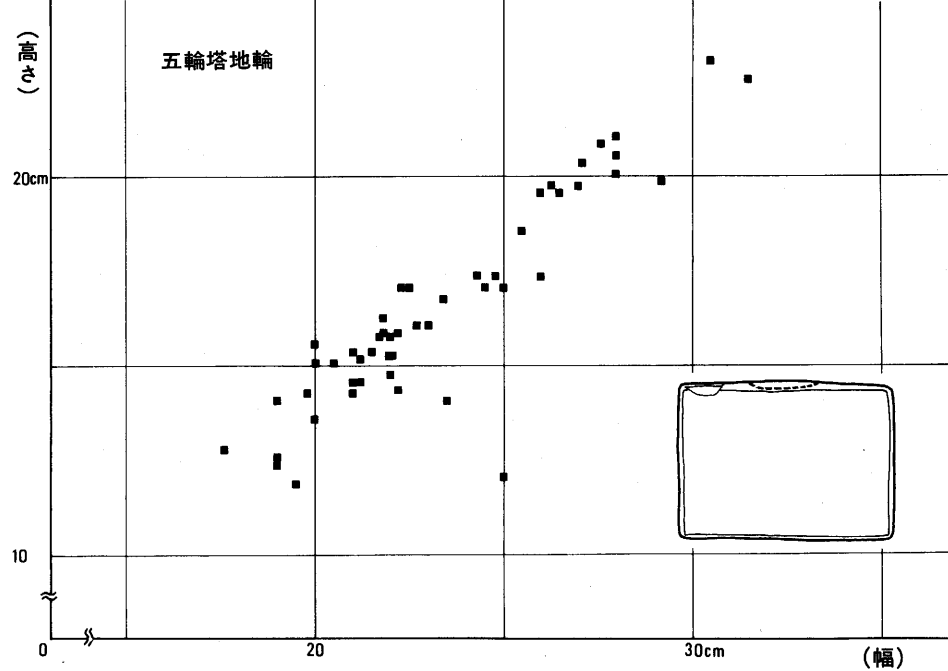
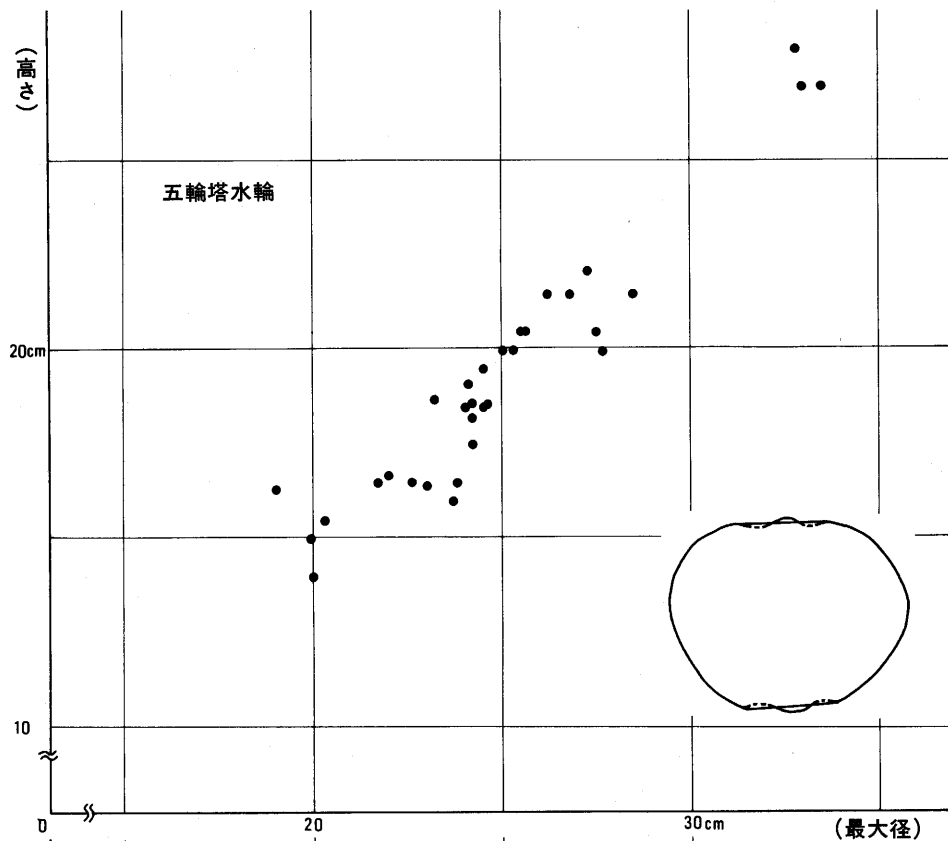
別表 1

番号	墨書位置	内 容
53 (B-14)	頸部	如來證涅槃永斷於生死若有 心應常得無量
54 (D-43)	頸部	□□□□□□□□□□□□□□□□
	胸部	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <input type="text"/> 西 阿 旃 陁 佛 十月 <input type="text"/> </div> <div style="text-align: center;"> 明 應 <input type="text"/> </div> <div style="text-align: center;"> <input type="text"/> </div> </div>
55 (C-15)	頸部	不攝衆念世十遍光 丁夙 工夙 捨取生佛世界方照明 現 可 瓦 改 現 工 夙 瓦 瓦 現
	胸部	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="text-align: center;"> 定往極 生□□ □ □ </div> <div style="text-align: center;"> 為寂滅 樂滅己 </div> <div style="text-align: center;"> 生滅是 滅法生 </div> <div style="text-align: center;"> 諸無常行 </div> <div style="text-align: center;"> 圓六月延 阿廿德 旃廿四 陁廿六 佛六日 </div> </div>
56 (C-31)	頸部	□□□□□□□□□□□□□□□□
	胸部	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> 不 明 </div> <div style="text-align: center;"> <input type="text"/> </div> <div style="text-align: center;"> <input type="text"/> </div> <div style="text-align: center;"> 南 <input type="text"/> </div> </div>
57 (C-10)	頸部	□□□□□□□□□□□□□□□□
	胸部	<div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> 大永^三年 □□ □□□ </div> </div>
58 (C-6)	頸部	□ ^カ 又 □ 又
	胸部	<div style="text-align: center;"> 存^カ現^カ又^カ瓦^カ現^カ (マ) </div>
59 (D-41)	頸部	□

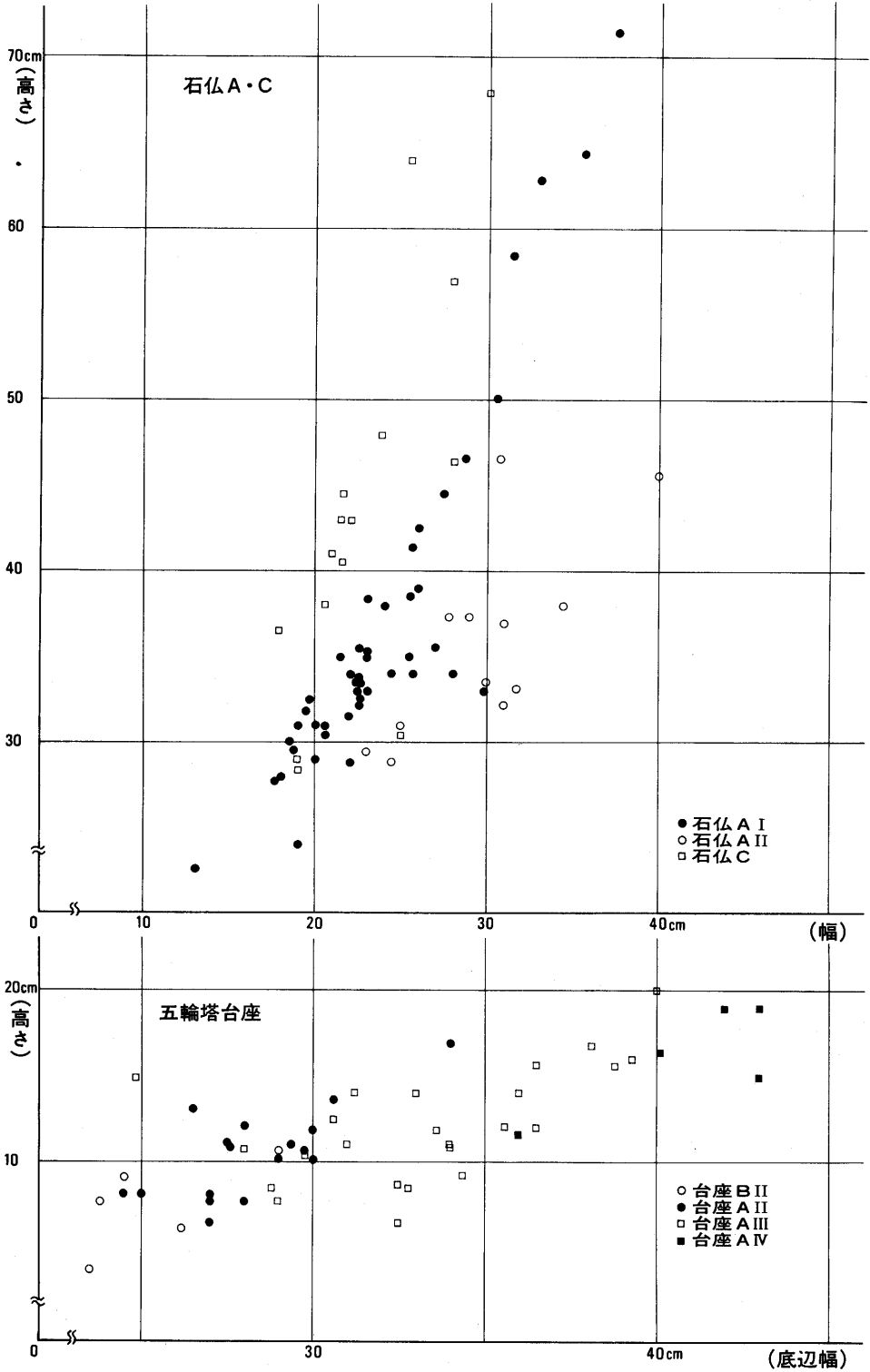


別表2 出土石造物法量表(1)

別表 1



別表 3 出土石造物法量表 (2)



別表 4 出土石造物法量表 (3)

圖 版





1. 上ノ段・高山地区（南から）



2. 上ノ段・高山地区（東から）



1. 台地上平坦面 (東から)



2. 南東斜面中腹平坦面 (西から)



1. 第1トレンチ全景(東から)



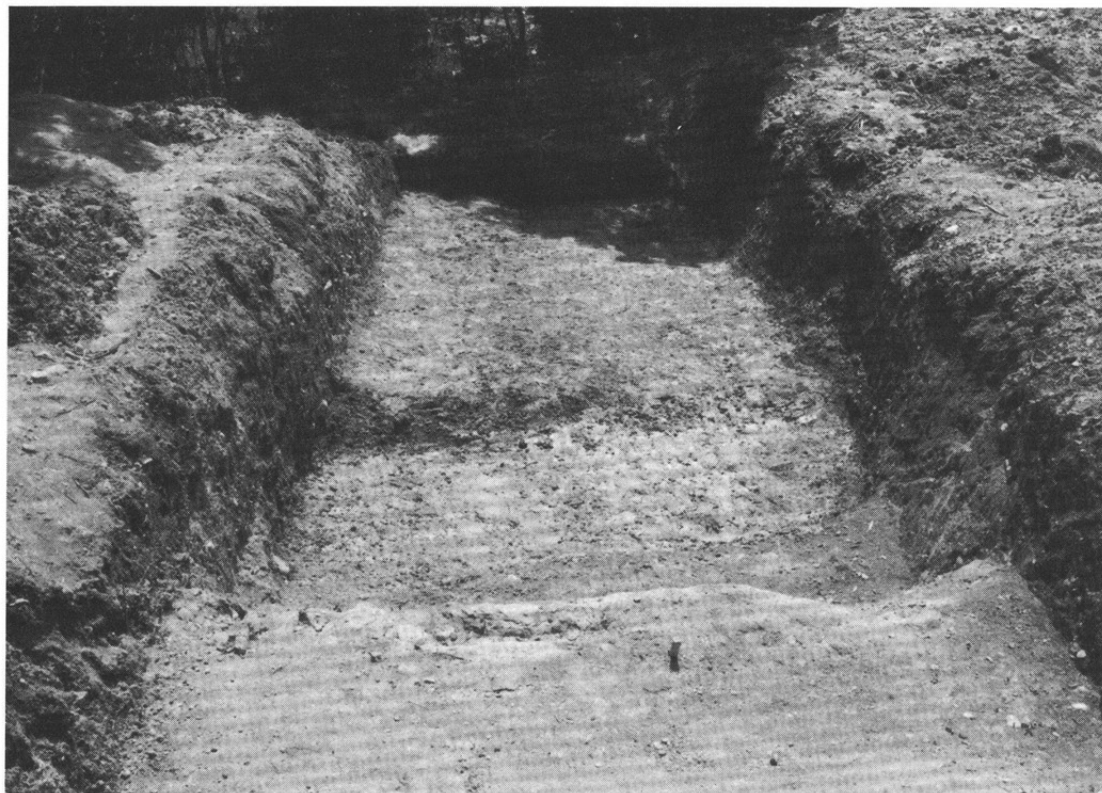
2. 第1トレンチ東端の段差(東から)



1. 第2トレンチ全景（北東から）



2. 第9トレンチ全景（南から）



1. 第3トレンチSD01 (北から)



2. 第3トレンチ全景 (南から)



1. 第5トレンチ、SD01西端(西から)



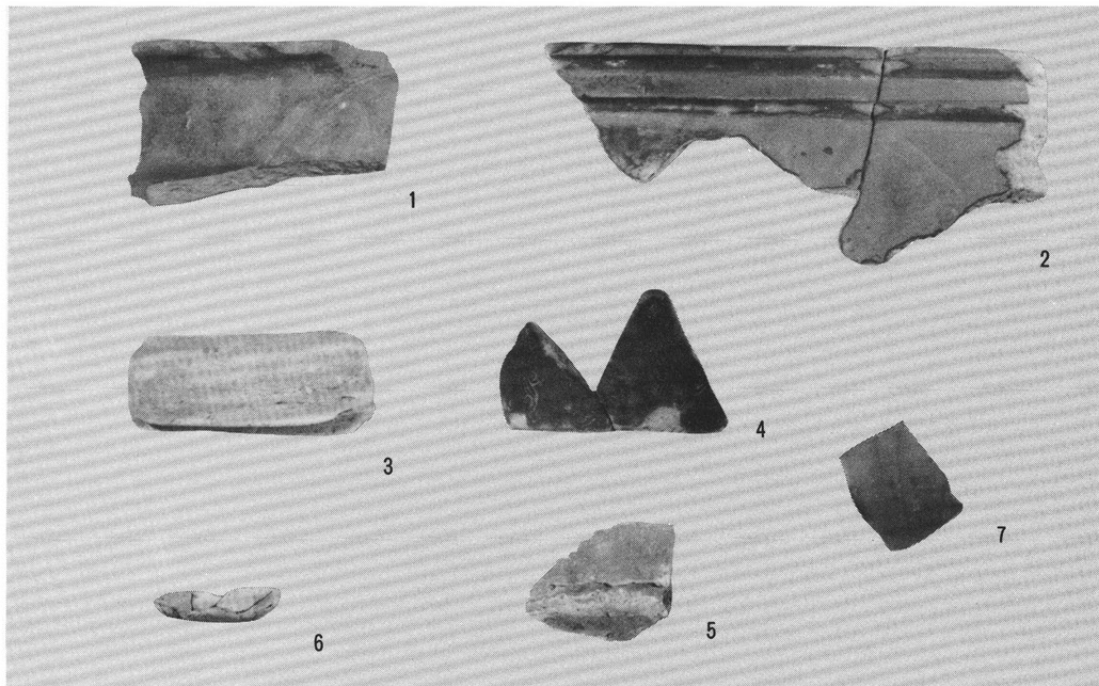
2. 第4トレンチ、SD01屈折部(北から)



1. 第8トレンチ全景(東から)



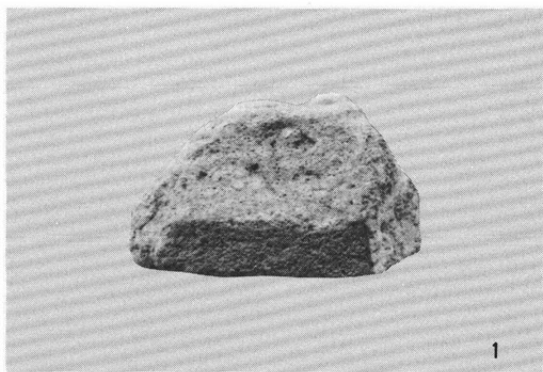
2. 第11トレンチ全景(南から)



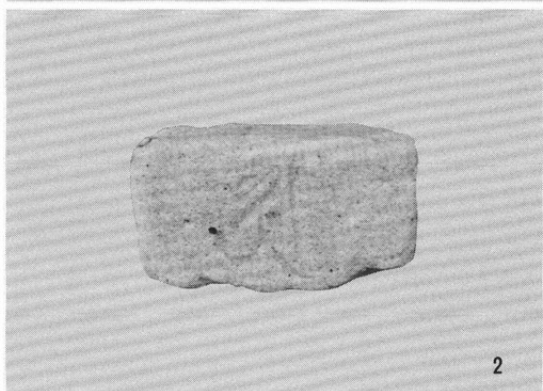
(1/3)



(1/3)



1



2

(1/3)



1. 城山地区遠景（西から）



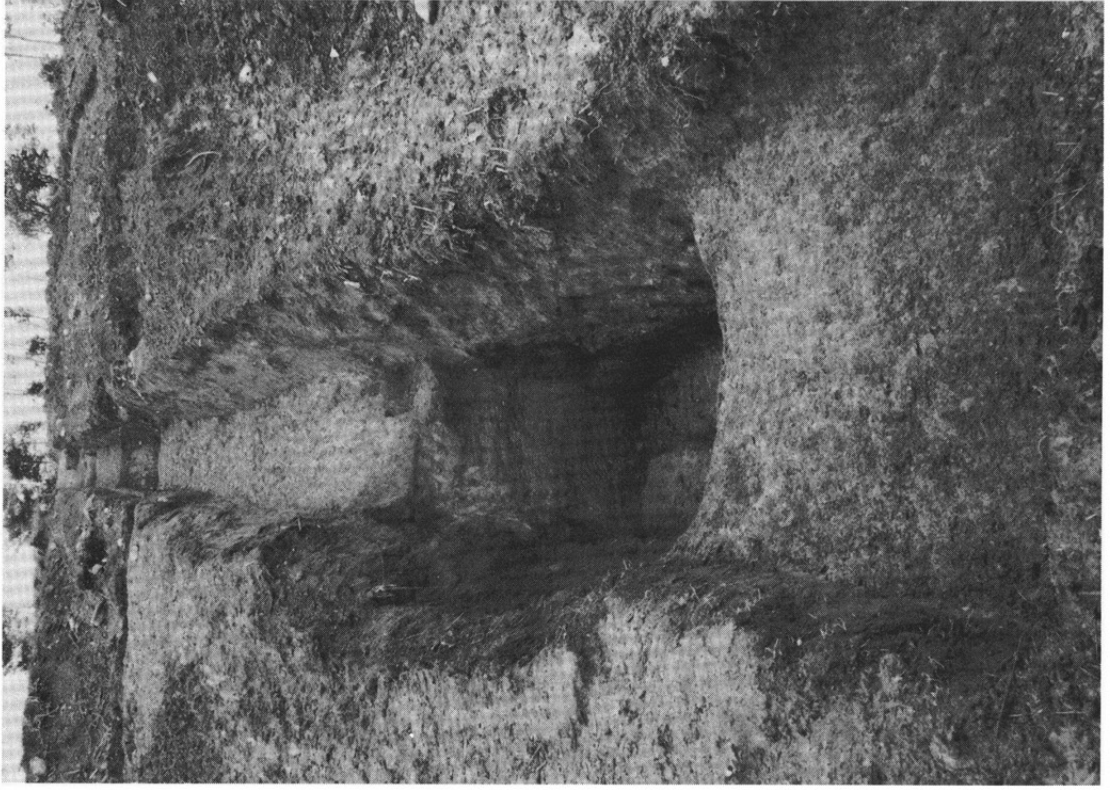
2. 城山地区近景（南から）



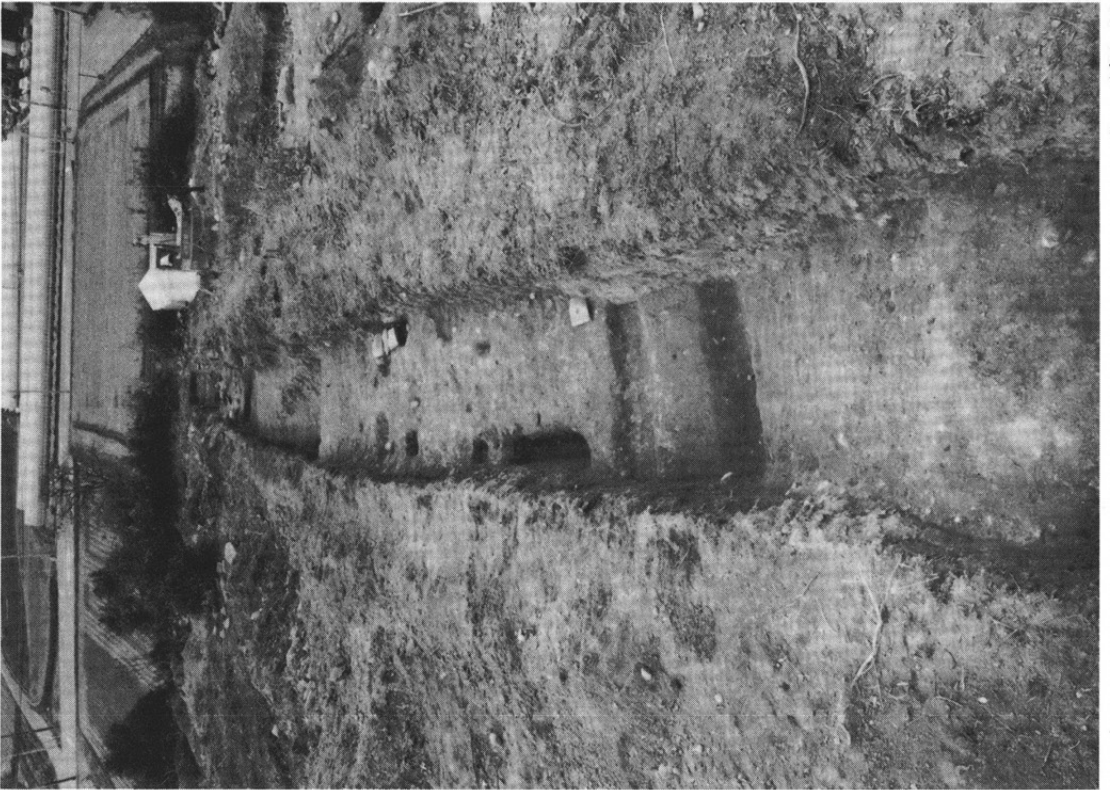
1. C区調査前（南から）



2. D区調査前（西から）



2. SD01 (西から)



1. (東から)



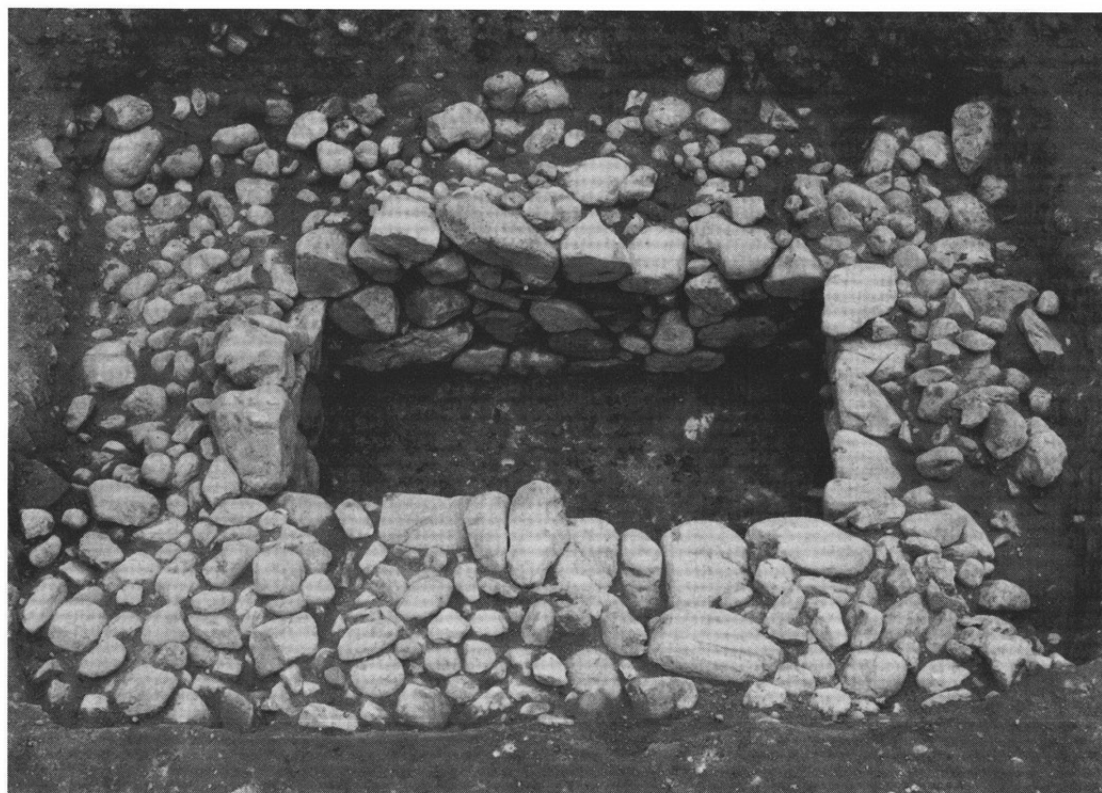
1. SK 0 1 石造物出土状況 (東から)



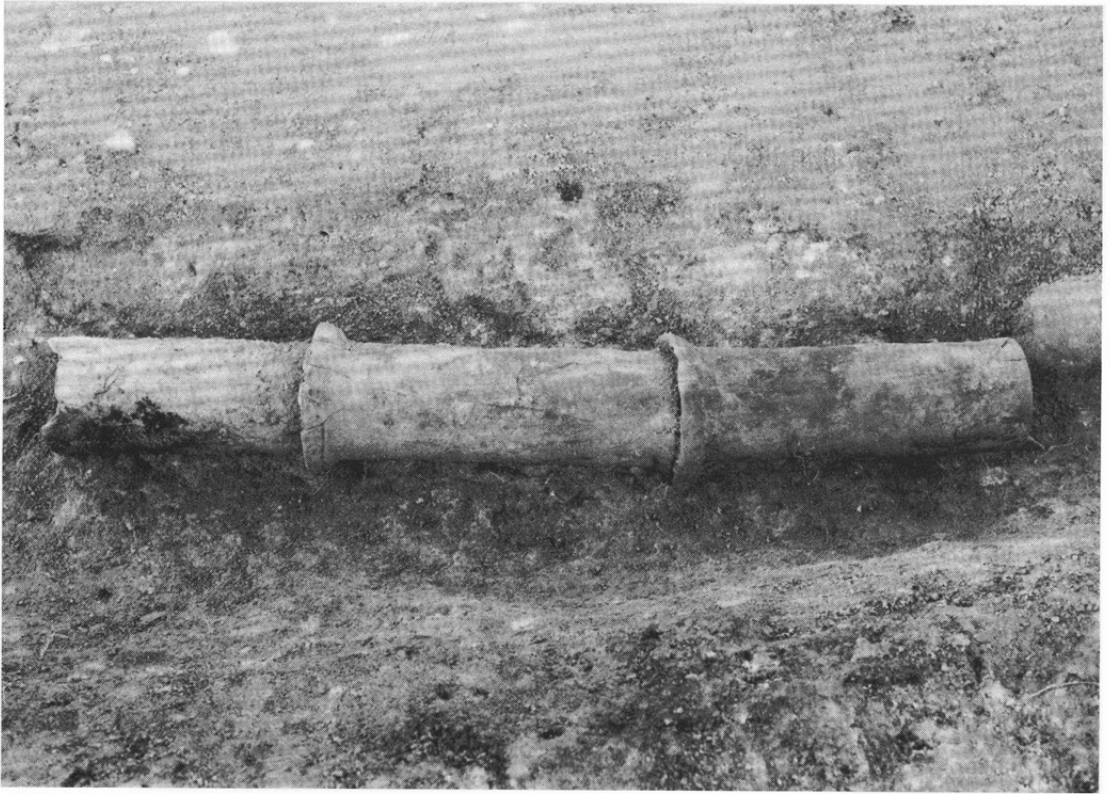
2. SD 0 1 内土層推積状況



1. E区検出遺構全景(南から)



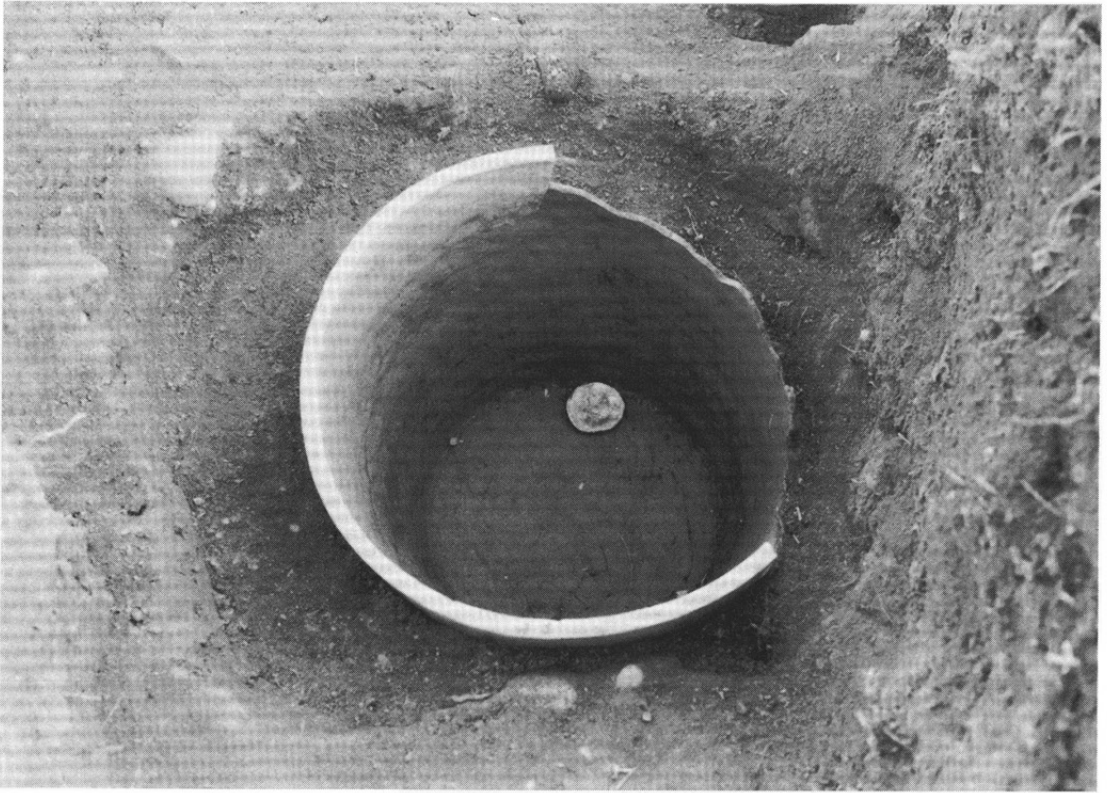
2. E区SX01(北から)



1. E区SD07土製管



2. E区SD06平瓦列

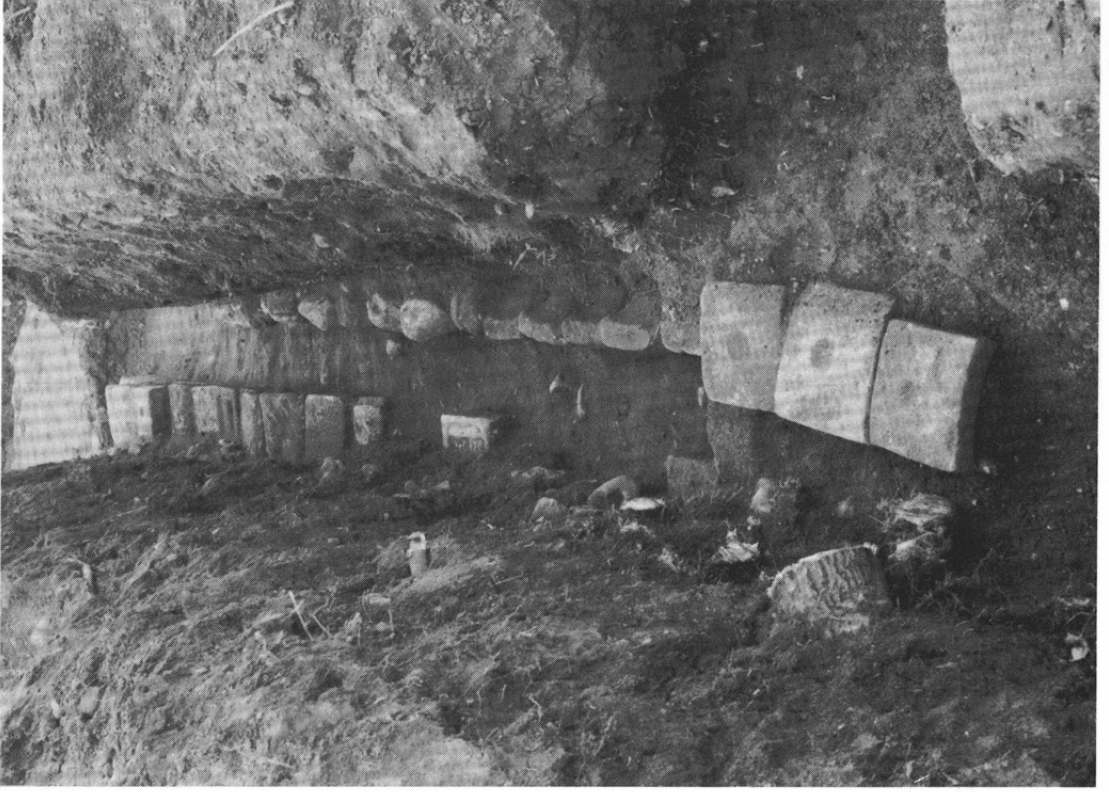


1. F区埋甕Ⅳ

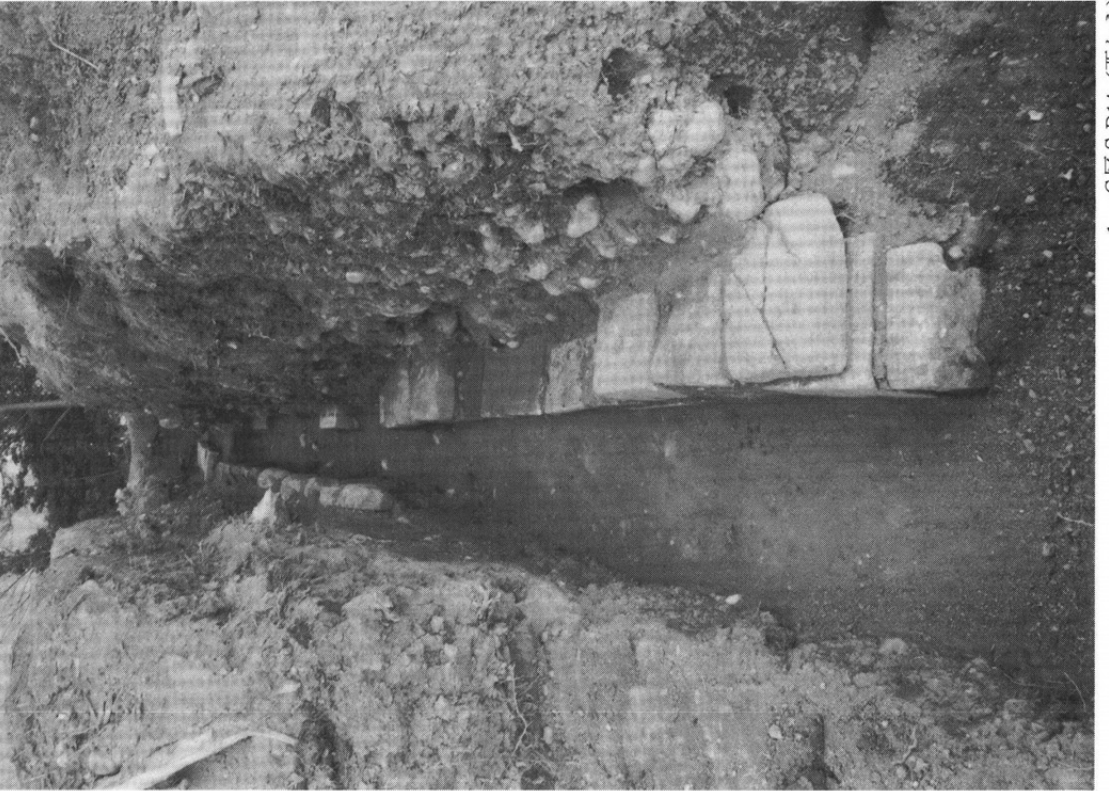


2. F区検出遺構全景(西から)

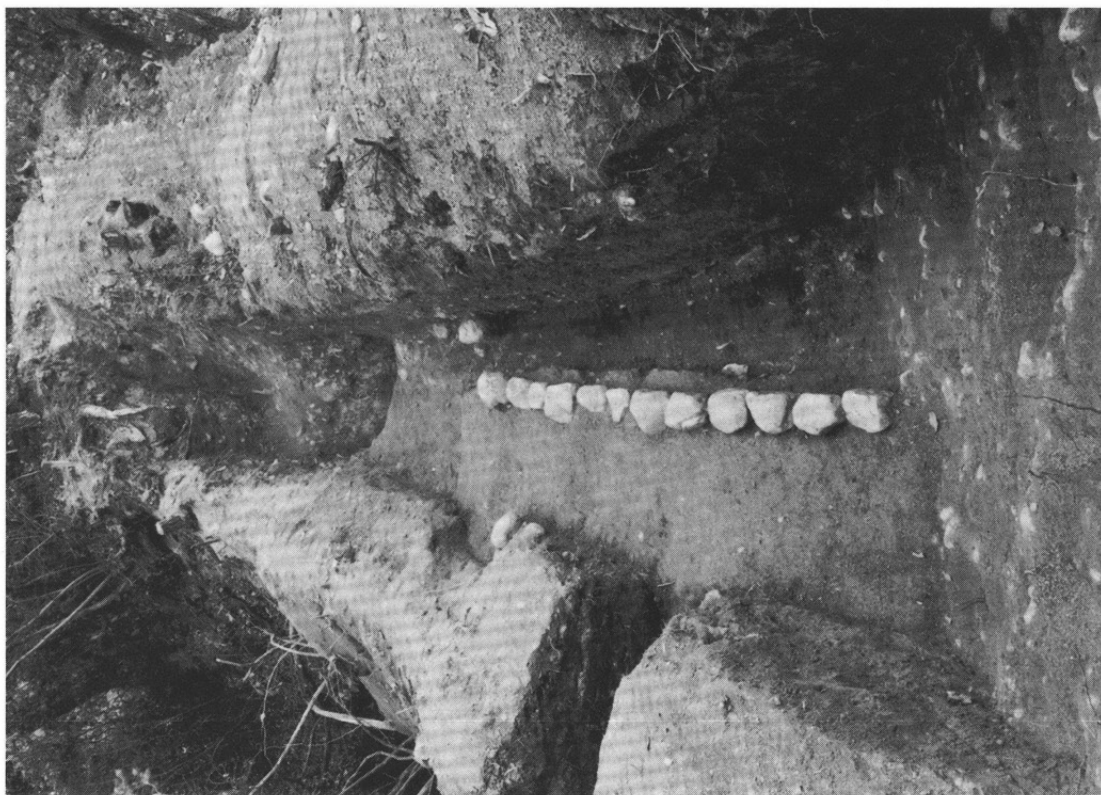
図版 17 城山地区検出城郭遺構⑤



2. G区SD14 (東から)



1. G区SD14 (西から)

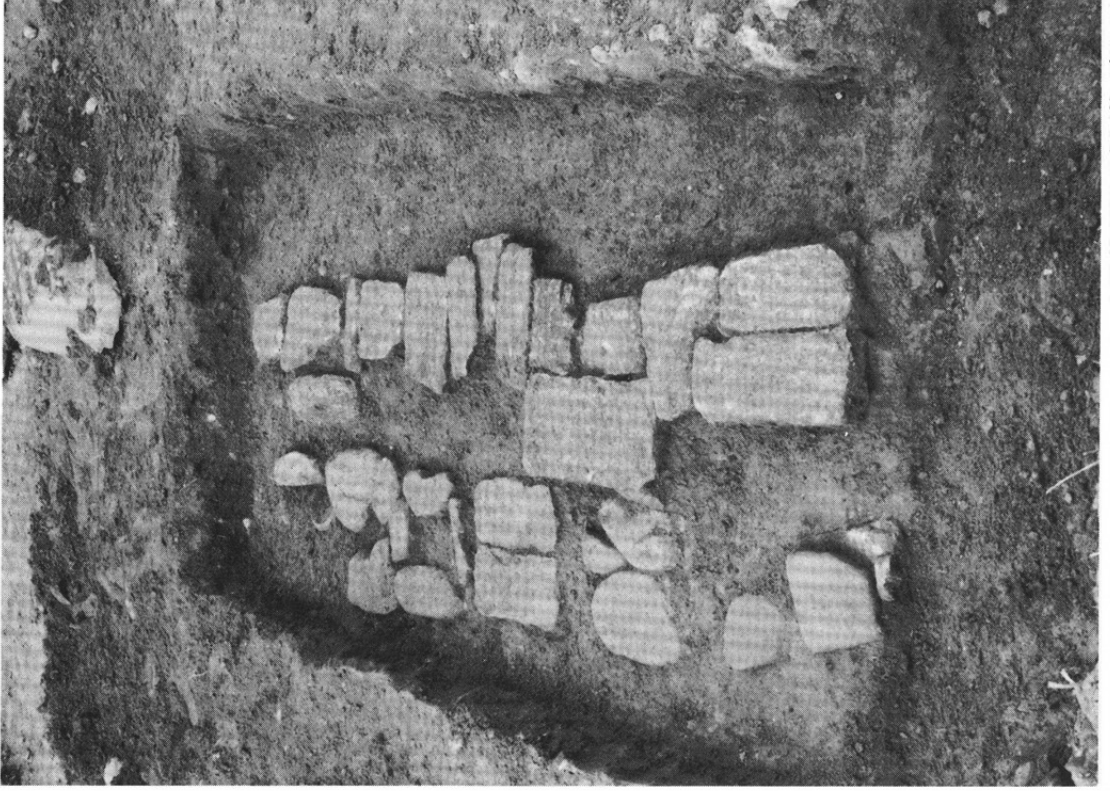


1. H区検出遺構(西から)



2. G区検出遺構(西から)

図版 19 城山地区検出中世墓地遺構(1)



2. B区南西墓地外部石敷(南から)



1. B区南西墓地埋葬主体(南から)



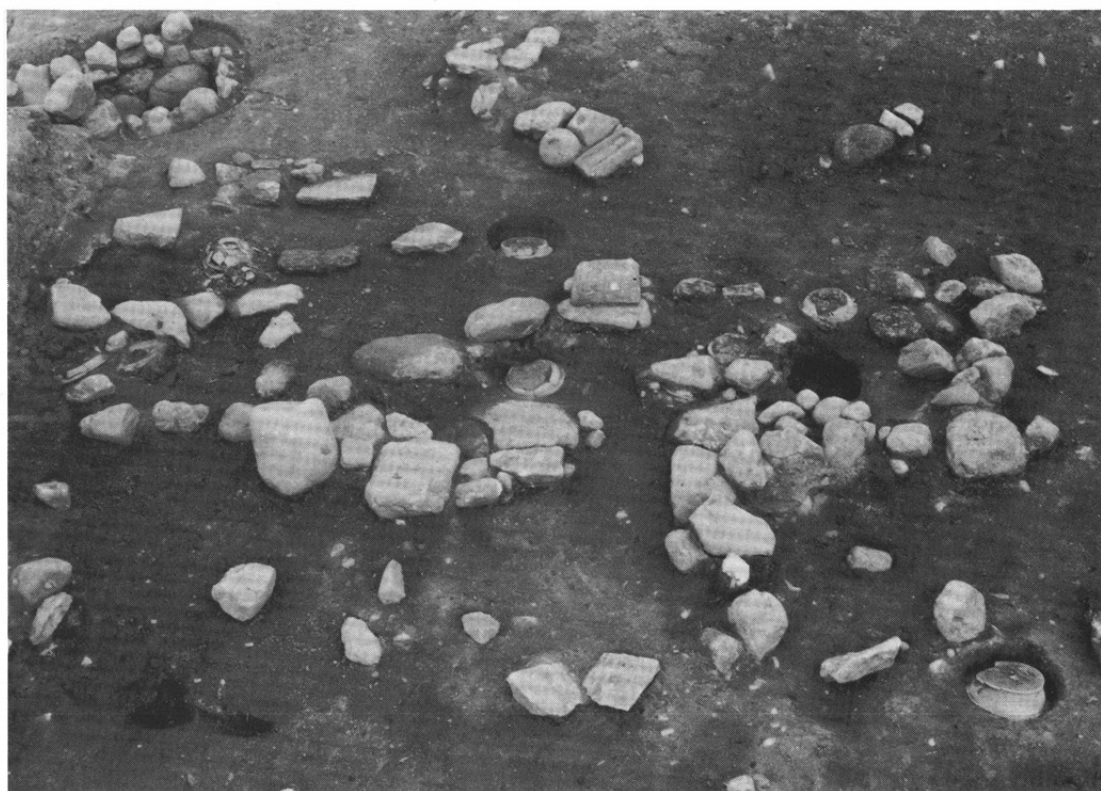
1. C区検出墓地全景 (西から)



2. C区石仏遺存状況 (西から)



1. C区第1トレンチ検出墓地(北から)



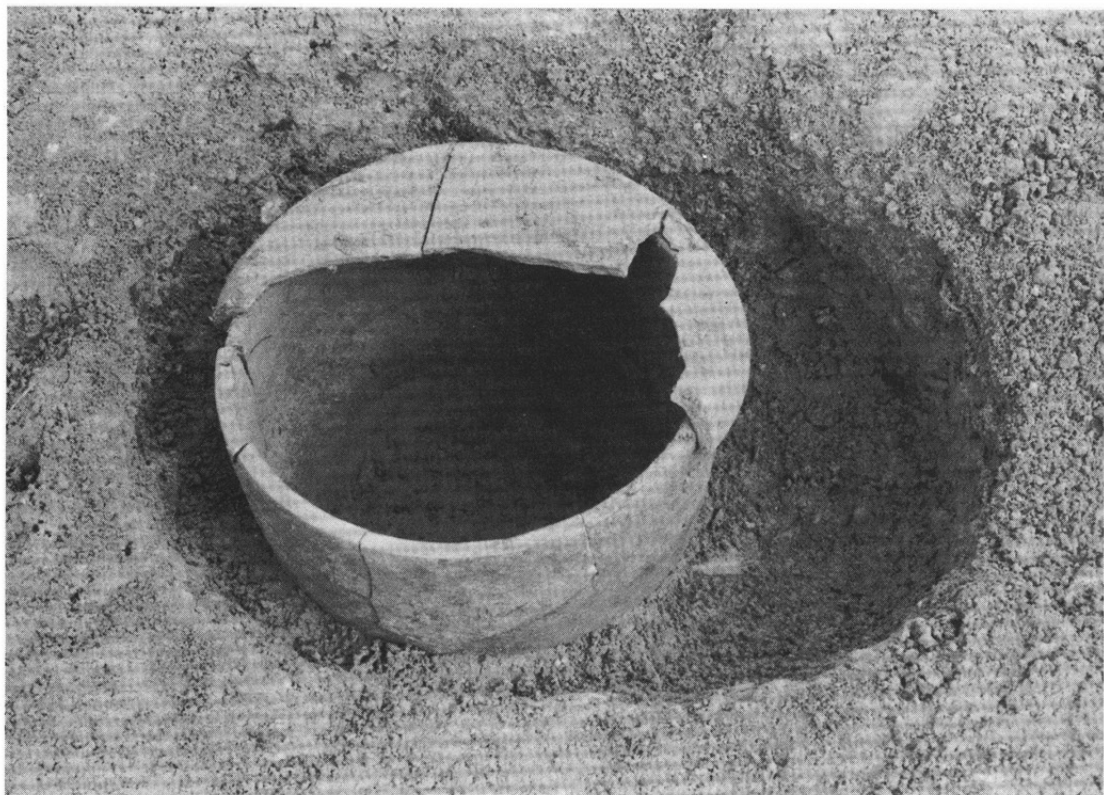
2. D区検出墓地全景(西から)



1. D-33~36墓外部石敷(西から)



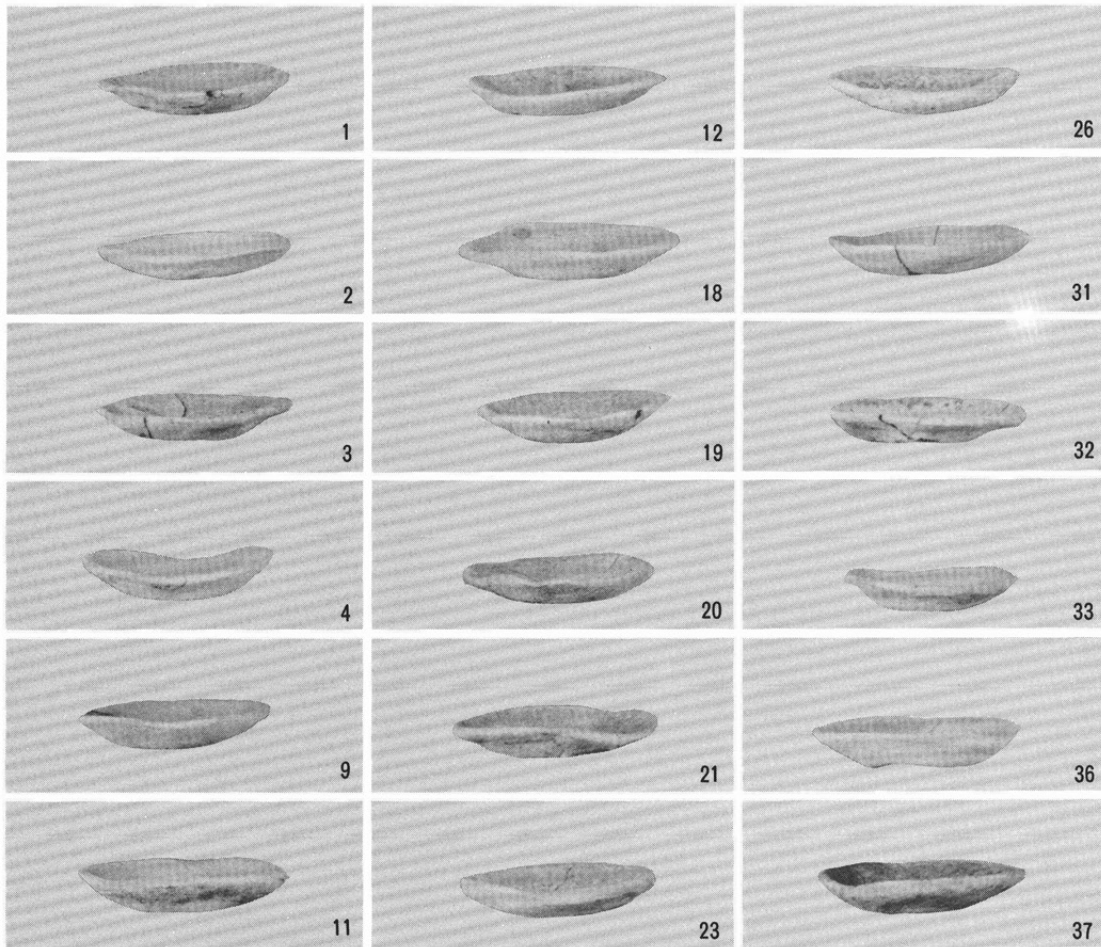
2. D区方形石敷施設(北から)



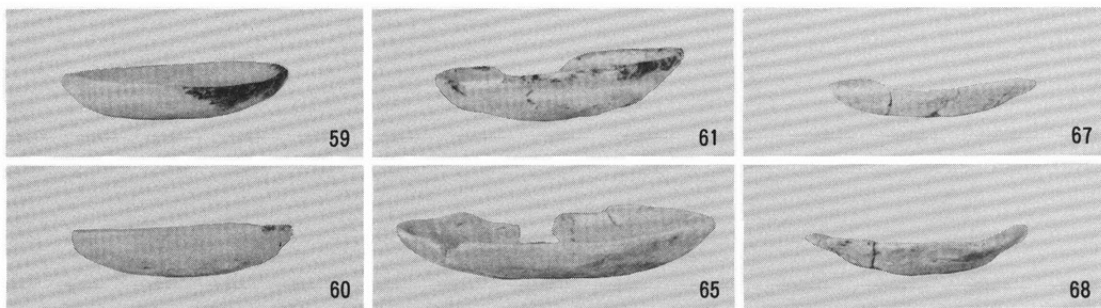
1. D-24墓 (西から)



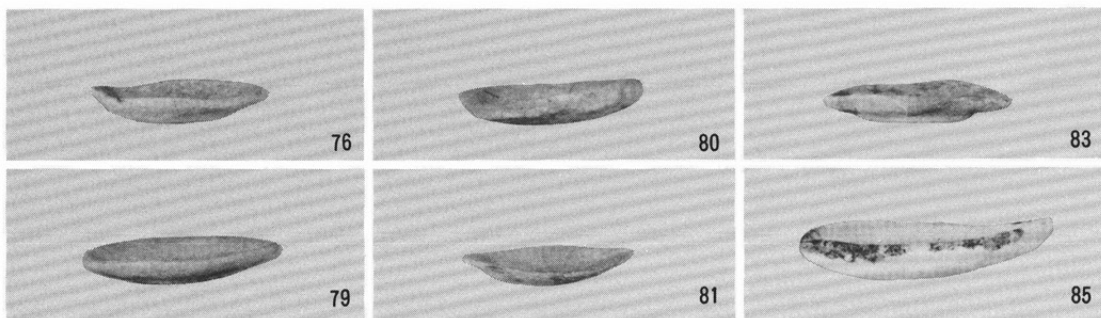
2. D区SX02 (東から)



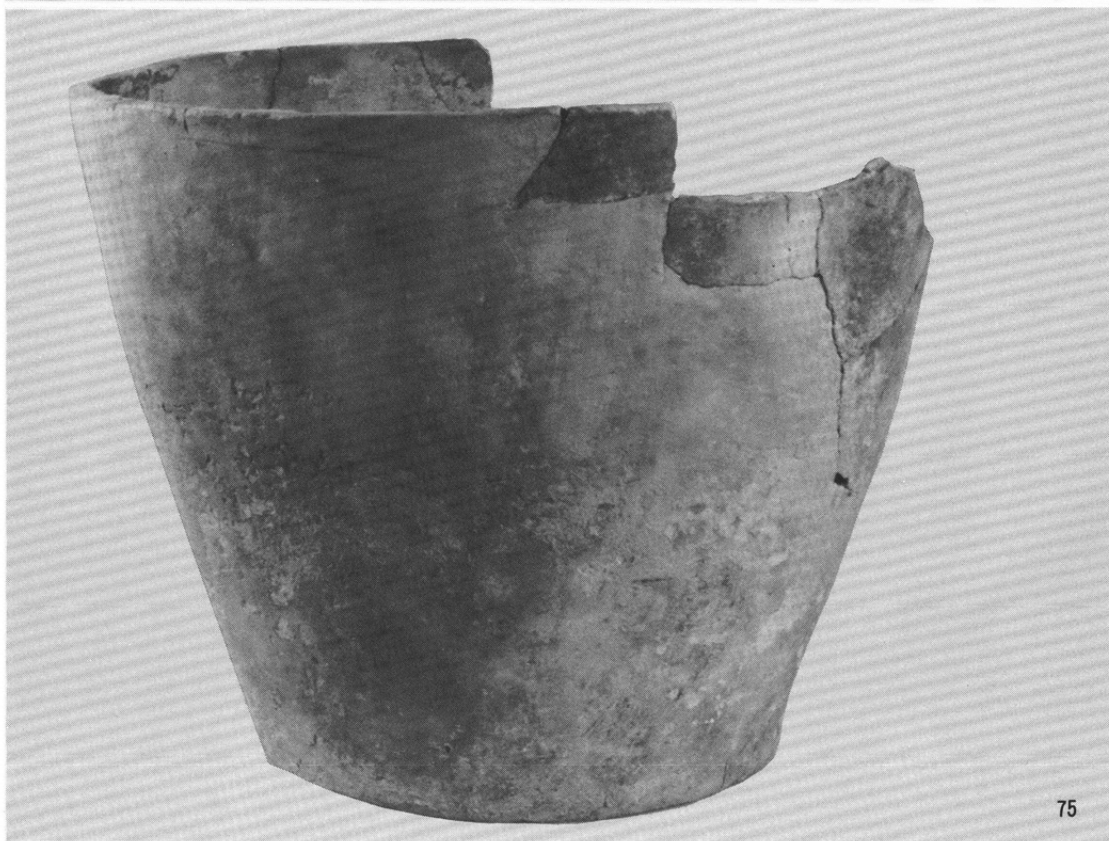
SK 0 4 出土土器 (1/3)

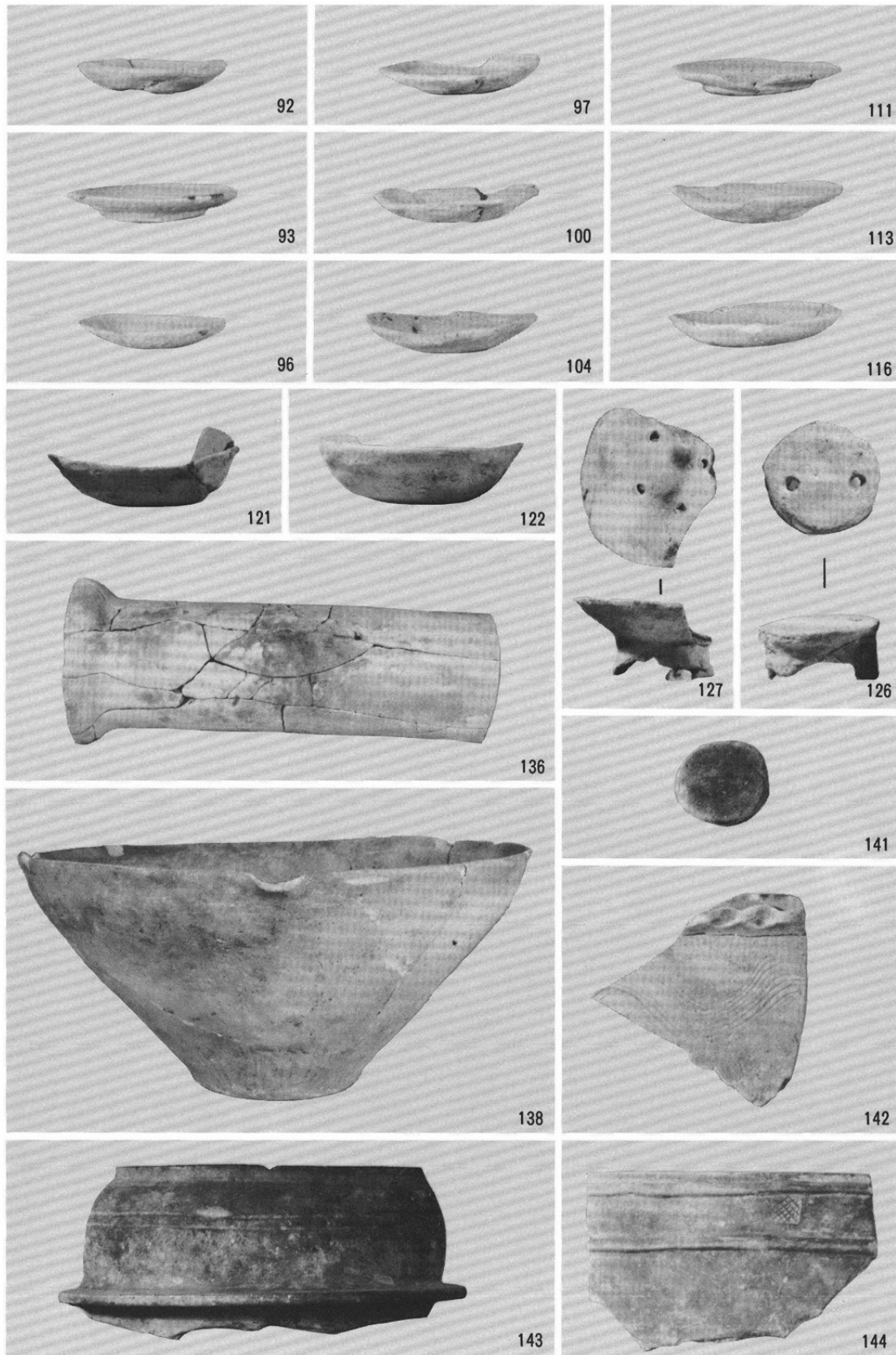


SX 0 1 出土土器 (1/3)



埋甕出土土器 (1/3)





SDO7・包含層出土土器(1/3)